

垂柳遺跡・五輪野遺跡

—南津軽広域農道改良事業に伴う遺跡調査報告—

1997年3月

青森県教育委員会



垂柳遺跡出土漆塗り盾状木製品



垂柳遺跡出土木製品



五輪野遺跡 B 区



五輪野遺跡出土仏具

序

本報告書は、南津軽広域農道建設に先立ち、路線内にある田舎館村垂柳遺跡の試掘調査と尾上町五輪野遺跡の発掘調査の成果をまとめたものであります。

調査の結果、垂柳遺跡では鉢や石斧などの木製品や漆塗り盾状木製品が出土しました。このことは、かつて「弥生時代の常識」を覆して全国的な注目を集めた垂柳遺跡にとっての新たな一面を明らかにすることとなり、遺跡の保存へとつながりました。

また、五輪野遺跡では鏡、柄香炉などの仏具が出土しました。これは本県に仏教文化がどのように波及してきたかを考える上で重要な資料でございます。

このような成果を踏まえ、本書が今後の文化財保護や地域の古代史研究にいささかでもお役に立てば幸いに存じます。

最後に、調査の実施および報告書の作成にあたって賜りました関係各位の御指導、御協力に対し、厚く御礼申し上げます。

平成9年3月

青森県教育委員会

教育長 松 森 永 祐

例　　言

- 1 本報告書は、南津軽広域農道改良事業に伴い、平成7年度に青森県埋蔵文化財調査センターが実施した田舎館村垂柳遺跡の試掘調査と、尾上町五輪野遺跡の発掘調査の報告書である。
- 2 遺跡の青森県登録番号は垂柳遺跡32002、五輪野遺跡28004である。
- 3 本報告書の執筆者名は依頼原稿については文頭に、その他については各節の末尾に付した。
- 4 資料の同定、分析等は次の方々に依頼した。

放射製炭素の年代測定	学習院大学	木越邦彦
鉄器の解析	岩手県立博物館	赤沼英男
須恵器の分析	奈良教育大学	三辻利一
遺跡周辺の地形と地質	八戸市文化財保護審議委員	松山 力
石器の石質鑑定	八戸市文化財保護審議委員	松山 力
種子の同定	大阪千代田短期大学	粉川昭平
- 5 引用・参考文献については巻末に収めた。
- 6 土器の整理及び表作成は新山隆男、木製品の整理及び表作成は杉野森淳子が担当した。
- 7 発掘調査および報告書作成にあたって下記の諸氏から御協力、御助言を得た（敬称略、順不同）
阿部美杉、荒井格、赤沢靖章、伊藤由美子、宇部則保、遠藤正夫、岡田康博、岡村道雄、小保内裕之、木村護栄、工藤哲司、工楽普通、児玉大成、斎藤正、斎野裕彦、佐々木まり子、佐藤甲二、佐藤裕一、設楽博己、須藤隆、高島成侑、武田嘉彦、田辺征夫、時枝務、原田一敏、古谷毅、望月幹夫、松浦有一郎、山田昌久、尾上町文化財審議委員、東日本の水田跡を考える会、田舎館村歴史民俗資料館

凡　例

- 1 遺構、遺物等の縮尺はそれぞれの挿図中に示した。
- 2 土層等の色調表現には「新版標準土色帖」(農林水産省農林水産技術会議事務局監修)を参照した。
- 3 遺物、遺構の実測図における表現は以下のとおりである。
 - ・観察表中に残存率50%以下と示した遺物の実測図は全て復元実測である。
 - ・須恵器は断面黒塗り、土師器は断面白抜きとした。図中の矢印はヘラ削りの方向を示す。
 - ・土師器表裏面の網かけ部は油煙の付着部を示す。
 - ・羽口の網かけ部は還元部を示す。
 - ・上記以外の表現については必要に応じて挿図中に凡例を示した。
- 4 遺物観察表は実測図に表現できない項目を示した。観察表の凡例は以下のとおりである。
 - ・胎土への混入物は、w = 白色粒子(Whit)、b = 黒色粒子(black)、r = 赤色粒子(red)、c = 透明粒子(clear)、s = 砂、ss = 粗砂、針 = 白色針状物質を示す。多いものから順に列挙した。
 - ・残存率は実測図に示した部位における現存部の比率であり、器形全体に占める残存の度合いを示すものではない。
 - ・法量の単位はcmである。()内の数値は推定値を表し、< >内の数値は現存値を表す。
 - ・焼成は良好なものをA、不良なものをCとした。
- 5 垂柳遺跡第1号水路跡および第1号大畦の遺物観察表の分類欄は遺構外出土遺物の土器分類に準ずる。
- 6 土層の注記における混入物の大きさの表現は以下のとおりとした。粒状の混入物は、「粒」=径2mm以下のもの、「中粒」=2~5mm程度のもの、「大粒」=5~10mm程度のもの、塊状の混入物は、「小塊」=径10mm以下のもの、「大塊」=径20~50mm程度のものとした。それ以上のものはそれぞれ径を表現した。
- 7 木製品の木取りは、実測図断面に年輪方向を模式的に描くことで表現した。

本文目次

序文	
例言	
第Ⅰ章 発掘調査に至る経過	1
第1節 調査要項	1
第2節 調査方法	3
第3節 調査経過	4
第4節 周辺の遺跡	5
第5節 垂柳遺跡、五輪野遺跡と周辺の地形・地質	8
第Ⅱ章 垂柳遺跡	15
第1節 調査の概要	17
第2節 遺構の配置	17
第3節 水路跡	22
第4節 大畦	47
第5節 遺構外出土遺物	51
第6節 縄文時代の遺物	71
第Ⅲ章 五輪野遺跡A区	91
第1節 A区の概要	93
第2節 遺構の配置	93
第3節 土坑	96
第4節 流路跡	119
第5節 A区出土の縄文土器	122
第6節 A区出土の弥生土器	135
第7節 A区出土の奈良・平安時代の土器	138
第8節 A区出土の木製品	154
第Ⅳ章 五輪野遺跡B区	197
第1節 B区の概要	199
第2節 遺構の配置	199
第3節 住居跡	199
第4節 土坑	282
第5節 溝跡	305
第Ⅴ章 まとめ	316
第1節 垂柳遺跡のまとめ	316
第2節 五輪野遺跡のまとめ	321
引用文献	324
第VI章 自然科学的分析	325
第1節 五輪野遺跡出土須恵器の螢光X線分析	325
第2節 垂柳遺跡出土炭化材の放射性炭素年代測定結果	327
第3節 五輪野遺跡出土の鉄器の材質	327
写真図版	339
報告書抄録	406

挿図目次

図1 周辺の遺跡	6	図40 遺構外出土土器出土状態(3)	54
図2 地形区分図	9	図41 遺構外出土土器出土状態(4)	55
図3 垂柳遺跡の土層粒柱図	11	図42 遺構外出土土器出土状態(5)	56
図4 五輪野遺跡の土層柱状図	14	図43 遺構外出土土器出土状態(6)	57
図5 垂柳遺跡発掘調査区	18	図44 遺構外出土土器出土状態(7)	58
図6 垂柳遺跡遺構配置図	19	図45 遺構外出土土器(1)	60
図7 垂柳遺跡土層断面図	20	図46 遺構外出土土器(2)	61
図8 碓接地の調査	21	図47 遺構外出土土器(3)	62
図9 第1号水路跡	23	図48 遺構外出土土器(4)	63
図10 第1号水路跡A、B地区土層断面	24	図49 遺構外出土土器(5)	64
図11 第1号水路跡A、B地区遺物出土状態	25	図50 遺構外出土土器(6)	65
図12 第1号水路跡C地区遺物出土状態	26	図51 遺構外出土土器(7)	66
図13 第1号水路跡D、E地区遺物出土状態	27	図52 遺構外出土土器(8)	67
図14 第1号水路跡出土土器(1)	28	図53 遺構外出土土器(9)	68
図15 第1号水路跡出土土器(2)	29	図54 遺構外出土土器(10)	69
図16 第1号水路跡出土石器(1)	30	図55 遺構外出土土器(11)	70
図17 第1号水路跡出土石器(2)	31	図56 遺構外出土石器	70
図18 第1号水路跡出土石製品	31	図57 第1号水路跡下層出土繩文土器(1)	73
図19 第1号水路跡出土樹皮	31	図58 第1号水路跡下層出土繩文土器(2)	74
図20 第1号水路跡出土木製品(1)	32	図59 第1号水路跡下層出土繩文土器(3)	75
図21 第1号水路跡出土遺物(2)	33	図60 第1号水路跡下層出土繩文土器(4)	76
図22 第1号水路跡出土木製品(3)	34	図61 第1号水路跡下層出土石器	77
図23 第1号水路跡出土木製品(4)	35	図62 五輪野遺跡グリッド配置図	94
図24 第1号水路跡出土木製品(5)	36	図63 五輪野遺跡A区遺構配置図	95
図25 第1号水路跡出土木製品(6)	37	図64 A区土坑(1)(SK1、2、3、4、5)	110
図26 第1号水路跡出土木製品(7)	38	図65 A区土坑(2)(SK6、7、8、9、10、11、 12、13、14)	111
図27 第1号水路跡出土木製品(8)	39	図66 A区土坑(3)(SK15、16、17、18、19、20、21)	112
図28 第1号水路跡出土木製品(9)	40	図67 A区土坑(4)(SK22、23、25、26、34)	113
図29 第2号水路跡	43	図68 A区土坑(5)(SK27、28、29、30、31、32、33)	114
図30 第3号水路跡	44	図69 A区土坑(6)(SK35、36、37、38、39、40、 41、42、43)	115
図31 第4号水路跡	44	図70 A区土坑(7)(SK44、46、47、48、49、50、 51、58、59)	116
図32 第5号水路跡	45	図71 A区土坑(8)(SK52、53、54、55、56、57、 60、61)	117
図33 第6号水路跡	45	図72 A区3号土坑出土木製品	119
図34 第7号水路跡	46	図73 第1号流路跡周辺木製品出土状態	120
図35 第1号大畦東側	48	図74 第1号流路跡土層断面図	121
図36 第1号大畦西側	49		
図37 第1号大畦出土土器	50		
図38 遺構外出土土器出土状態(1)	52		
図39 遺構外出土土器出土状態(2)	53		

図75 A区出土繩文土器(1).....	126	図116 A区出土木製品(18)	175
図76 A区出土繩文土器(2).....	127	図117 A区出土木製品(19)	176
図77 A区出土繩文土器(3).....	128	図118 A区出土木製品(20)	177
図78 A区出土繩文土器(4).....	129	図119 A区出土木製品(21)	178
図79 A区出土繩文土器(5).....	130	図120 B区遺構配置図	200
図80 A区出土繩文土器(6).....	131	図121 第1号住居跡	201
図81 A区出土繩文土器(7).....	132	図122 第2号住居跡	202
図82 A区出土繩文土器(8).....	133	図123 第2号住居跡出土遺物	202
図83 A区出土繩文土器(9).....	134	図124 第3号住居跡	203
図84 A区出土弥生土器(1).....	139	図125 第3号住居跡出土遺物	204
図85 A区出土弥生土器(2).....	140	図126 第4号住居跡	204
図86 A区出土弥生土器(3).....	141	図127 第5号住居跡	205
図87 A区出土弥生土器(4).....	142	図128 第6号住居跡	206
図88 A区出土弥生土器(5).....	143	図129 第7号住居跡	207
図89 A区出土弥生土器(6).....	144	図130 第7号住居跡出土遺物	208
図90 A区出土弥生土器(7).....	145	図131 第8号住居跡	209
図91 A区出土土師器(1).....	146	図132 第9号住居跡	210
図92 A区出土土師器(2).....	147	図133 第9号住居跡出土遺物	211
図93 A区出土土師器(3).....	148	図134 第11号住居跡出土遺物	211
図94 A区出土土師器(4)、紡錘車、鉄製品	149	図135 第11号住居跡	212
図95 A区出土須恵器(1).....	150	図136 第12号住居跡	213
図96 A区出土須恵器(2).....	151	図137 第12号住居跡出土遺物	213
図97 A区出土須恵器(3).....	152	図138 第13号住居跡	214
図98 A区出土須恵器(4).....	153	図139 第14号住居跡出土遺物	215
図99 A区出土木製品(1).....	155	図140 第14号住居跡	216
図100 A区出土木製品(2)	156	図141 第15号住居跡	217
図101 A区出土木製品(3)	157	図142 第15号住居跡出土遺物	218
図102 A区出土木製品(4)	158	図143 第16号住居跡	219
図103 A区出土木製品(5)	159	図144 第16号住居跡出土遺物	219
図104 A区出土木製品(6)	160	図145 第17号住居跡	220
図105 A区出土木製品(7)	161	図146 第17号住居跡カマド	221
図106 A区出土木製品(8)	162	図147 第17号住居跡出土遺物	222
図107 A区出土木製品(9)	163	図148 第18号住居跡	223
図108 A区出土木製品(10)	164	図149 第18号住居跡出土遺物	224
図109 A区出土木製品(11)	165	図150 第19号住居跡	225
図110 A区出土木製品(12)	166	図151 第20号住居跡	226
図111 A区出土木製品(13)	167	図152 第20号住居跡出土遺物	227
図112 A区出土木製品(14)	169	図153 第21号住居跡	228
図113 A区出土木製品(15)	171	図154 第21号住居跡出土遺物	228
図114 A区出土木製品(16)	173	図155 第22号住居跡	229
図115 A区出土木製品(17)	174	図156 第22号住居跡出土遺物	230

図157 第23号住居跡	231	図198 第45号住居跡出土遺物	268
図158 第23号住居跡	232	図199 第46号住居跡	268
図159 第23号住居跡出土遺物	233	図200 第47号住居跡	269
図160 第24号住居跡	233	図201 第47号住居跡出土遺物	270
図161 第24号住居跡カマド	234	図202 第48号住居跡	271
図162 第24号住居跡出土遺物	235	図203 第49号住居跡	272
図163 第25号住居跡	236	図204 第50号住居跡	273
図164 第26号住居跡	237	図205 第50号住居跡出土遺物	273
図165 第26号住居跡カマド	238	図206 第51号住居跡	274
図166 第27号住居跡	239	図207 第51号住居跡出土遺物	275
図167 第27号住居跡出土遺物	239	図208 第52号住居跡	276
図168 第29号住居跡	240	図209 第53号住居跡	277
図169 第29号住居跡出土遺物	240	図210 第55号住居跡	278
図170 第30号住居跡	241	図211 第55号住居跡出土遺物	279
図171 第30号住居跡出土遺物(1)	242	図212 第57号住居跡	280
図172 第30号住居跡出土遺物(2)	243	図213 第58号住居跡出土遺物	281
図173 第31号住居跡	244	図214 B区土坑(1)(S K 1、5、6、9、10、11、 12、15)	292
図174 第31号住居跡出土遺物	244	図215 B区土坑(2)(S K16、17、18、19、20、21)	293
図175 第32号住居跡	245	図216 B区土坑(3)(S K22、23、24、25、26、27、 28、48、53)	294
図176 第32号住居跡	246	図217 B区土坑(4)(S K30、31、32、33、34、36、 38、40)	295
図177 第32号住居跡出土遺物	247	図218 B区土坑(5)(S K41、42、43、44、49、62、 64、66)	296
図178 第33号住居跡	249	図219 B区土坑出土遺物(1)(S K11、18、25)	300
図179 第33号住居跡カマド	250	図220 B区土坑出土遺物(2)(S K25、27、29、 34)	301
図180 第33号住居跡出土遺物(1)	251	図221 B区土坑出土遺物(3)(S K35、40)	302
図181 第33号住居跡出土遺物(2)	252	図222 B区土坑出土遺物(4)(S K40、48—1)	303
図182 第34号住居跡	253	図223 B区土坑出土遺物(5)(S K48—2、54、 66)	304
図183 第35号住居跡	254	図224 第1号溝跡	308
図184 第35号住居跡出土遺物	254	図225 B区第1号溝跡出土遺物	308
図185 第36号住居跡	255	図226 第2号溝跡	309
図186 第38号住居跡	256	図227 第3号溝跡	310
図187 第39号住居跡	257	図228 第4、5号溝跡	311
図188 第40号住居跡	258	図229 第6号溝跡	311
図189 第41号住居跡	259	図230 第7号溝跡	312
図190 第41号住居跡カマド	260	図231 第8、9号溝跡	312
図191 第41号住居跡出土遺物	261		
図192 第42号住居跡	262		
図193 第43号住居跡	263		
図194 第44号住居跡	264		
図195 第44号住居跡カマド	265		
図196 第44号住居跡出土遺物	266		
図197 第45号住居跡	267		

第Ⅰ章 発掘調査に至る経過

第1節 調査要項

1 調査目的

南津軽広域農道改良事業の実施に先立ち、当該地区に所在する垂柳遺跡の試掘調査及び五輪野遺跡の埋蔵文化財発掘調査を行い、その記録保存を図り、地域社会の文化財活用に資する。

2 調査期間

垂柳遺跡	平成7年5月9日～平成7年7月12日
五輪野遺跡	平成7年8月22日～平成7年12月20日

3 遺跡名および所在地

垂柳遺跡	南津軽郡田舎館村大字垂柳字松立56、外
五輪野遺跡	南津軽郡尾上町大字猿賀字明堂110、外

4 調査面積

垂柳遺跡	600平方メートル
五輪野遺跡	4,200平方メートル

5 調査委託者

青森県農林部農地建設課

6 調査受託者

青森県教育委員会

7 調査担当機関

青森県埋蔵文化財調査センター

8 調査協力機関

垂柳遺跡	田舎館村教育委員会、中南教育事務所
五輪野遺跡	尾上町教育委員会、中南教育事務所

9 垂柳遺跡調査参加者

調査指導員	村越 漢	青森大学教授（考古学）
調査協力員	白戸喜久藏	田舎館村教育委員会教育長
調査員	光谷 拓実	奈良国立文化財研究所主任研究官（植物材質学）
	粉川 昭平	元大阪市立大学教授（種子学）
	松山 力	八戸市文化財審議委員（地質学）
	葛西 励	青森短期大学助教授（考古学）

調査担当者 青森県埋蔵文化財調査センター
調査第二課
総括主幹
調査第二課長 鈴木 克彦
主 事 川口（太田原）潤、工藤 忍
調査補助員 高橋 涉、近藤友美
小野悦子、山上真一

10 五輪野遺跡調査参加者

調査指導員 村越 潔 青森大学教授（考古学）

調査協力員 須郷 健市 尾上町教育委員会教育長
調査員 松山 力 八戸市文化財審議委員（地質学）
高橋 潤 青森山田高等学校教諭（考古学）
鈴木 徹 黒石市教育委員会主査（考古学）
葛西 助 青森短期大学助教授（考古学）

調査担当者 青森県埋蔵文化財調査センター
調査第二課
総括主幹
調査第二課長 鈴木 克彦
主 事 川口（太田原）潤、工藤 忍
調査補助員 高橋 涉、近藤友美
小野悦子、山上真一

第2節 調査方法

1 垂柳遺跡の調査方法

垂柳遺跡は農道建設予定地のうち、約600平方メートルを試掘調査の対象とした。グリッドは平成4年度に田舎館村教育委員会が実施した隣接地の試掘調査G-11区のグリッドを延長して用いることとした。

1グリッドは $4 \times 4\text{ m}$ とし、北から南へ1、2、3と算用数字を、東から西へA、B、Cとアルファベットを付した。グリッドの呼称は北東隅の交点を読み取ることとした。

今回の試掘調査では、図6のように調査区を設定した。調査区は縦貫する現在の農道で東西に分断されている。便宜的に現農道の西側の調査区を西区、東側の調査区を東区と呼称する。西区にはTライインに沿うように 3 m 幅のトレンチを設定した(以下Tトレンチとする)。グリッド名ではT-1グリッドからT-41グリッドまでにあたるが、トレンチが寸断されている部分は現在の水路および畦畔である。このトレンチは遺構、遺物の出土状況に応じて適宜拡張した。

現農道の東側の調査区は、西側の調査区の遺構、遺物の出土状況や、それまでに実施された村教育委員会の試掘調査の成果を考慮して設定し、状況に応じて適宜拡張した。

周囲が水田であるため、放置するとすぐ冠水してしまうので、トレンチの壁際には排水路を掘削し、ポンプで排水しながら調査を実施した。遺構確認は、平面的な観察とともに、この時に掘削した排水路の断面観察も重視した。

遺構の調査にあたっては適宜セクションベルトを設定し、土層の堆積状況を観察しながら掘り下げた。実測図の縮尺は10分の1、20分の1を必要に応じて使い分けた。

写真撮影はカラーリバーサルフィルムとモノクロームの2種類のフィルムを使用した。

2 五輪野遺跡の調査方法

五輪野遺跡は地形的に北側の低地部と、南側の台地部に区分される。便宜的に前者をA区、後者をB区とする。

グリッドは建設予定の道路の中心杭をもとに設定した。1グリッドは $4 \times 4\text{ m}$ とし、北から南へ1、2、3と算用数字を、東から西へA、B、Cとアルファベットを付した。グリッドの呼称は北東隅の交点を読み取ることとした。

A区は当初試掘調査を実施し、その結果で対応を決めることとした。試掘調査はJ、N、R、Uの各ライインの西側に 3 m 幅のトレンチを設定して掘り下げを行なった。その結果、遺構、遺物が確認されたため、A区も全面調査を実施した。A区の周囲は現在水田で、調査区を横断する水路も複数存在することから、必要に応じて鋼矢板を打設し、ポンプによる排水をしながら調査を進めた。

B区の遺構は原則として2分法、4分法で調査したが、遺構の重複が激しいため、必要に応じて適宜サブトレンチを設け、土層の堆積状況を観察しながら精査した。実測図の縮尺は10分の1、20分の1を必要に応じて使い分けた。

写真撮影はカラーリバーサルフィルムとモノクロームの2種類のフィルムを使用した。

(太田原 潤)

第3節 調査経過

1 垂柳遺跡の調査経過

垂柳遺跡は平成7年5月9日に試掘調査を開始した。基準杭を打設し、Tトレンチから調査に着手した。

今回検出された遺構は5月中にはほとんどが確認され、6月は第1号水路を始めとする遺構の精査を中心とした。

6月上旬は主として第1号水路南西側から炭化板材、植物種子などの出土が相次いだ。6月下旬から7月上旬にかけては第1号水路北東側から漆塗木製品、石斧柄、鎌、杭を始めとする木製品、東北南部からの搬入品と考えられる壺などが相次いで出土した。

当初は6月28日までの予定であったが、調査期間を7月12日まで延長し、最後は調査区を埋め戻して終了した。

遺跡見学会は7月8日に実施した。

なお、垂柳遺跡の従来の調査成果と今回の試掘調査の成果に鑑み、今回の試掘調査の対象区は保存されることとなった。

2 五輪野遺跡の調査経過

今回の調査区は五輪野遺跡の周知の遺跡範囲からはずれるものであったが、垂柳遺跡の打ち合せ会議の席上、周辺に遺物が散布している旨の指摘があり、踏査の結果遺跡範囲を変更増補し、調査を実施することとなった。調査は台地上は発掘調査し、低地上は試掘調査の結果をみて協議することとなった。

調査期間は当初平成7年8月21日から10月5日までの予定であったが、B区の表土剥ぎが終了した段階で40軒を超える住居跡はじめとする多数の遺構の存在が確認されたため、調査期間の変更が検討された。

A区の試掘調査はB区の発掘調査と並行して進めたが、試掘調査用のトレンチからも遺物が出土することが確認され、A区も試掘調査から発掘調査に切換えた。それに伴い再度調査期間を見直し、現道部分の取り扱いを検討する必要が生じたため、協議が重ねられることとなった。その結果、最終的には12月20日まで調査期間を延長することとなった。

B区の遺構は切り合いが非常に激しく、最終的には53軒の竪穴住居跡が検出された。注目される遺物としては、鎌、柄香炉などの从具が出土している。

A区は北側から集中的に土坑が検出され、南側からは低湿地が確認された。低湿地部には泥炭層が堆積しており木製品や自然木が多数出土したため、土砂の崩落防止と漏水対策として鋼矢板を打設して調査を進めた。

A区については危険防止のため調査終了後に埋め戻した。

遺跡見学会は10月28日に実施した。

(太田原 潤)

第4節 周辺の遺跡

津軽平野南部に位置する垂柳・五輪野遺跡周辺には、多数の遺跡が確認されている。これらの遺跡は分布上、三群のまとまりとして捉らえることができる。

北からみると以下のようになる。

- 第1群 浅瀬石川に最も近接する微高地上に連なる群。
- 第2群 浅瀬石川と引座川の中間に位置する微高地に連なる群。
- 第3群 引座川に最も近接する微高地上に連なる群。

この区分に従うと、垂柳遺跡は第1群、五輪野遺跡は第2群に位置することになる。

垂柳遺跡は昭和57、58年度の発掘調査で弥生時代の水田跡が発見されて一躍脚光を浴びたが、その後に断続的に実施されている田舎館村教育委員会の試掘調査でも、水田跡、水路跡などが確認されている。昭和63年度、平成7、8年度には今回の試掘調査区の隣接地も調査されており、熊の装飾がついたヒシャクや発火具などの木製品も出土している。

垂柳遺跡の周辺に分布する第1群の遺跡の中には、弥生時代の炭化米が大量に出土した高櫛（2）遺跡や、平成7年度の発掘調査で新たに弥生時代の水田跡が検出されて注目された高櫛（3）遺跡が含まれる。高櫛（3）遺跡での新たな弥生水田の発見により、周辺部には垂柳遺跡以外にもほぼ同時期の水田が広範に広がることが確認された。

奈良・平安時代中心の遺跡としては土師器、須恵器、擦文土器等が出土している前川遺跡が挙げられる。

五輪野遺跡は今回の発掘調査以前に尾上町教育委員会によって発掘調査が実施されている。調査地点は今回の調査区の北西約600m付近に位置し、縄文時代、弥生時代、奈良・平安時代の遺物が出土している。周辺では道路工事に際しても遺物が確認されている。これらの中には弥生時代前期の遠賀川系土器を用いた併口甕棺も含まれている。遠賀川系土器は稻作技術の進展と密接に関連する土器と考えられているので、この土器が完形に近い状態で複数確認されているのは非常に興味深い。垂柳遺跡周辺では弥生時代中期にはすでに安定した水田經營をしていた様子が伺えるが、これらの土器は垂柳遺跡以前からこの地に水田が存在した可能性を強く示唆しているものと思われる。

五輪野遺跡を含む第2群の遺跡は浅瀬石川が形成した河岸段丘の北縁に連なるように確認されている。本遺跡の東方には奈良・平安時代を主体とした遺跡である李平・下安原遺跡、高木遺跡、原遺跡などがある。李平・下安原遺跡では奈良・平安時代の遺構・遺物が多数検出されている。出土した鉄製品の中に仏具の錫杖が含まれているのは注目に値する。また、原遺跡では終末期の古墳や藤手刀が確認されている。なお、津軽地方屈指の古社である猿賀神社は、今回の調査区の東方約500mに位置する。

本遺跡の西方には縄文時代晩期の良好な資料が出土した八幡崎遺跡が位置するが、図1からは僅かにはみ出すため図示はしていない。

第3群には未調査の遺跡が多いが、旧大光寺城遺跡、五日市館遺跡などがある。

(新山謙男)

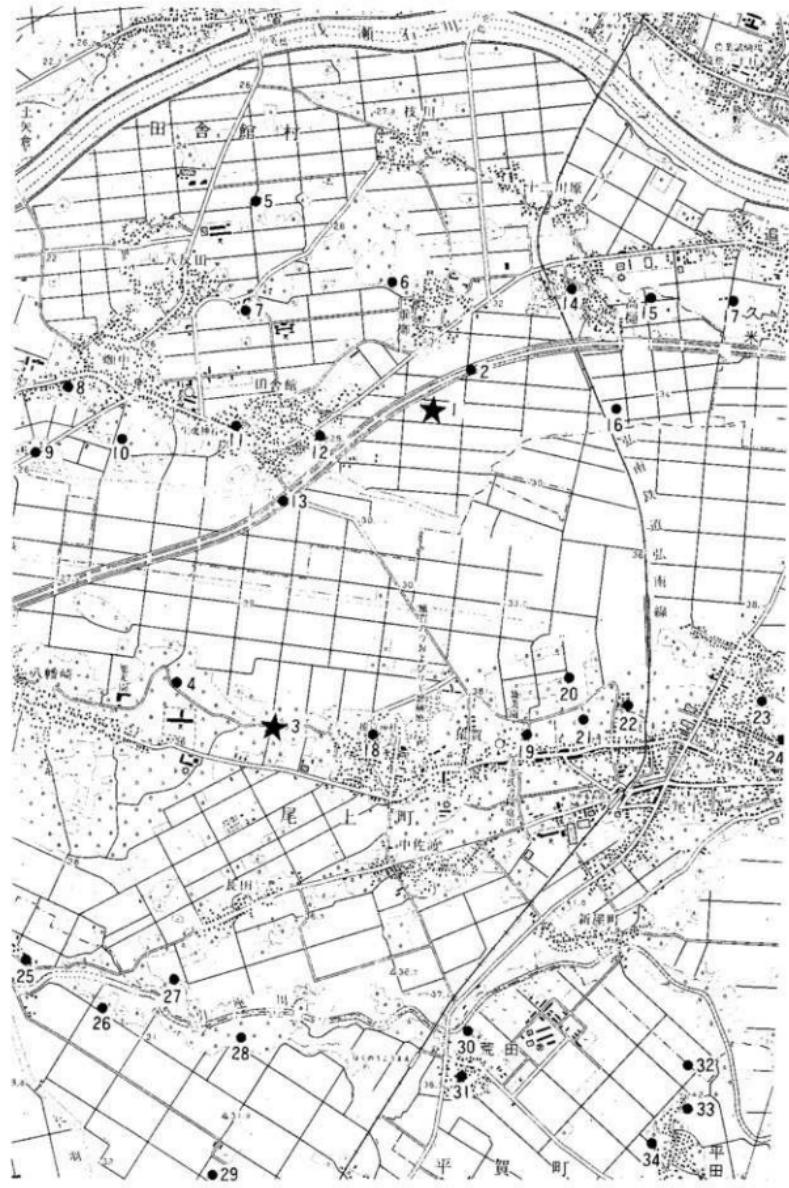


図1 周辺の遺跡

周辺の遺跡一覧

番号	遺跡名	遺跡名	所在地	時代
1	32002 垂柳遺跡	田舎船村垂柳字大面、前田、松立、長田	秀生	
2	32002 垂柳遺跡（昭57～58年度調査）	田舎船村垂柳字大面、前田、松立、長田	秀生	
3	28004 五輪野遺跡	尾上町猿賀字明堂地内	平安	
4	28004 五輪野遺跡（狂盛）	尾上町猿賀字明堂地内	平安	
5	32014 間妙寺遺跡	田舎船村畠中字觀妙寺	國文、奈良、平安、中世	
6	32006 重柳船	田舎船村垂柳字福岡、高畠	中世	
7	32022 傷巣遺跡	田舎船村畠中字巣巣	秀生、奈良、平安	
8	32019 繩口（2）遺跡	田舎船村畠中字繩口	奈良、平安	
9	32010 繩口（1）遺跡	田舎船村畠中字繩口	奈良、平安	
10	32003 新川遺跡	田舎船村田舎字新川	秀生、平安	
11	32007 田舎船城跡	田舎船村田舎字中辻	中世	
12	32001 田舎船跡	田舎船村田舎字東田	秀生	
13	32023 滝浜遺跡	田舎船村田舎字松浜	平安、近世	
14	32011 滝浜（1）遺跡	田舎船村楊口字宮本、泉、深山林	國文（後期）、秀生、奈良、平安	
15	32012 滝浜（2）遺跡	田舎船村楊口字八幡	奈良、平安	
16	32013 滝浜（3）遺跡	田舎船村楊口字大曲	秀生、平安	
17	4081 浅田遺跡	黒石市迫子野木字浅田	平安	
18	28012 旗賀遺跡	尾上町猿賀字石橋	中世	
19	28016 浅井（2）遺跡	尾上町猿賀字浅井	國文	
20	28015 浅田遺跡	尾上町猿賀字浅田	國文、秀生、奈良、平安	
21	28017 浅井（1）遺跡	尾上町猿賀字浅井	國文	
22	28005 原遺跡	尾上町原字上原地内	國文（中期・晚期）、秀生	
23	28007 滝木遺跡	尾上町原木字原田	平安	
24	28008 季平下安原遺跡	尾上町季平字下安原、西和田	國文（後期）、平安	
25	30112 宮本遺跡	平賀町杉船字宮本	國文（後期）、平安	
26	30113 杉船（1）遺跡	平賀町杉船字船本	秀生、平安	
27	28014 浅田遺跡	尾上町浅田字稻田	國文（後期）、奈良、平安、中世	
28	30110 五日市船遺跡	平賀町大光寺字西船村	秀生、平安	
29	30109 田大光寺城（2）遺跡	平賀町大光寺字二塊木	秀生、平安	
30	30139 荒田遺跡	平賀町荒田字下鶴田	近世	
31	30182 横取遺跡	平賀町小和森字横取	平安	
32	28013 平田船跡	尾上町新屋町字田川	中世	
33	30078 平田森（2）遺跡	平賀町平田森字下船村	不明	
34	30079 五輪船遺跡	平賀町平田森字下船村	不明	

第5節 垂柳遺跡・五輪野遺跡と周辺の地形・地質

松山 力

1. 遺跡の位置と周辺の地形

両遺跡は、岩木川支流の平川と浅瀬石川に挟まれ、東方を八甲田山系の山裾に限られた、津軽平野の南東部に立地している。

浅瀬石川は、東方の南八甲田連峰に源流を発し、西方の南津軽郡藤崎町で平川に合する流路の長さ約40kmほどの河川である。平川は、南方の秋田県境の山中に流路を発し、浅瀬石川に合流したあと弘前市北部で岩木川に注ぐ、流路の長さ約42kmの河川である。両川の下流域には、岩木川中・下流域に広がる広大な冲積平野に連続する低平な河岸平野が開け、両川間の河岸平野には、東方山地の山裾から扇状地性の洪積世の最低位段丘が張り出している。垂柳遺跡はこの段丘の北縁と浅瀬石川との間の河岸平野に、五輪野遺跡は段丘北縁部から段丘崖下の河岸平野にまたがって位置を占めている。

図2は、両遺跡の中間点をほぼ中央におく、東西6km、南北4.5kmの範囲の地形区分図である。

この図は、「垂柳遺跡」(県教委など、1984)記載の水野裕による分類図と、大矢雅彦(1976)の微地形分類図、および青森県(1970)の地質図に、筆者の見解を加えて編集したものである。

五輪野遺跡の南部をのせる洪積最低位段丘(台地)の主部は、五輪野遺跡南方約6.5kmの大鰐町薬師堂、西方およそ3kmの尾上町八幡崎、東方4km余りの金屋を順次に結ぶ線と、金屋東側から薬師堂へのびる東方山地の山麓線(山裾)で囲まれた範囲である。平坦面がよく残され、その標高は、山地・丘陵の急斜面に接するやや傾斜の大きい部分を除き、東方から西方へ向かって、ごく緩やかに、50~65mから25mへと低くなる。五輪野遺跡発掘部分の段丘面線の東側に設置されている三角点の標高は、35.9mである。この広い段丘を裂くように、東方の山塊に源を発し、五輪野遺跡の南方約1.5km付近を東に向かい、平川に合する引座川が流れている。引座川以北における、周囲の河岸平野と段丘平坦面との段丘崖付近での標高差は、金屋付近でほぼ10m、遺跡付近から西端の八幡崎付近までは5~7km程度である。大矢(1976)は津軽平野南部の地形を、山地・台地・丘陵・扇状地・谷底平野に大別し、さらに扇状地を高位から低位に、I、II、II-I、III、IVの5つに分け、最低位洪積段丘に相当する台地を、扇状地IIと呼んでいる。

本報告では、大矢の扇状地IIに相当する洪積最低位段丘を、尾上段丘と呼ぶことにする。

浅瀬石川南側の垂柳遺跡をのせる河岸平野は、東方の山地・丘陵帶から平野部への出口(扇頂部)にあたる黒石市石名坂付近から急に南側に幅を広げ、黒石市街地ののる台地(大矢の扇状地I)の西縁からは、北側にも急激に範囲を拡げる。その標高は石名坂付近で65~70m、金屋北方で50m、垂柳遺跡周辺で28~30m、平川との合流付近では20m土と、西方にごくゆるやかに低くなる。垂柳付近の河岸平野をおおまかに見れば、垂柳集落の北縁を東西に走る線より北側で低く、遺跡をのせる南側が高い。実際には曲がりくねるその境界は周辺地域に連続して追跡でき、構成層にも差異があることから、大矢(1976)は高い側を扇状地III、低い側を扇状地IVとして区別し、水野(県教委など1984)もその高位面を沖積低地I面、低位面を沖積低地II面として区分している。

遺跡ののる沖積低地I面には、図2に示されるように、旧浅瀬石川の旧河道が残されている。

2. 遺跡の地質と土層の層序

(1) 垂柳遺跡

今回の発掘調査は、現国道102号線建設に先立ち、県教委と垂柳発掘調査会とが合同で1982～1983年に発掘調査（以下この調査を県教委、（1982～1983）とする）した区間内のVI区から南に向かう畠道にそって行われた。この区域は、北方の垂柳の集落（距離約500m、標高30m）から南方の浅瀬石川の旧河道（距離約500m、標高28～29m）に向かってごくゆるやかに傾斜する地形面（大矢の扇状地Ⅲ面、水野の沖積低地Ⅰ面）上に位置している。

構成層は扇状地性の砂礫層（青森県、1974、および大矢・梅津、1978など）とされるが、低平地の特質上、露頭に乏しく、ボーリング調査による以外、基盤までの全調査は難しい。県教委と、その後継続している田舎館村教育委員会の発掘によって掘り起こされた表層部は、砂・礫まじりのシルト層・粘土層と、その上のグライ士[†]化した粘土質土層（1984「垂柳遺跡」の黒泥質粘土層）で構成されている。グライ士化した暗色の土層には、数枚の明るい色調の二次堆積火山灰層が挟まれている。この火山灰層は、浅瀬石川上流地域に分布の広い火碎流堆積物（シラス）などから、河川氾濫時に運搬されたシルト・粘土を主とする物質が堆積し、グライ化土（粘土化）したものである。

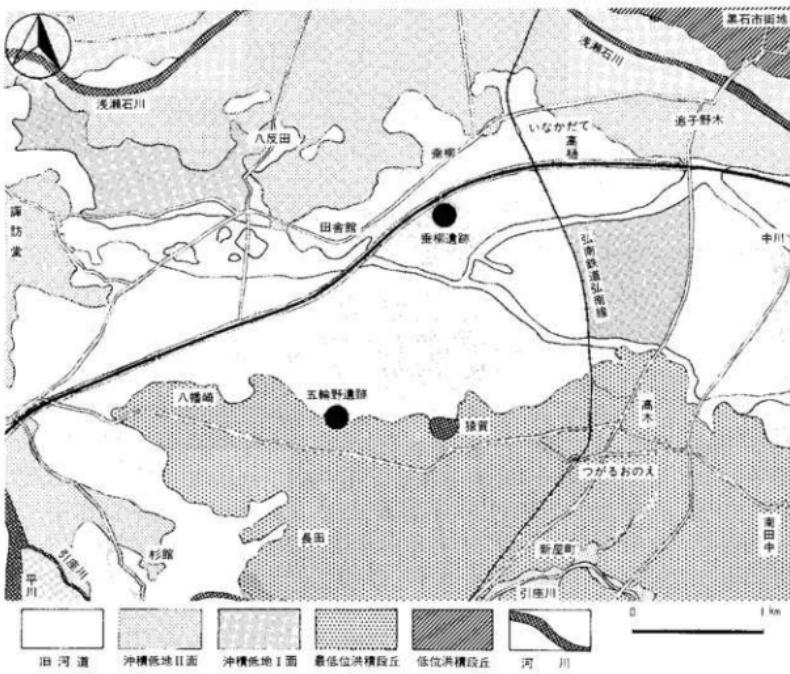


図2 地形区分図

*グライ土 (gray soils) とは、高い水位の地下水の影響で粘土化した土壌の総称で、含水酸化鉄が還元すれば青灰色や緑灰色のグライ層になる。土層内を移動する水の影響で、酸化鉄などが褐色や橙色の斑紋・結核あるいは酸化帯となって、含まれていることが多い。

県教委（1982～1983）と、その後継続実施されている田舎館村教育委員会の、垂柳遺跡や東方の高樋遺跡の発掘調査の結果、表層下位の砂・礫まじりのシルトや粘土と、上位のグライ土化した土層は、ほぼ同様の層序で、沖積Ⅰ面が分布する広い地域の大部分に連続していることが解ってきた。したがって、この報告でも県教委（1982～1983）の土層区分に従った。

図3は、今回調査されたトレント4地点の柱状図と、「垂柳遺跡」（県教委など、1984）に記載されている現国道102号線道路部分のVI区柱状図とを対比したものである。ただし、以下に記述した各土層の厚さと性状は、主に今回発掘された部分の記載である。

I層は、厚さ12～20cmの、暗褐色～灰黄褐色粘土質土層である。近接地区ではVI区同様に、緑灰色（含水部）～明褐色、あるいはにぶい黄橙色を呈する場所がある。I層には、ところによって、中位に乾燥すれば明瞭な割れ目帯を生ずるような境界があり、そこではこれを境に、上位のIa層と下位のIb層の2層にわける。Ib層は、ところどころで、根状ないし縞状、あるいは斑紋状に滲み込んだ酸化鉄（橙色～褐色系の色合いに変化）の影響でにぶい橙色土層となっている。

II層は、厚さ2～12cmの、Ia層と同様の色調を呈する粘土質土層で、その中位と下限に厚さ2～5cmの淡橙色～明黄褐色、あるいは濃褐色の酸化鉄帯を伴う。II層は、中位の酸化鉄帯を境に、上部のIIa層と中部のIIb層、下位のIIc層の3層に区分できる。IIa層には、粒系4～5mmの灰白色(7.5YR8/2)の硬い浮石流が散らばるところが多く、ところによって、径5～8mmの灰白色(7.5YR8/2)～浅黄橙色(10YR8/3～8/4)火山灰塊が含まれる。この火山灰塊は、苦小牧火山灰に相当するものと考えられている。（県教委など、1984）。IIb層との境から上方4～5cmには、褐色～橙色系の色調を帯びる斑紋が散らばる。IIb層は、その上・下限部に厚さ2～4cmの、明褐色～橙色酸化帯になっているほか、明褐色の斑紋が含まれている。IIC層はレンズ状に断続する土層である。

III層は、ところどころにレンズ状に存在する厚さ最大6cmの、にぶい黄橙色(10YR6/4)二次堆積火山灰層で、明褐色の斑紋がまだら状に散るグライ化した粘土層（県教委など、1984記載の火山灰質堆積物（粘土質シルト））となっている。

IV層には、土色などの特徴が漸移的に変化して2層に分れるところがあり、上部をIVa層、下部をIVb層とする。IVa層は厚さ1～15cmの黒色粘土質層で、ほぼ全域に連続する。IVb層は厚さ5～16cmの黒褐色粘土質層で、ところどころでIVa層下部に漸移的に付随している。褐色系～橙色系の色調を帯びる径数cm以下塊状斑紋や根縞紋が目立つところが多い。従来の近接区域の調査では、IVb層から田舎館式土器の破片が出土している。

V層は、厚さ2～15cmの、灰白色(10YR7/1)～にぶい黄橙色土(10YR6/3～4、7/2)を帯びた二次堆積火山灰層を主とする粘土質層である。しかし、場所によって、径数cmの灰白色(10YR7/1)火山灰塊を含む黄灰色(2.5Y5/1)粘土質土層に指交的に漸移したり、踊るような形に千切れたようににぶい黄褐色(10YR7/2)火山灰塊を灰黄褐色(10YR4/2)土が包むような状態に変化したり、層の断面が波打つようく曲がりくねったり、その産状は変化に富む。土層が、上部の黄褐色(10YR6/3)火山灰混合土層と下部のにぶい黄褐色(10YR7/2)二次堆積火山灰層とに分れるところがあり、上部を

V a 層、下部を V b 層とした。近接地域では、上部に赤褐色火山灰質砂層、あるいは粒径数mmのやや硬い浮石の密集部を伴うところがある。IV層同様に、褐色系～橙色系の色調を帯びる斑紋や根様紋が目立っている。

VI層は、厚さが15～60cmの、黒色～黒褐色、ところによって灰黄褐色を呈する粘土質土層である。全体に粒系1～3cmの酸化鉄による褐色系色調の斑紋が散らばっている。やや厚いところでは、上部が黒褐色(10YR3/1)～黒色(10YR2/1)ところによって灰黄褐色(10YR4/2)の土層、下部が黒色(10YR1/1～1.7/1)ないしは黒褐色(10YR2/2)の土層に分かれ、上部をVI a 層、下部をVI b 層とした。30～60cmの厚さの部分は、上から、厚さ15～20cmの黒色(10YR2/1)粘土質土層、厚さ5cm以下のぶい黄褐色(10YR7/2)火山灰層、厚さ5～10cmの黒色(10YR2/1)粘土質黑色土層、厚さ5cm以下の灰黄褐色(10YR4/2)火山灰層混合土層、厚さ15～20cmの黒色(10YR1.7/1)粘土質土層の順で重なる5層に細分できる。そのうち、火山灰層と火山灰混合土層とは、レンズ状に挟まれている断続的な薄層である。近接区域の発掘調査では、同様の厚さと性状をもつVI層の最上部層から、田舎館式土器に特徴づけられる大量の弥生時代の土・石器が出土し、またその上面からは、広く水田跡や関連する遺構・生活痕跡などが発見されている。

VII層は、厚さ4～35cmの黄灰色(2.5Y6/1)～灰オリーブ色(5Y5/2)を帯びる二次堆積火山灰層で、その上部に厚さ数cmの火山灰質粘土層をのせる部分がある。近接区域では灰白色～灰黄褐色の色合い

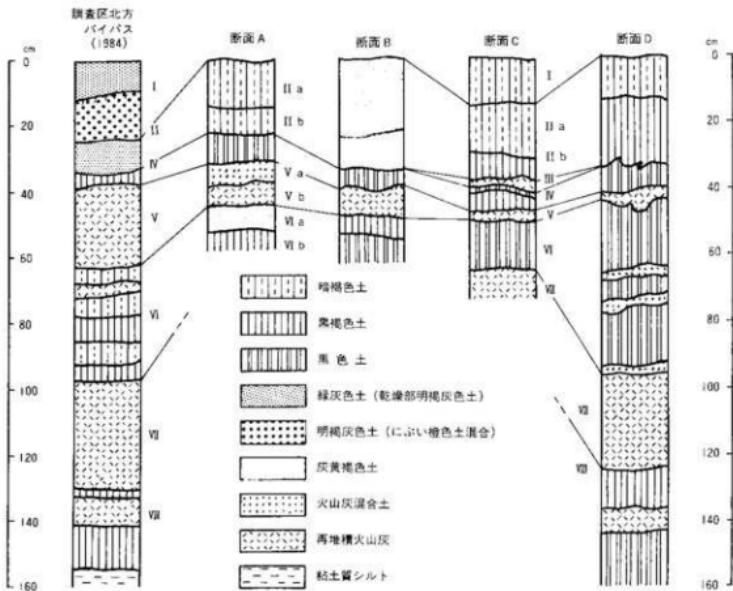


図3 垂柳遺跡の土層柱状図

をもつことが多い。褐色～色調の斑紋が目立っている。

VII層は、厚さ55cm以上の黒色～黒褐色粘土質土層を主とし、上面から10cmのところから下方に、厚さ6～10cmの、灰白色～にぶい黄橙色ないし黄橙色を呈する二次堆積火山灰層を挟んでいる。ここでも褐色～橙色系色調の斑紋が目立っている。近接区域では、縄文時代後期の十腰内I式土器で特徴づけられる土・石器類が出土している。

VIII層の下位に存在する土・地層群は確認できず不明であるが、近接区域の下位にあるIX層は、青灰色～緑灰色の砂層やシルト層を主とし、一部に砂礫層を伴う河成層がある。

(2) 五輪野遺跡

五輪野遺跡は、垂柳遺跡中心部から南南西へ約2km離れた、尾上段丘と沖積低地I面とにまたがる遺跡である。遺跡周辺には、尾上段丘面と沖積低地I面との間に、幅20m以内の小規模な小段丘があり、これを本報告に限り、沖積上位段丘ということにする。

図4は、南北方向に発掘された調査区の代表的な層序を、面の高さ（高度差の縮尺は図左下）に対応させて示した柱状図（厚さの縮尺は図右上）である。

尾上段丘の構成層は、おもに火碎粒堆積物から二次的に供給された火山灰を基質とする疊層や疊混じり火山灰層である。疊には中疊大の火山岩疊が多い。その上位には、厚さ数10cm以内の碇ヶ関浮石層（山口、1993）と見られる降下型の浅黄橙色（10YR6/8）～明黄褐色（10YR6/6）火山灰層がのっている。

これらの地層を、I層からV層までの土層群が覆っている。

尾上段丘上のほぼ中央に位置するR-43のグリッドの土層は、下位の地層を除いて、上からおおまかにI～IV層の4層に分けられる。

I層は、厚さが10～20cm程度の、黒色（10YR2/1）～黒褐色（10YR2/3）砂質土層で、ところによって角張った粒系3～8mmの岩片が散らばっている。

II層は、厚さが15～25cm程度の黒褐色（10YR2/2～2/3）砂質土層で、角張った粒径2～6mmの岩片が散らばり、場所によって、下位層の黒色土の一部が、径数cm程度の円柱状に上方に突き出しているところがある。

III層は、厚さが15～20cm程度の、やや粘性に富む黒色（10YR2/1）～黒褐色（10YR2/2）砂質土層である。

IV層は、厚さが10～20cm程度の、暗褐色（10YR3/3～3/4）土層で、上半部に径数cm程度の黒色土塊が、下半部には下位層の黄褐色土塊が斑状に混じっている。IV層は段丘縁部で欠けている。

V層は、厚さが15～25cmの、明黄褐色（10YR6/8）粘土質火山灰層（ローム状）で、粒径5～15mmの角張った岩片や、粒径3～8mmの浅黄橙色（10YR8/3）浮石が散らばっている。

VI層は、V層の下位層を一括したものである。

R-43グリッドのVI層は、上部がよくしまった厚さ20cmの明黄褐色（10YR6/6）浮石質火山灰層（碇ヶ関火山灰）、下部が厚さ40cm以上の疊混じりのにぶい黄橙色（10YR6/4）火山灰層ないしは同色火山灰を基質とする疊層で、疊には粒系1～12cmの火山岩疊が多い。

段丘縁部のVI層は、上部が厚さ25～30cmの浅黄褐色火山灰質砂疊層で、粒系1～7cmの火山岩疊や

粒径 2 cm 以下の浮石が含まれている。下部では、上から厚さ 15 cm 土のにぶい黄橙色細粒砂層、厚さ 10 cm 土のにぶい黄橙色砂と褐灰色砂とが混合したくずれやすい中～粗粒砂層、厚さ 20 cm 以上で細礫が混じった明黄褐色～橙色～にぶい黄橙色中粒砂層などが重なっている。

沖積上位段丘土層は、上から、厚さ 80～90 cm の盛り土、厚さの合計約 1 m の、黒色土、暗褐色土、黒褐色土とその下位の厚さ 50～60 cm の泥炭質黒色 (10YR2/1) 土層、厚さ 40 cm 土の黒色 (10YR1.7/1) 腐食土層で構成され、その基底を灰白色、にぶい黄橙色、黄褐色などの明るい色調を帯びた砂質シルト火山灰を主とする地層が占めている。そのうち、泥炭質黒色土層には、下位層に由来する粒径 0.5～2 cm の緑灰色砂塊や粒径数 cm の円礫が散らばり、その上部には腐食した植物片が多量に混入し、黒褐色 (10YR2/2) ～にぶい黄褐色 (10YR4/3) に変色した草炭質の泥炭様土層となっている。下部の黒色腐食土層には木片が多い。下底部には中疊を主とする疊群が敷かれるよう拡がって、一時期かなり速い水流があったことを思わせる。

沖積低地の土層は、北東北から屈曲しながら漸移面の崖下に達する幅およそ 10 m (南北断面で幅 15 m 余り) の埋没谷状凹地と、その北側 (北部とする) とではやや趣を異にしている。基底の地層が數 10 cm と、そこからさらに数 10 cm と、2 段に低くなっている部分を埋没谷状凹地とした。

埋没谷状凹地では、上から①厚さ 40 cm の盛り土、②厚さ 20 cm 以内のオリーブ灰色 (Hue2.5～5GY6/1、乾燥色) ～褐灰色 (10YR4/1) 粘土質層、③厚さ 25～35 cm の暗オリーブ灰色 (Hue2.5～5GY4/1 乾燥色) ～黒褐色 (10YR3/1) 粘土質層、④厚さ最大 25 cm のオリーブ黒色 (Hue7.5Y) ～黒褐色 (10YR3/1) 粘土質土層、⑤厚さ 10～15 cm (V 字型厚層部で 90 cm 余り) の黒褐色～黒色泥炭質腐食土層が重なる。これらのうち、②層～④層の層相は、垂柳遺跡の I・II 層の特徴によく似ている。③層には粒径 1～8 cm の灰白色～浅黄橙色の火山灰塊が目立つところがあり、垂柳遺跡の II a 層に含まれる同様の火山灰塊と同起源の可能性が高い。⑤層には、太さ 1～4 cm の枝片をはじめ、多量の茎・細枝などの植物片が含まれる。基底の低い中央部では、⑤層の上半部が下半部と基底層を溝状に深く切り込んでいる。また、北半部の北縁近くでは、下位に一層の下底まで盛り上がる円礫 (中疊以下) 混じり砂礫が挟まれている。⑤層は沖積上位段丘の泥炭様土層に連続する。ここで確認された基底の地層は、二次的に堆積した灰白色～にぶい黄橙色の火山灰層である。

北部の土層は、上から (a) 厚さ 30 cm 土の盛り土、(b) 厚さ 15 cm 土粘土質黒色 (10YR2/1) 土層、(c) 厚さ 6～12 cm の粘土質黒色 (10YR1.7/1) 土層、(d) 厚さが 15 cm 土の漸移層、(e) 基底層の 5 層に分けられる。(b) 層には粒径 0.2～3 cm の灰黄褐色～浅黄褐色～黄橙色火山灰塊が散らばっている。(c) 層には下位層に由来すると思われる径 8～10 cm の火山灰塊が断続している。(d) 層は、黒褐色粘土質土層、下半が砂が多量に混合する黒褐色土層である。深さ 80 cm まで確認された (e) 層は、厚さ数 cm のやや硬い褐色酸化鉄帯を間に挟んで、厚さ約 60 cm の上部と、厚さ約 30 cm 以上の下部に分けられる。上部は、最上部が厚さ数 cm 程度の灰白色粗粒火山灰層、最下部が厚さ 10 cm 程度の明黄褐色砂層で、その間の部分はおおむね緑灰色を呈する火山灰質の粗粒砂層、またはこれらと指交する砂疊層である。その浮石は硬く粒径は数 cm のものが多い。酸化帯の下方はくずれやすい砂層である。

なお、沖積低地は調査区北側で、落差 (50 cm ～ 1 m) の段丘崖でより低い面に移行している。

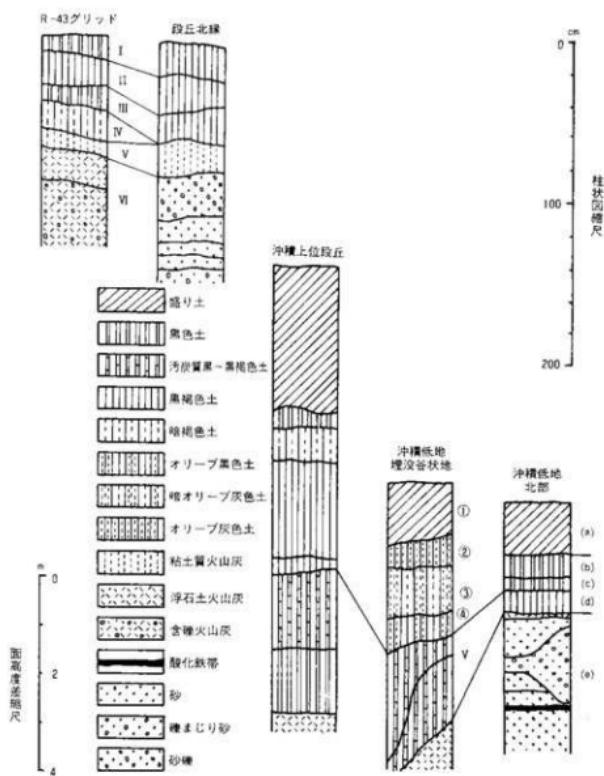


図4 五輪野遺跡の土層柱状図

引用文献

- 青森県 1970 「黒石地域の地質について」 青森-29号
 青森県 1974 『土地分類基本調査「黒石」表層地質図』
 青森県教育委員会・垂柳発掘調査会 1984 『垂柳遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告 第88集
 大矢雅彦 1976 「浅瀬石川層状地と十和田火山活動との関係について」 早稲田大学教育学部学術研究、第25号
 大矢雅彦・梅津正倫 1978 「津軽平野における層状地の形成過程」 東北地理 30巻1号
 山口義伸 1993 弘前市研究「平川流域での十和田火山起源の浮石粒凝火山岩について」 年報 市史ひろさき 2



調査区と岩木山（東から）

第II章 垂柳遺跡

第1節 調査の概要

垂柳遺跡は弥生時代の水田跡が発見された昭和57、58年度の発掘調査以降にも田舎館村教育委員会による試掘調査が継続されている。

今回の試掘調査対象区付近でも、村教育委員会が昭和63年度、平成4年度、5年度に試掘調査を実施している。今回の試掘調査区は、それらと重複せず且つ対象区内の状況がより詳細に把握できるよう設定した。(図8参照)

昭和63年度の試掘調査では水路跡が検出されており、熊の装飾がある柄杓、火鑓板等の木製品が出土している。

今回の試掘調査では水田跡は確認されなかつたが7条の水路跡、1条の大畦が検出されている。従来の調査でも周辺からは水田が確認されておらず、水路が検出されるのみであった。

検出された水路の内の第1号水路跡は位置的にみても、遺物の内容、出土状態からみても昭和63年度の試掘調査で検出された水路跡に連続するものと考えて相違ないものと思われる。第1号水路跡からは歛、石斧柄、盾状木製品、琥珀製の臼玉、南御山II式の壺、炭化米などが出土した。両調査で得られたこれらの遺物は共伴するものとして認識する必要があろう。

(太田原 潤)

第2節 遺構の配置

今回の調査区は昭和57、58年度の発掘調査区のVI区の南側に位置する。VI区の東側のV区、西側のVII区からは水田跡が検出されているが、VI区からは水田跡は検出されておらず、水路跡が確認されている。

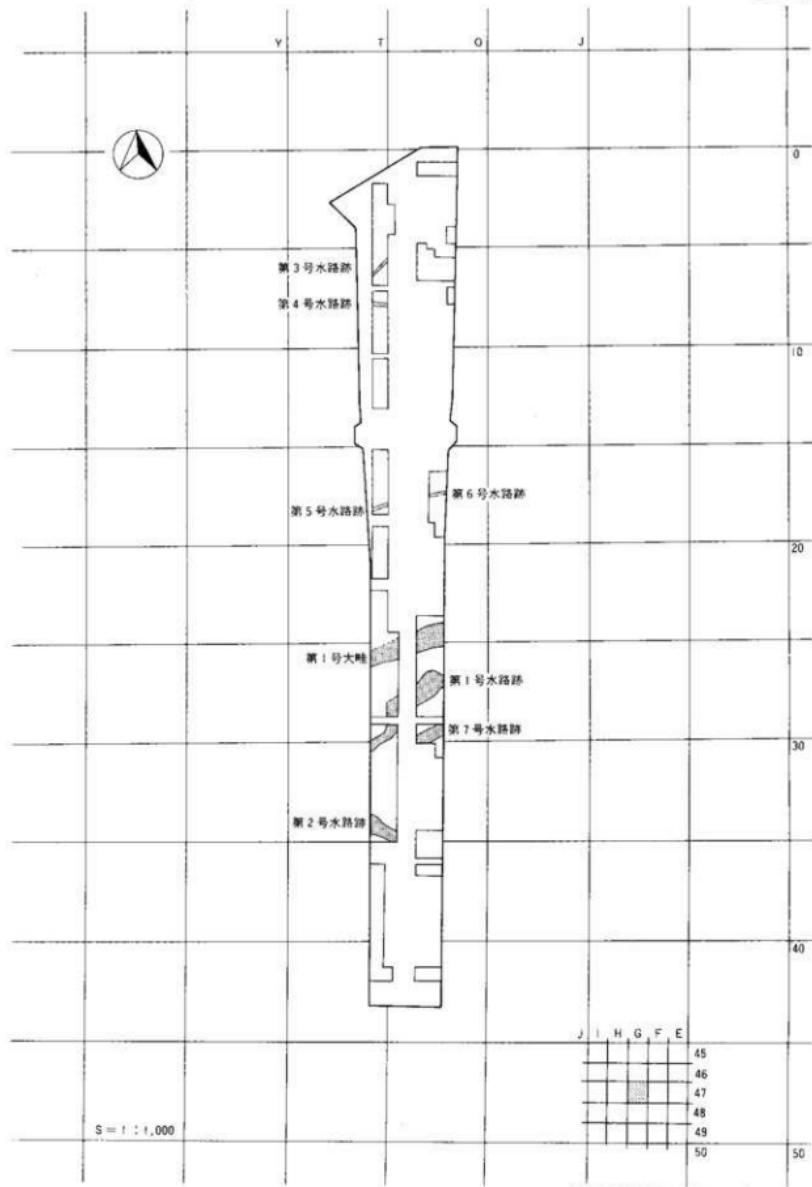
今回の試掘調査でも水田跡は検出されず、7条の水路跡と1条の大畦が確認されている。土地利用のあり方としてはVI区と類似している。これらの遺構のほとんどは南北に長い調査区を東西方向に横断するように確認されているため、本来の規模からみるとそれぞれごく一部が検出されたにすぎない。従って各遺構の全貌および関連性を把握するには至らないが、土層の堆積状況からある程度の同時性を伺うことができる。

V区、VII区の水田跡は第V層に覆われている。第V層は二次堆積火山灰土が一過性の洪水によって上流から流されて堆積したものと考えられているため、第V層直下の面は共時性が高いものと考えられる。そのことを手がかりにすると、第1～6号水路跡および第1号大畦は水田埋没時には同時存在していたものと思われる。このうち第3～6号水路跡は第V層堆積後は水路としての機能を完全に失い、第1、2号水路跡はそれより規模が大きい分、第V層堆積後も溝状の凹地として残ったものと思われる。両者とも第V層以前の堆積土が認められるため、水田埋没直前段階だけではなく、それ以前から既に水路として機能していたものと思われる。第2号水路跡は第V層の検出状況から推定すると、第V層堆積時からそれ以後にかけて一定量の水流があったことが伺われる。第7号水路跡は第V層堆積時には既に埋没てしまっているため、水田埋没時には水流はなかったものと思われる。

(太田原 潤)



図5 垂柳遺跡発掘調査区



例：網かけ部はG-47グリッド(4×四方)

図6 垂柳遺跡遺構配置図

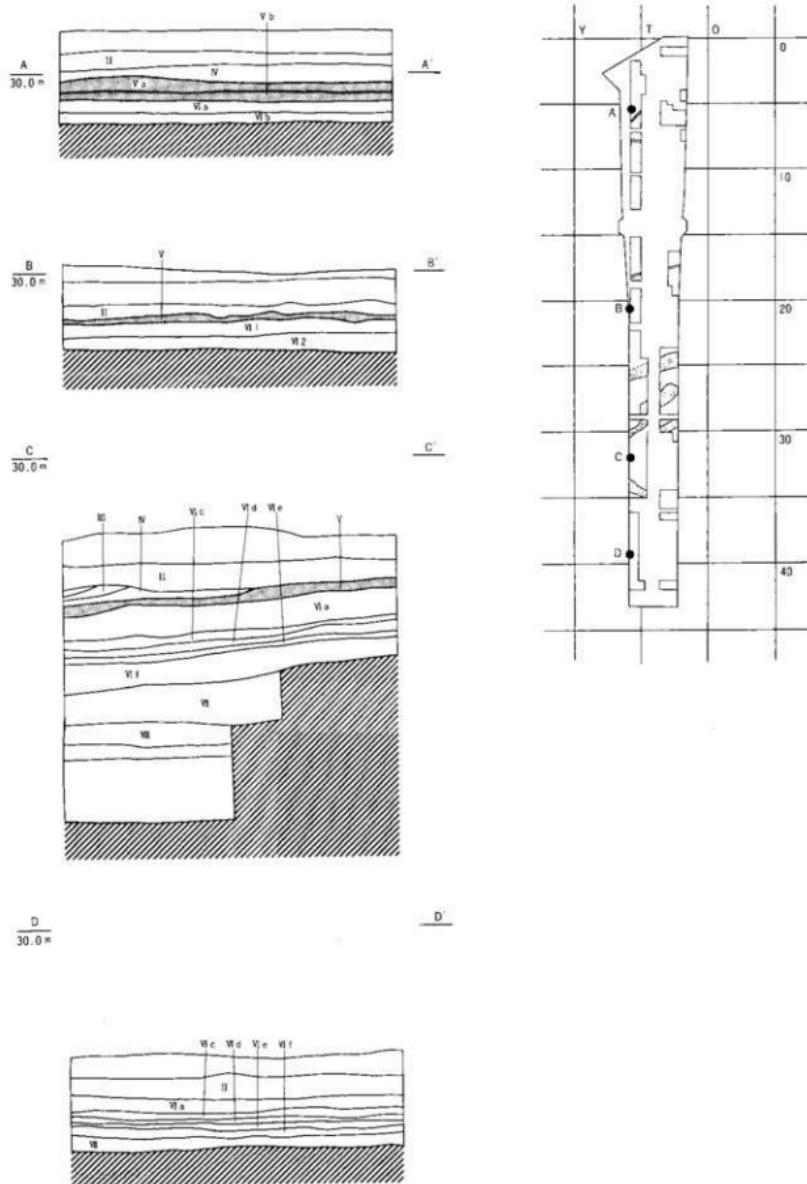


図7 垂柳遺跡土層断面図

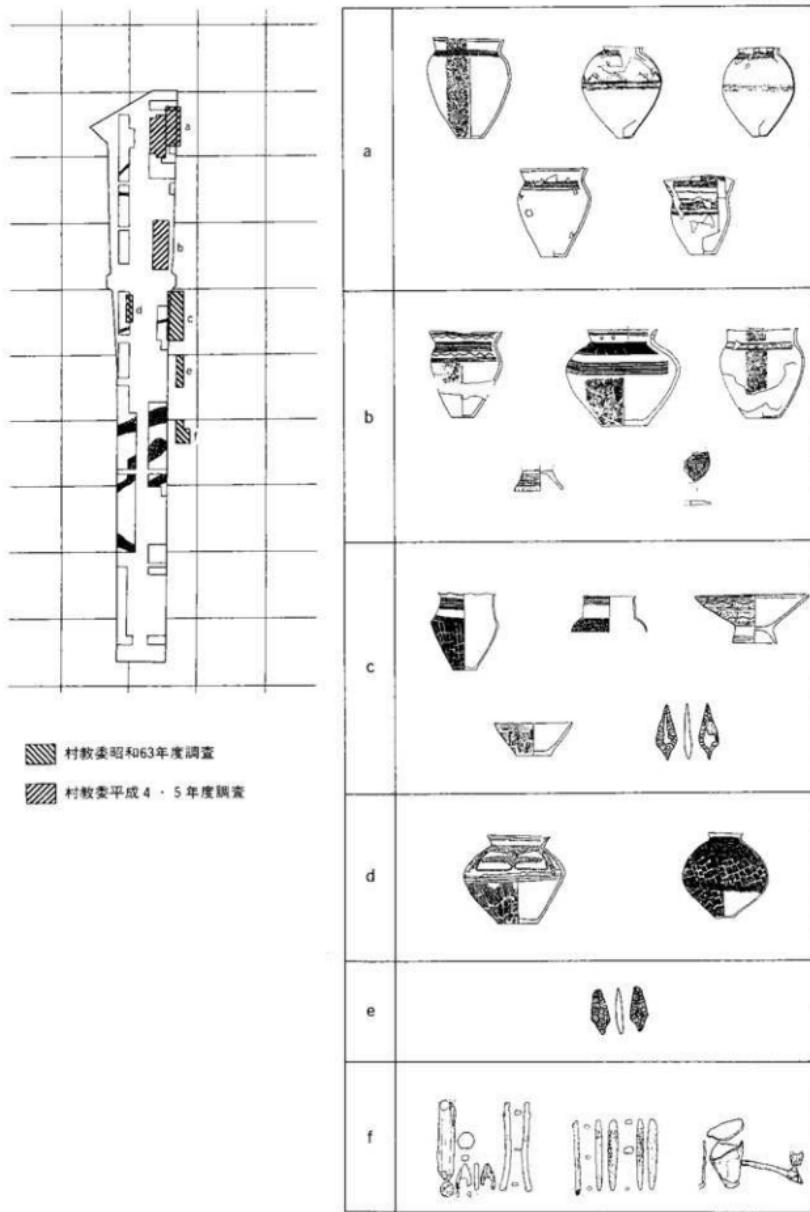


図8 隣接地の調査

第3節 水路跡

第1号水路跡

[位置] Q～U-26～30グリッドにおいて確認されている。

[重複] 重複する遺構はないが、本水路跡の下位には縄文時代後期の包含層がある。

[平面形・規模] 巨視的に見ると北東方向から南西方向に向けて流れているが、両端は調査区外まで延伸している。確認された範囲内では緩く蛇行し、幅は場所によって異なる。ただし、現農道部分や現水路部分、現畦部分は今回の試掘調査では調査しないこととしていたため、本水路跡は寸断された状態で検出されており、不明確な点も残る。検出された範囲の東端付近では幅約2.7mであるが、Rライン西側付近では約4.6mとなり、西端付近では約1.4mとなる。

本水路跡は現農道や現水路、セクションベルトをもとに便宜的に5地区に区分した。A地区はA-A'セクションからB-B'セクションまで、B地区はB-B'からC-C'まで、C地区はD-D'からE-E'まで、D地区はF-F'からG-G'まで、E地区はG-G'からH-H'までとした。

田舎館村教育委員会による試掘調査で昭和63年度に検出された水路跡は本水路跡の北東に位置するが、方向性、遺物の出土状態から本来一連のものと思われる。また、同教育委員会による平成4年度の試掘調査で検出された水路跡も本水路跡の方向性とほぼ一致することから、これも一連のものである可能性が考えられる。だとすると本来的な規模はかなり大規模なもので、昭和57、58年度調査の第V区水田跡付近から、今回の調査区を抜けてさらに南西に延びていたことが予想される。

[壁・底面] 最深部がほぼ中央に位置し、そこから両端に向けて緩く立ち上がるようであるが、場所によっては底面が不明瞭である。全体的には北東方向から南西方向に緩く傾斜しているようであるが、一定の傾斜ではなく、底面には起伏がある。R-27グリッド付近が今回検出された範囲での最深部となり確認面からの深さは約70cmである。この付近は最も深いだけではなく、蛇行のカーブが最もきつい場所の手前にあたるため水がよどんでいたものと考えられ、多くの木製品、自然木が検出されている。それらのうち長尺のものの出土状態は流路に沿う方向を向いて検出されていることから、この水路には一定の水量と水流があったものと思われる。

本水路跡の底面はA地区、B地区の一部において不明瞭である。R-27杭の北側およびH-H'セクションの南側では直立していたと思われる自然木の根が確認されている。これらの下部はV層以下にまで達しており、縄文時代後期の遺物と同時期である可能性も考えられる。これらの根は本水路跡底面近くで確認されたものであるが、6層の下部より上では確認されない。また、随所に焼け焦げた痕跡が見られることから、水路掘削時に下層から露出した木に対して当時の人がなんらかの処理を施したものである可能性も考えられる。R-27杭付近が北側に膨らみを有するのは根の影響があったからかも知れない。

[堆積土] 火山灰起源と推定されるIII層、V層が明瞭で、本水路跡はV層土の落ち込みを確認することによって検出された。遺物は層下の泥炭質の層から検出されている。昭和57、58年度の調査で確認された水田はV層直下で検出されていることから、水田とともに本水路跡もV層に覆われたものと推定される。

[遺物] 土器としては南御山II式に比定される完形の壺、内外面を赤彩した高壺、田舎館式の台壺

鉢の欠損品が出土している。明確な搬入品と推定される土器はこれまでの垂柳遺跡の調査では出土しておらず、田舎館式土器の位置付けを考える上でも貴重な資料となりそうである。

他に銀の未製品、石斧柄の未製品、手網状木製品、漆塗りの盾状木製品、杭状木製品、板状木製品、棒状木製品、琥珀製白玉(図18-1)、有孔石製品、樹皮、炭化米、植物種子などが出土している。銀の本体部や石斧柄などもこれまでの調査では得られなかったものである。また漆塗りの盾状木製品も特筆される。赤と黒で鋸歯状の文様が描出されているが、県内外問わず類例の極めて乏しいものであろう。

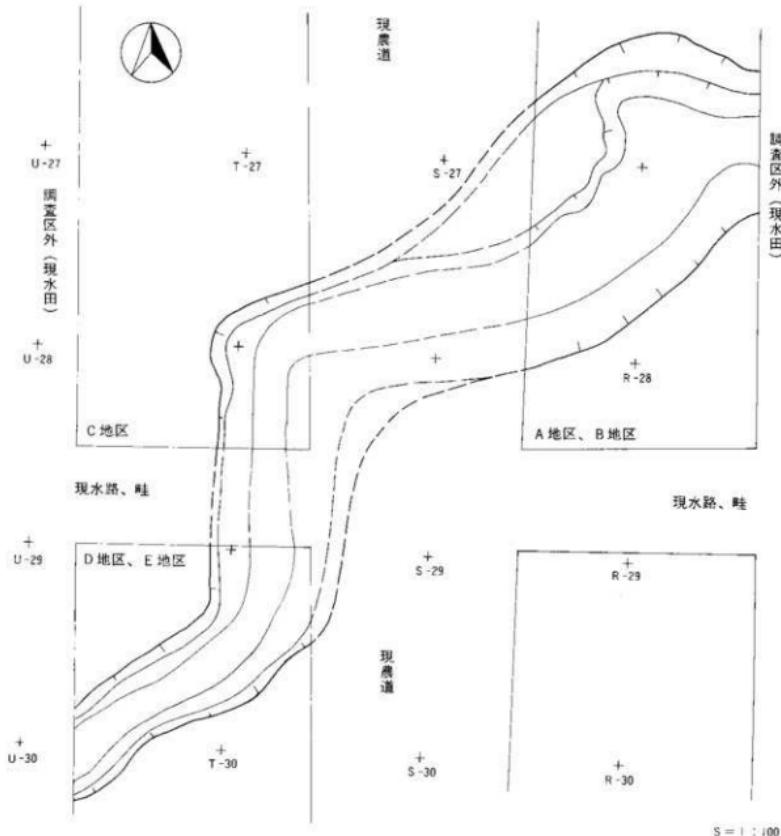
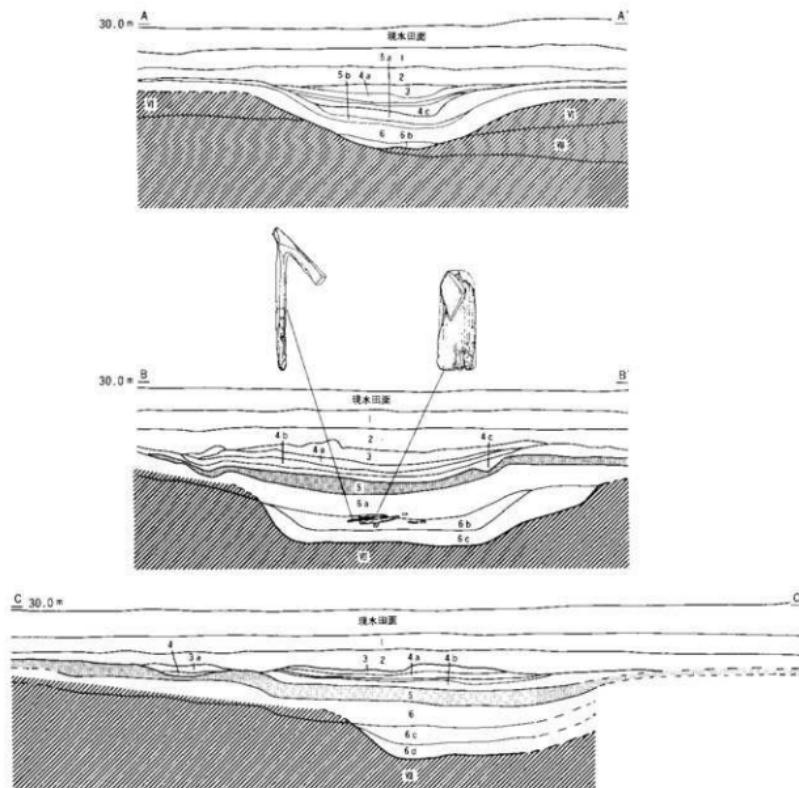


図9 第1号水路跡



- 1 層 旧水田面
 2 層 農地整理以前旧水田面
 3 a 層 基本層序Ⅲ層に対比される。にぶい黄褐色(10YR6/4)の二次堆積火山灰層である。
 3 b 層 黒色粘土質土層で3 a 層が混入する。
 3 c 層 3 a 層とほぼ同じで、b 層によって隔てられる。
 3 層 3 a 層と同様であるが、b 層が不明瞭またはごく薄いため a 層と c 層の境界があいまいである。
 4 a 層 基本層序のV層に対比される黒色粘土質土である。
 4 b 層 4 a 層に二次堆積火山灰層が混入するため白色がある。
 4 c 層 4 a 層とほぼ同じで、b 層によって隔てられる。
 5 a 層 基本層序のV層に対比される。灰白色(10YR7/1)の二次堆積火山灰土である。垂直方向のクラックに酸化鉄が沈着している。弥生時代の水田面を覆う層と同一である。
 5 b 層 5 a 層に6層土が混入。
 5 層 5 a 層と同様であるがa、b 層の境界が不明瞭である。
 6 a 層 基本層序VI a層に対比される黒褐色粘土質土層である。5 a 層同様の酸化鉄が見られる。
 6 b 層 基本層序VI b層に対比される黒色粘土質土層である。a 層に比して黒色が強く、酸化鉄は少ない。
 6 c 層 b 層に類似するが泥炭質が強くなり植物遺体を多く含む。
 6 d 層 やや青みがかった砂質層。
 6 層 a、b、c の境界が不明瞭であるが、a、b 層に相当すると思われる層。

S = 1 : 50

図10 第1号水路跡A、B地区土層断面

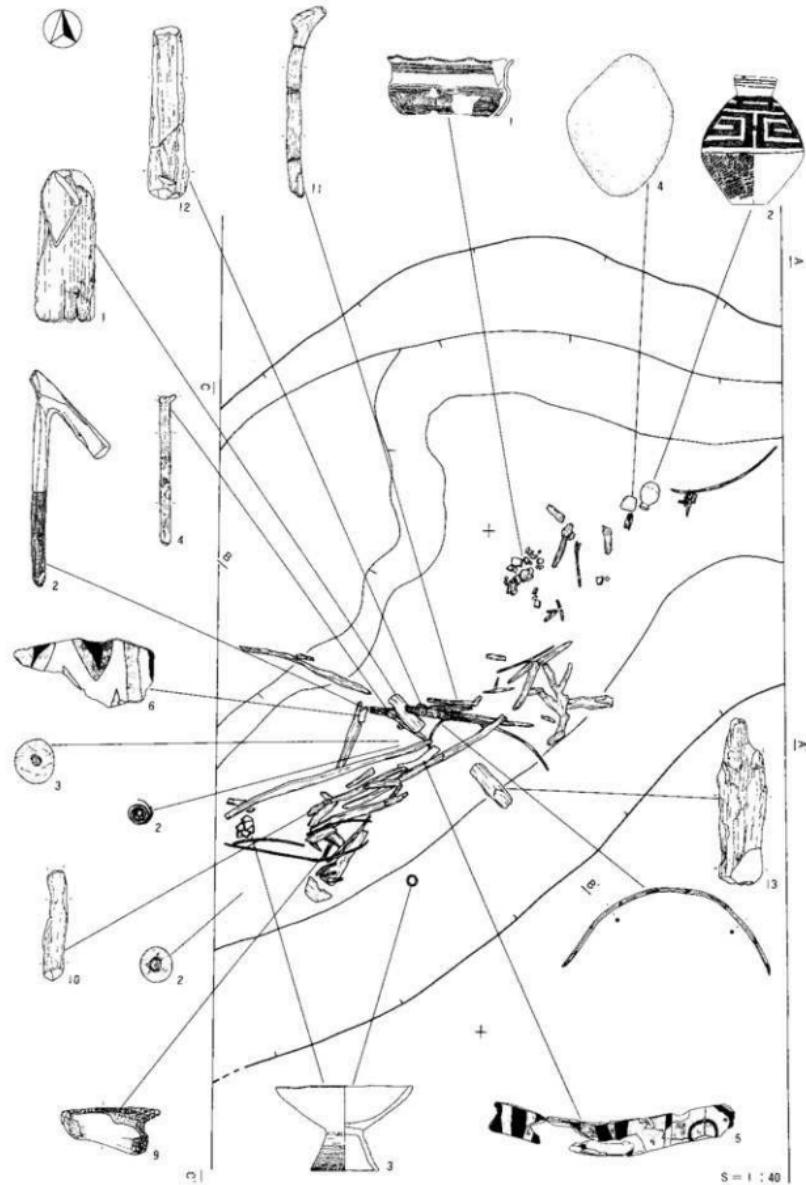


图11 第1号水路A、B地区遗物出土状态

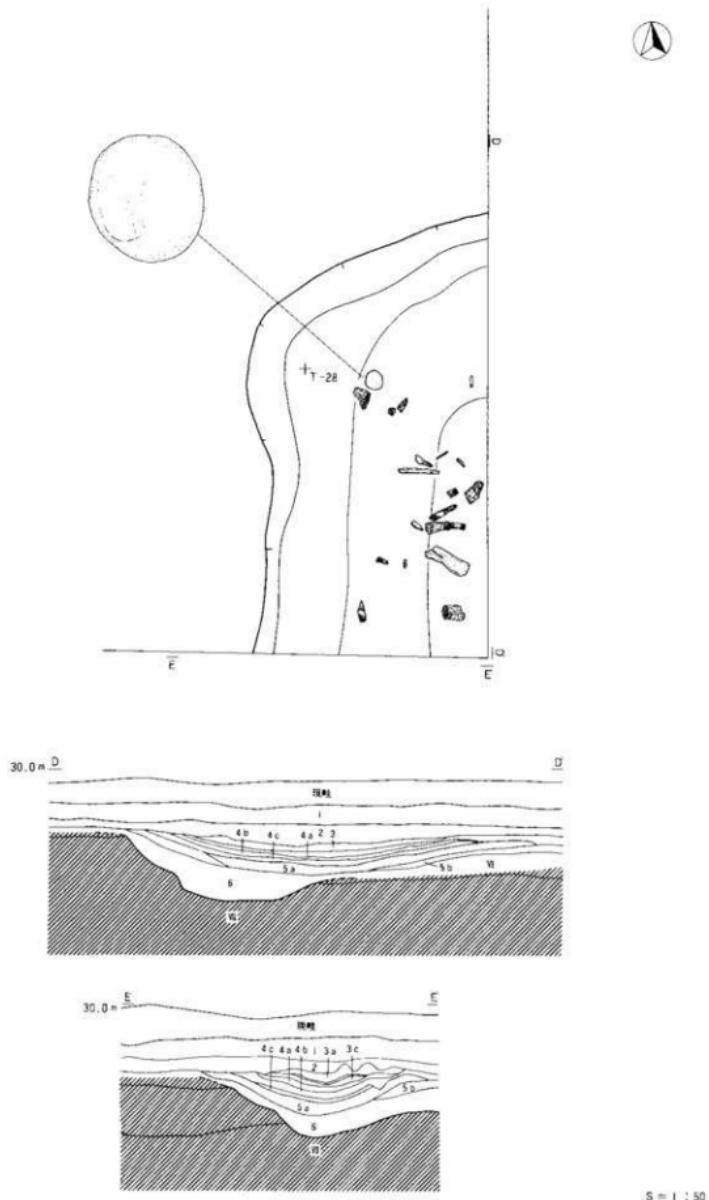


図12 第1号水路跡C地区遺物出土状態

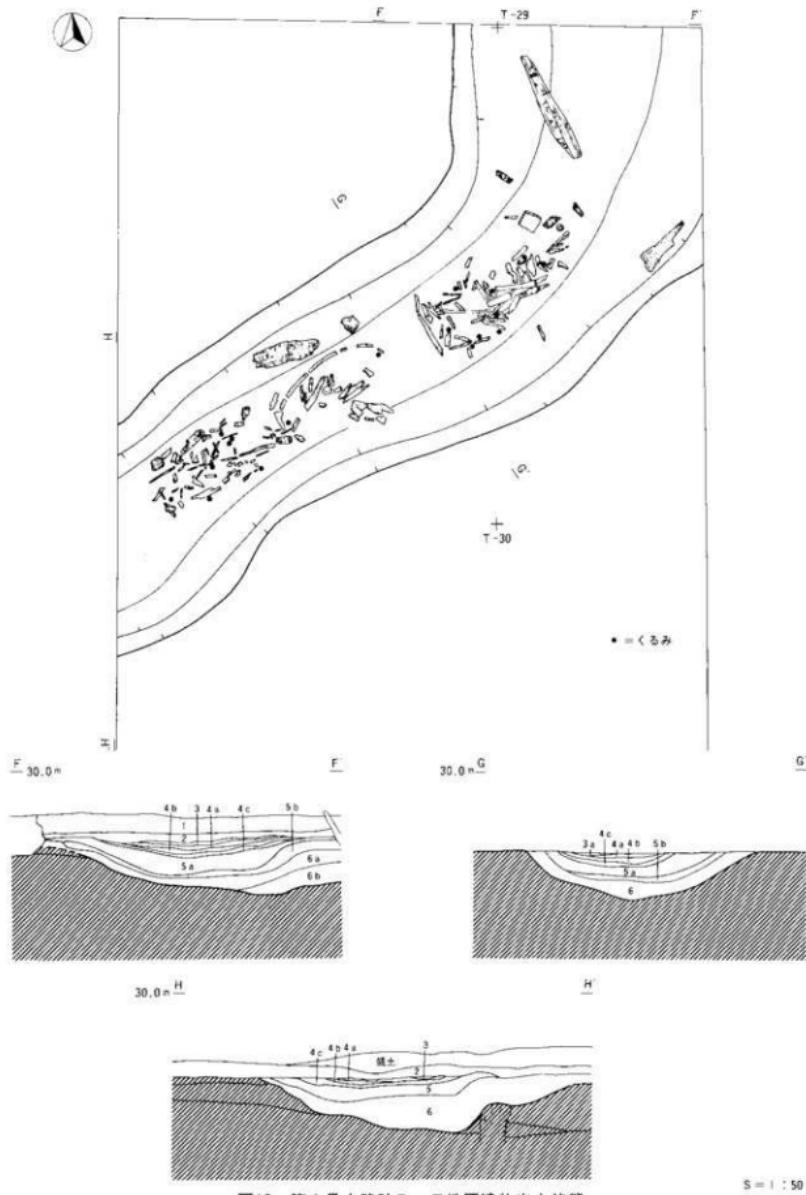


図13 第1号水路跡D、E地区遺物出土状態

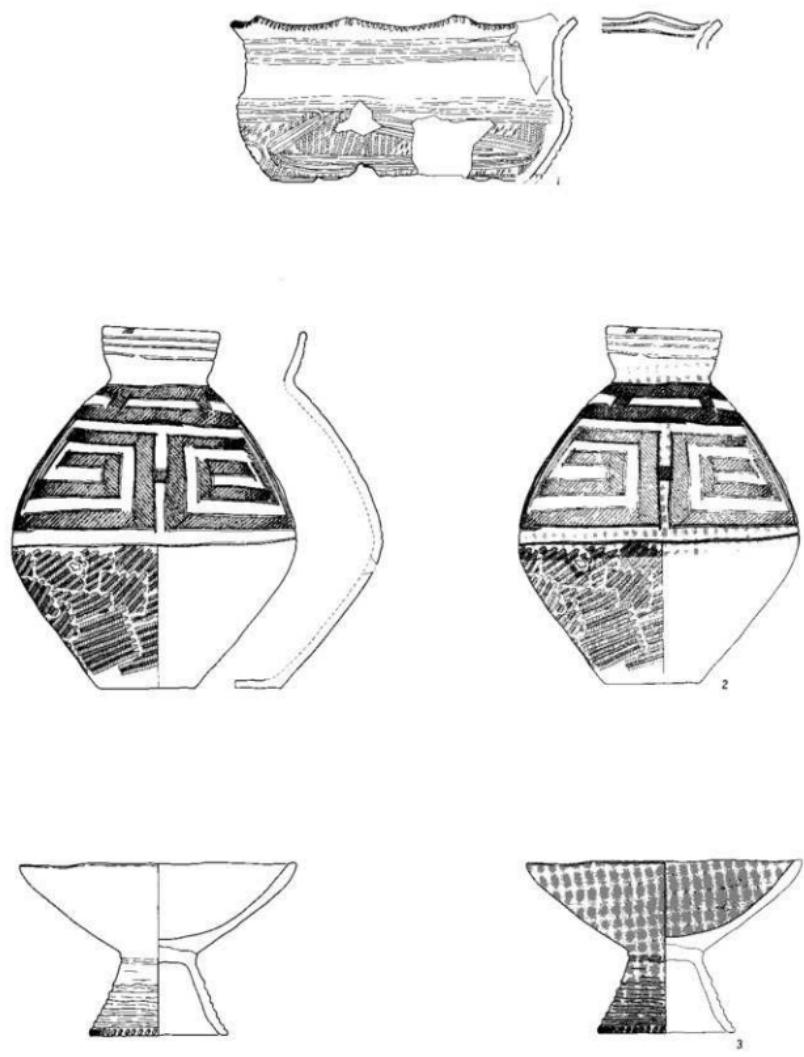


図14 第1号水路跡出土土器（1）

網かけ部は赤彩

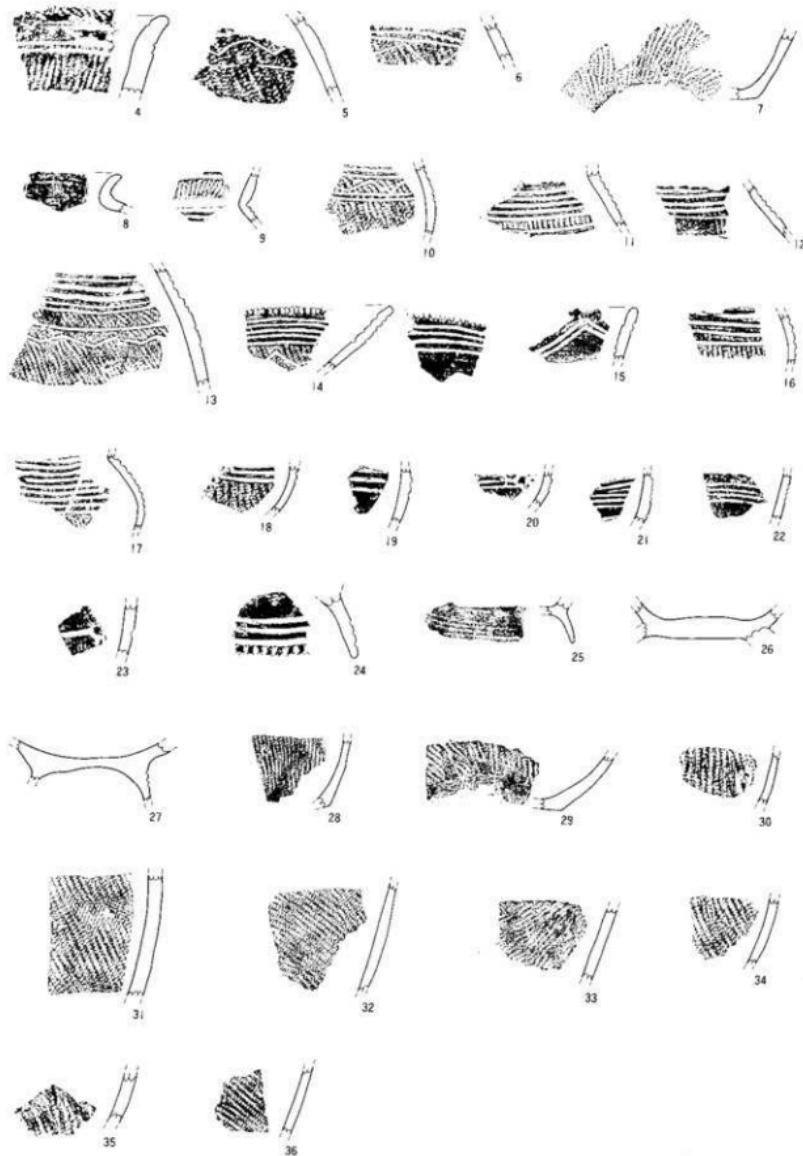


图15 第1号水路出土土器（2）

 $S = 1 : 3$

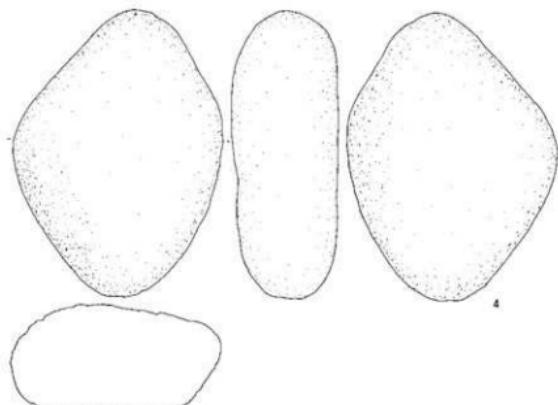
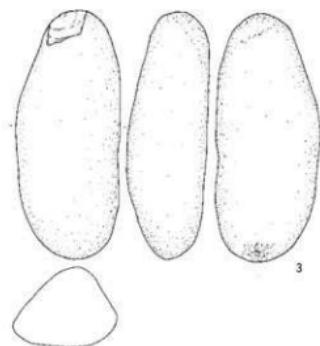
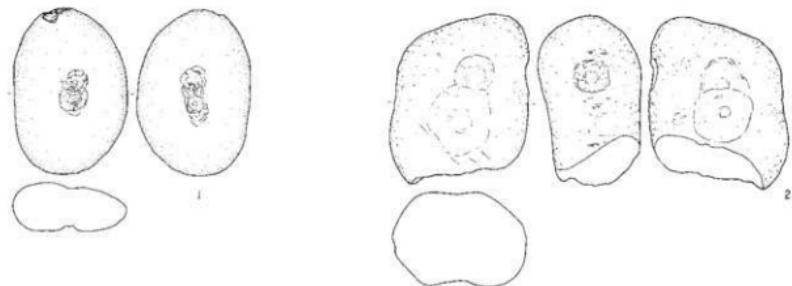


图16 第1号水路跡出土石器（1）

S = 1 : 3

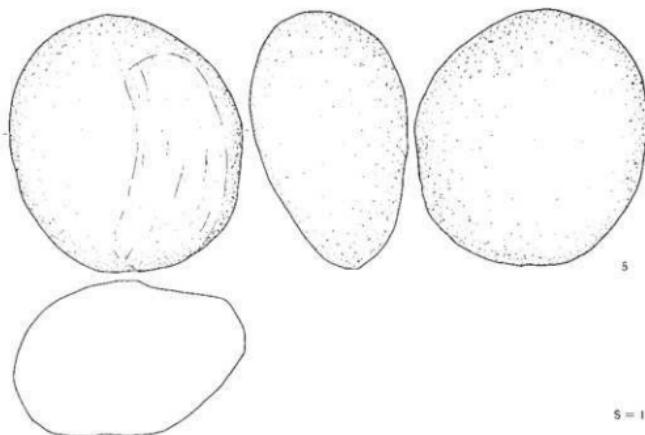


圖17 第1号水路跡出土石器（2）

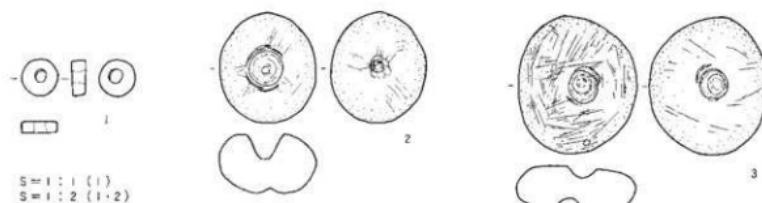


圖18 第1号水路跡出土石製品

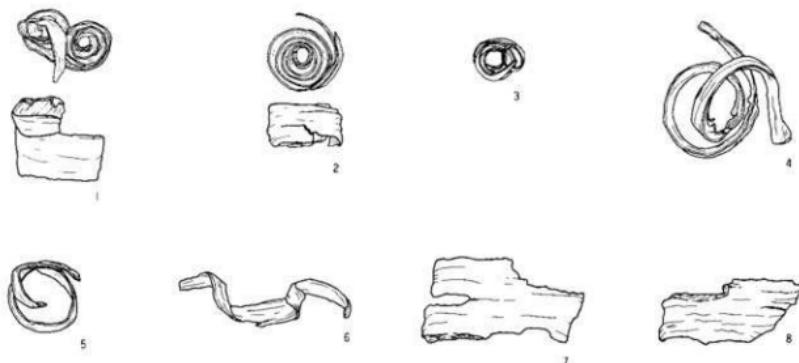


圖19 第1号水路跡出土樹皮

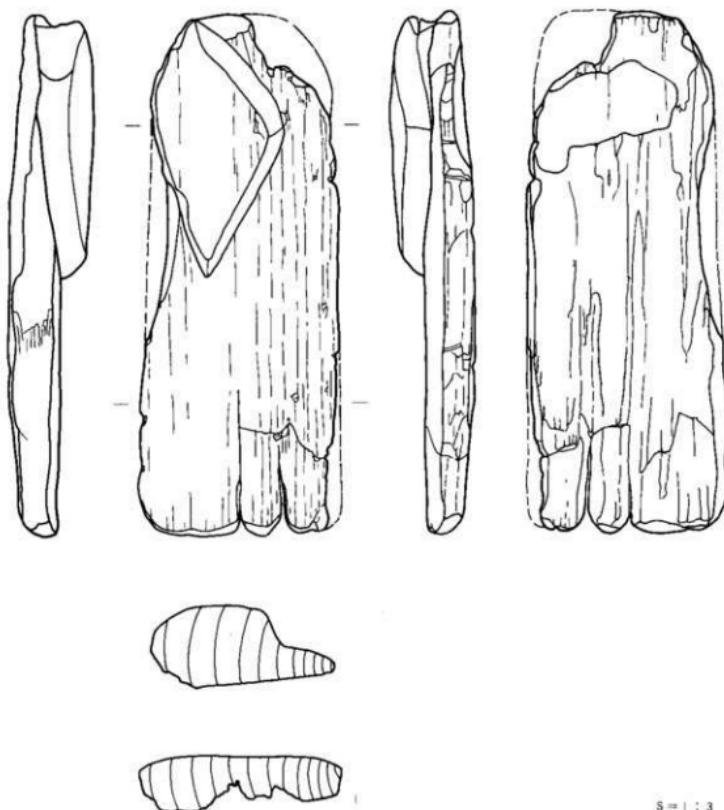
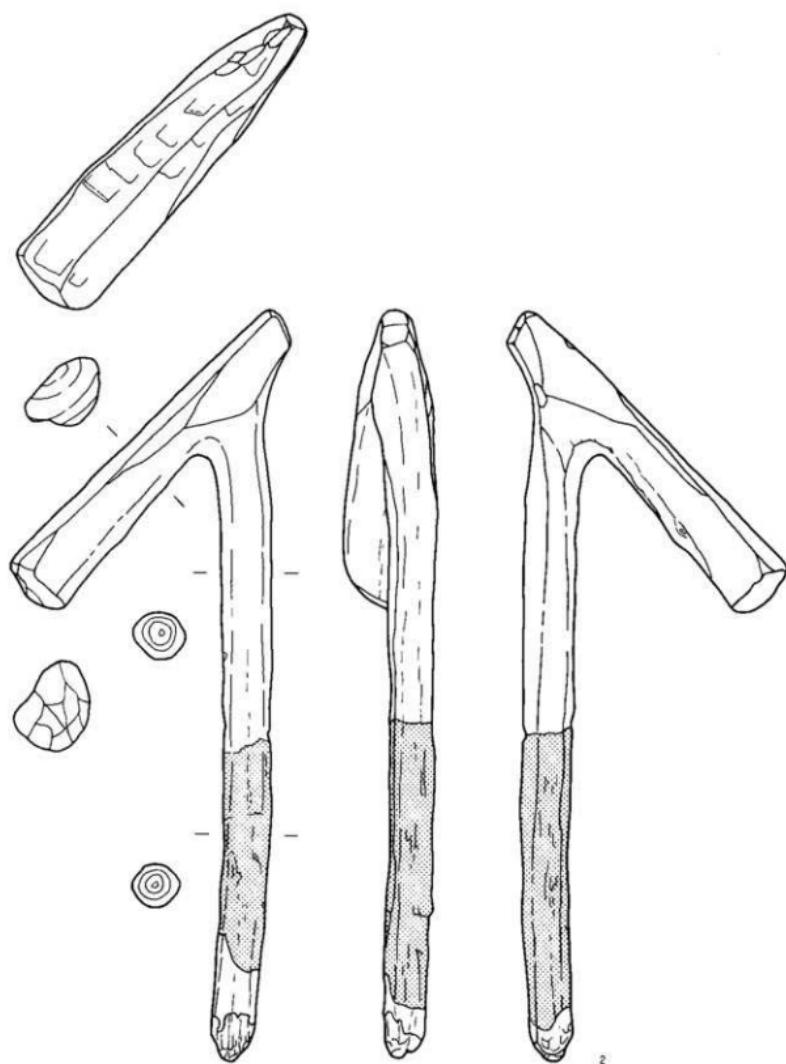
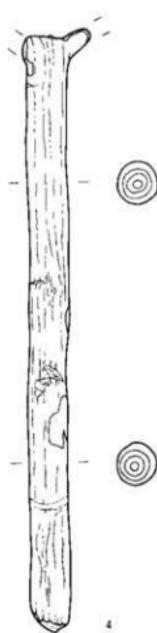
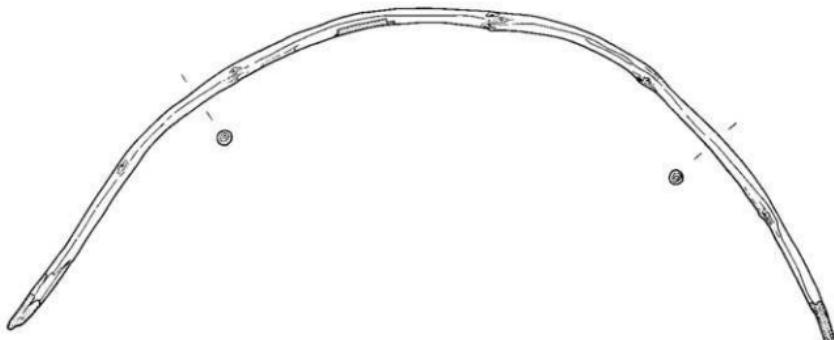


図20 第1号水路跡出土木製品（1）



網かけ部は焼け焦げ範囲

図21 第1号水路跡出土遺物（2）



接かけ部は焼け焦げ範囲

S = 1 : 3

図22 第1号水路跡出土木製品（3）

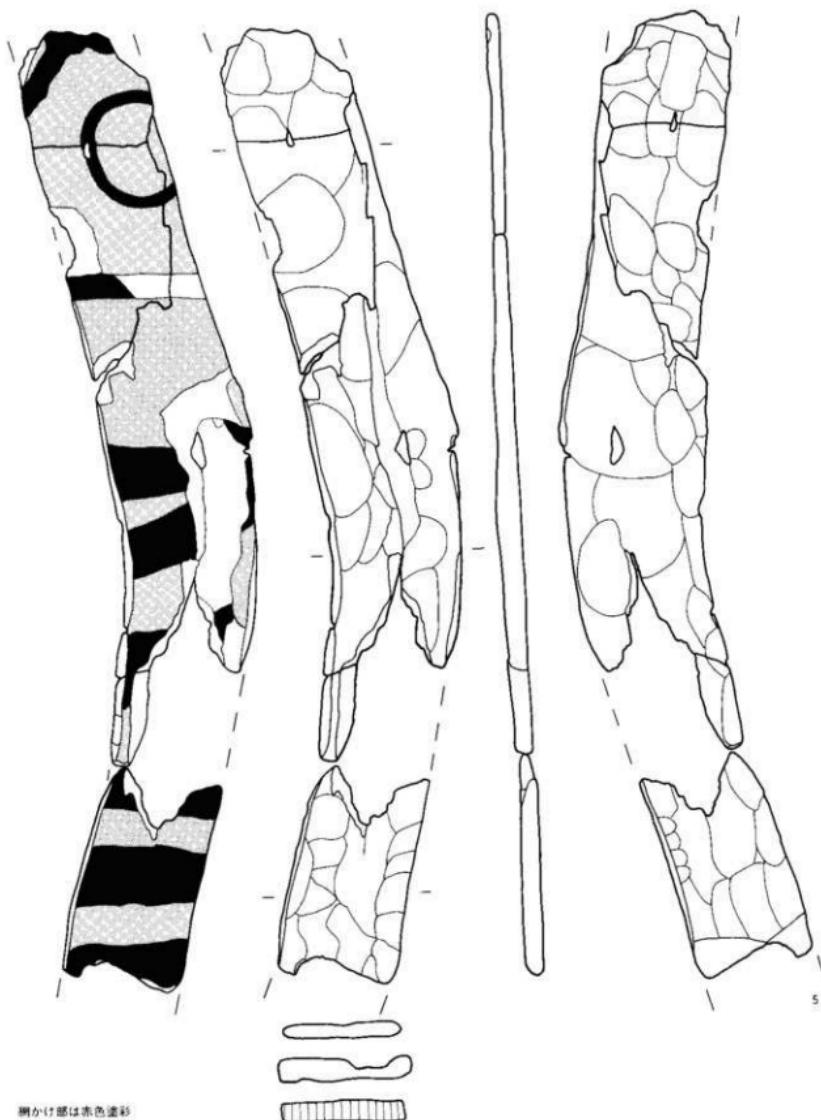


図23 第1号水路跡出土木製品（4）

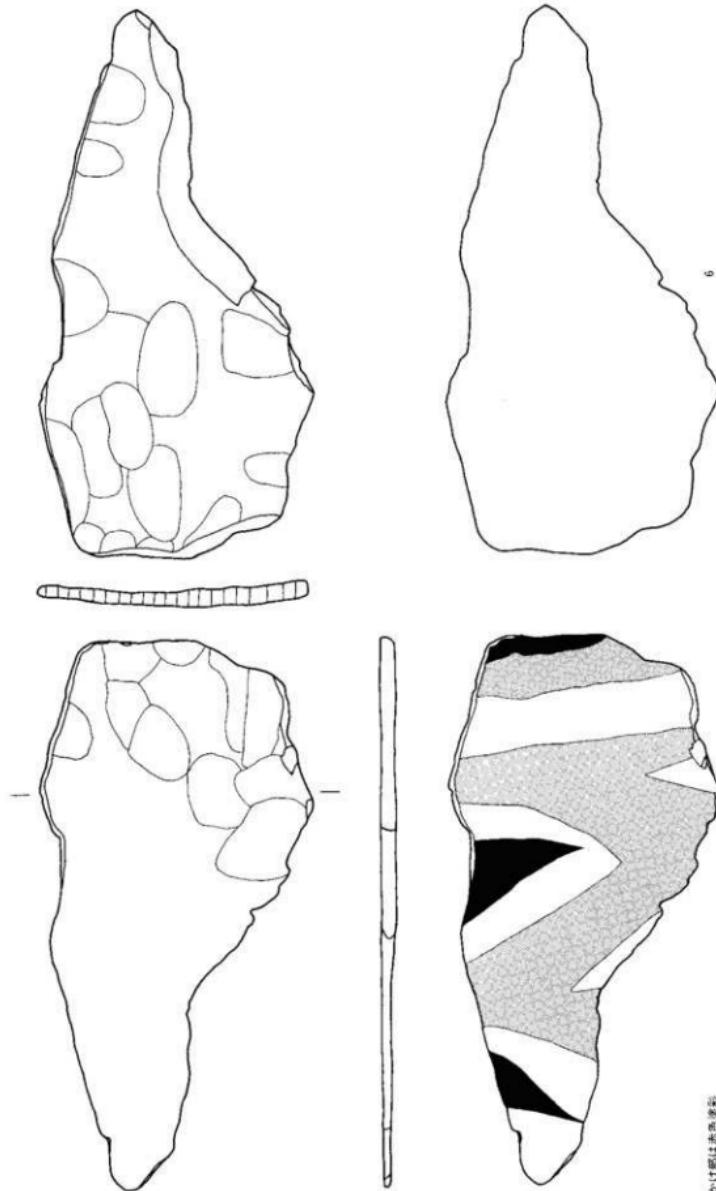


図24 第1号水路出土木製品（5）

塗かけ面は赤色
黒塗り面は黒色

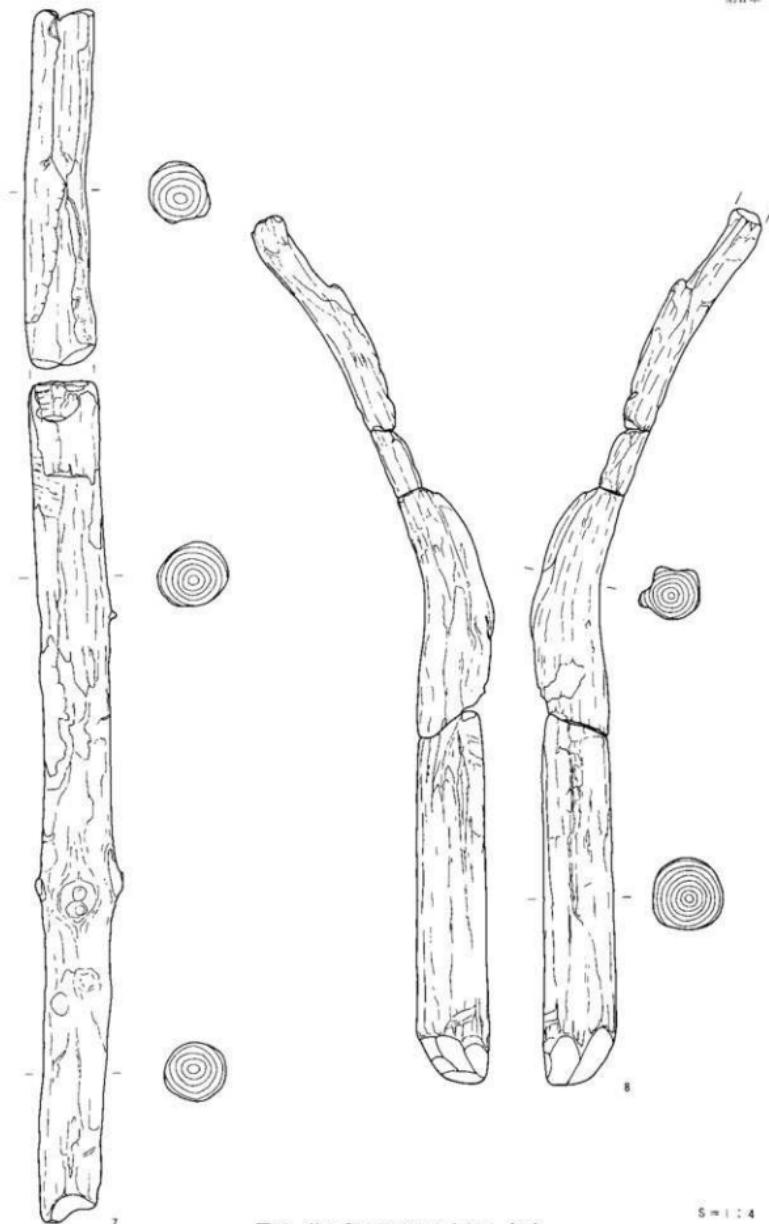


图25 第1号水路出土木製品（6）

$5 = 1:4$

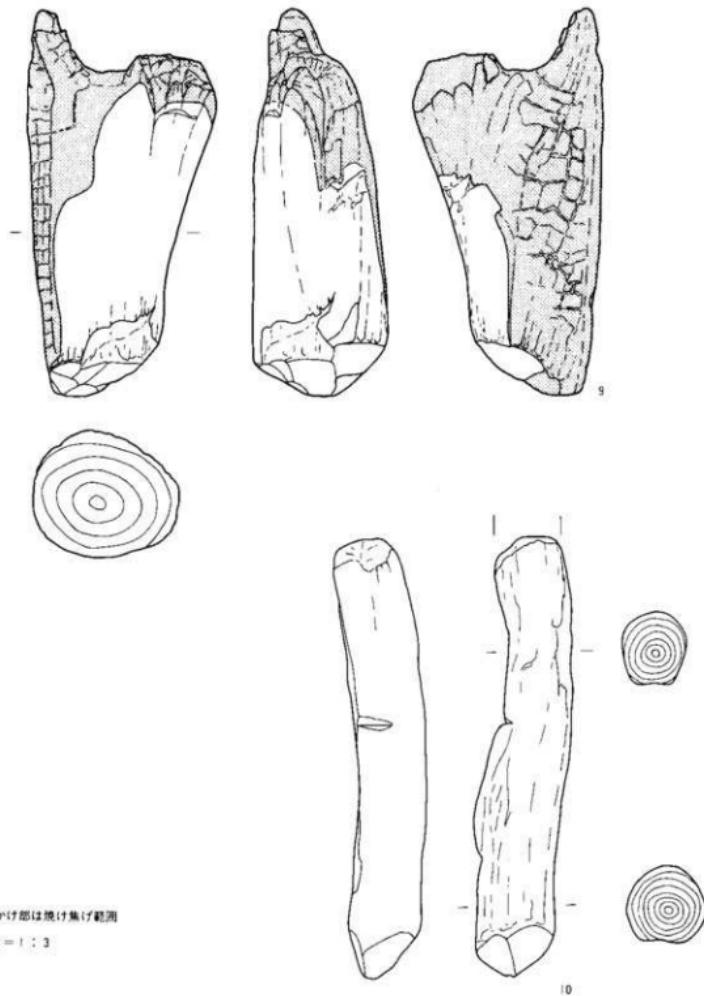


図26 第1号水路跡出土木製品（7）

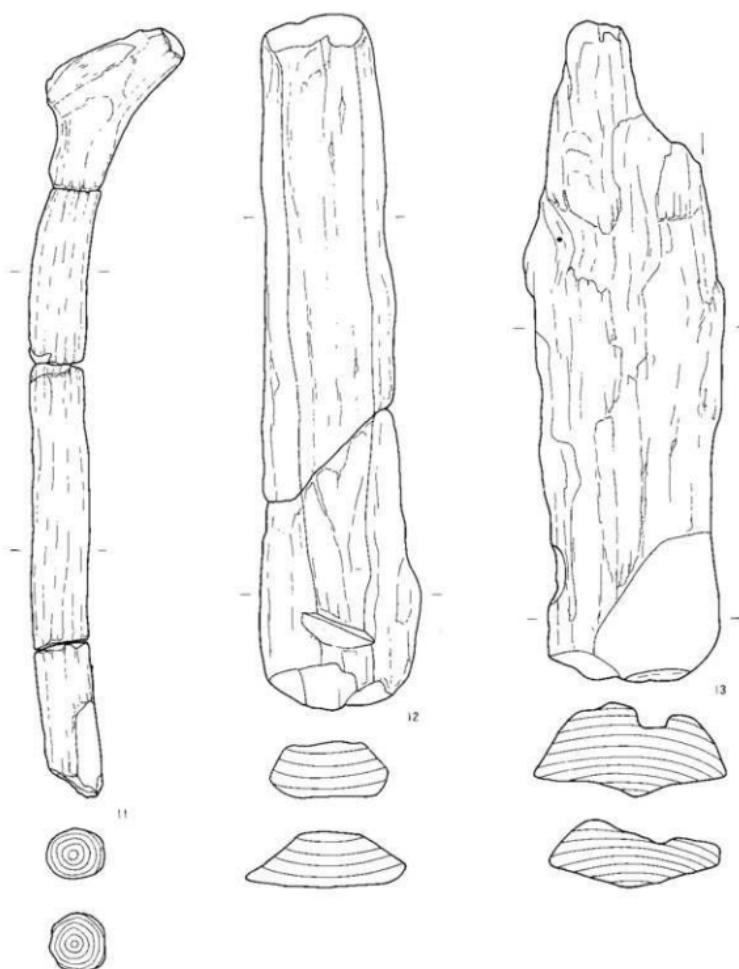


図27 第1号水路跡出土木製品（8）

S = 1 : 3

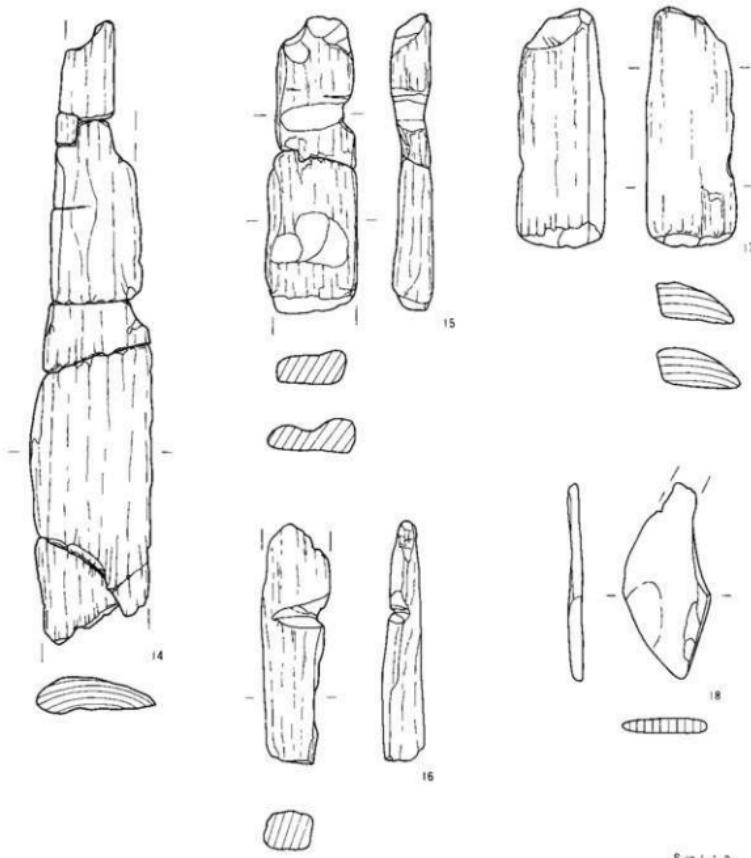


図28 第1号水路跡出土木製品（9）

S = 1 : 3

第2号水路跡

【位置】 S～T-33～34グリッドにおいて確認されている。

【重複】 なし。

【平面形・規模】 両端は調査区外まで延伸しているため全貌は明確ではない。本水路跡の南東延長上のQ～R-34～35グリッド付近にも試掘坑を開けてみたが、水路の延伸部分を検出することはできなかった。調査区付近一帯は地形的には全体的に北から南へ緩く傾斜しているが、35ライン付近から南方向への傾斜はより強くなるため、本水路跡はその辺で南に開口していた可能性も考えられる。第2号水路跡はこれまでに確認された水路の内、最も南に位置する。

【壁・底面】 壁面は底面から緩く立ち上がる。底面の傾斜は不明瞭であるが、調査区両端の断面で比較すると僅かに西から東へ傾斜しているようである。他の水路跡は全て北東方向から南北方向への走向性をもつて対し、本水路跡のみ逆となる。ただし、水流はいずれも南方向へ流れたものと思われる。

【堆積土】 火山灰起源と推定されるIII層、V層が明瞭でその落ち込みによって本遺構は確認された。V層堆積以前の段階から既に存在していたものと思われる。底面に近いほどV層がしだいに不明瞭になることから、V層堆積後も一定量の水流があったものと推定される。

【遺物】 遺物は出土していないが、胡桃の種子、自然木等が検出されている。第1号水路跡から検出された胡桃の種子は分割されたものが主であるのに対し、本水路跡のものは完形の物がほとんどである。検出された自然木も根の部分である。

第3号水路跡

【位置】 T-5～6グリッドにおいて確認されている。

【重複】 なし。

【平面形・規模】 両端は調査区外まで延伸しているため全貌は不詳である。幅は調査区東端付近で約1.1m、西端付近で約20cmである。

【壁・底面】 壁面は底面から緩く立ち上がる。調査区が狭いため底面の傾斜は明瞭ではないが、地形から判断すると、北東から南北方向に傾斜しているものと考えられる。

【堆積土】 V層土で覆われている。

【遺物】 出土していない。

【その他】 今回の調査区の北側には昭和58年度の発掘調査のVI区が位置する。本水路跡は確認された範囲内においては直線的であるが、途中で屈曲してVI区で確認された第8号水路や第9号水路につながる可能性も考えられる。

第4号水路跡

【位置】 T-7グリッドにおいて確認されている。

【重複】 なし。

【平面形・規模】 両端は調査区外まで延伸しているため全貌は不詳である。幅は50～70cmである。水路の北側には平行して畦状の高まりが認められる。水路掘削時の土を盛り上げたものである可能性

も考えられる。

【壁・底面】 壁面は底面から緩く立ち上がり、北側はそのまま畦状の高まりに連続する。調査区が狭いため底面の傾斜は不明瞭である。

【堆積土】 V層土で覆われている。

【遺物】 出土していない。

【その他】 本水路跡も昭和58年度発掘調査のVI区の第8号水路跡もしくは第9号水路跡につながる可能性も考えられる。畦状の盛り上がりの存在も3者に共通する。

第5号水路跡

【位置】 T-17~18グリッドにおいて確認されている。

【重複】 なし。

【平面形・規模】 両端は調査区外まで延伸しているため全貌は不詳であるが、北東方向の延長上に第6号水路跡が位置する。両者は一連のものである可能性が高い。本水路跡の両側には平行して畦上の高まりが認められる。北側のものは比較的明瞭であるが、南側のものは不明瞭で、断面で識別される程度である。水路掘削時の土を盛り上げたものと思われる。

【壁・底面】 壁面は底面から緩く立ち上がり、畦上の高まりに連続する。確認された範囲内では底面の傾斜は明確ではないが、第6号水路跡と一連のものであるとすると、第6号水路跡から第5号水路跡方向、即ち北東から南西に水流があった可能性が考えられる。

【堆積土】 V層土で覆われている。

【遺物】 出土していない。

第6号水路跡

【位置】 Q-17グリッドにおいて確認されている。

【重複】 なし。

【平面形・規模】 両端は調査区外まで延伸しているため全貌は不詳であるが、南西方向の延長上に第5号水路跡が位置する。両者は一連のものである可能性が高い。第5号水路跡では平行する畦上の高まりが認められたが、本水路跡では不明瞭である。

【壁・底面】 壁面は底面から緩く立ち上がる。V層土で覆われているためプラン確認は容易であったが、掘り込みは非常に浅い。

【堆積土】 V層土で覆われている。

【遺物】 出土していない。

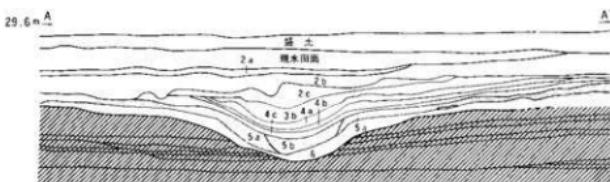
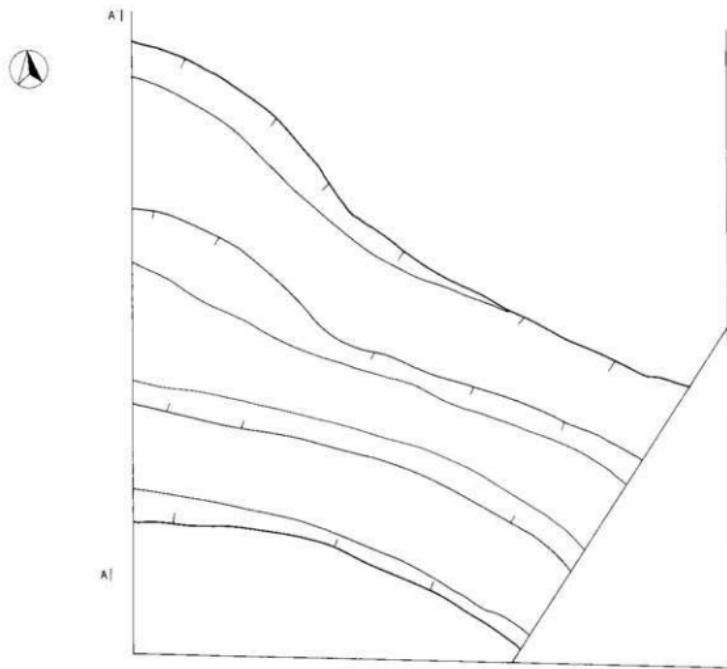
7号水路跡

【位置】 Q~R-29グリッドにおいて確認されている。

【重複】 なし。

【平面形・規模】 両端は調査区外にまで延伸するため規模は不詳である。

【壁・底面】 VII層を掘り込んで作られたようであるが、床面、壁面共に不明瞭である。



- S = 1 : 50
- 図29 第2号水路跡

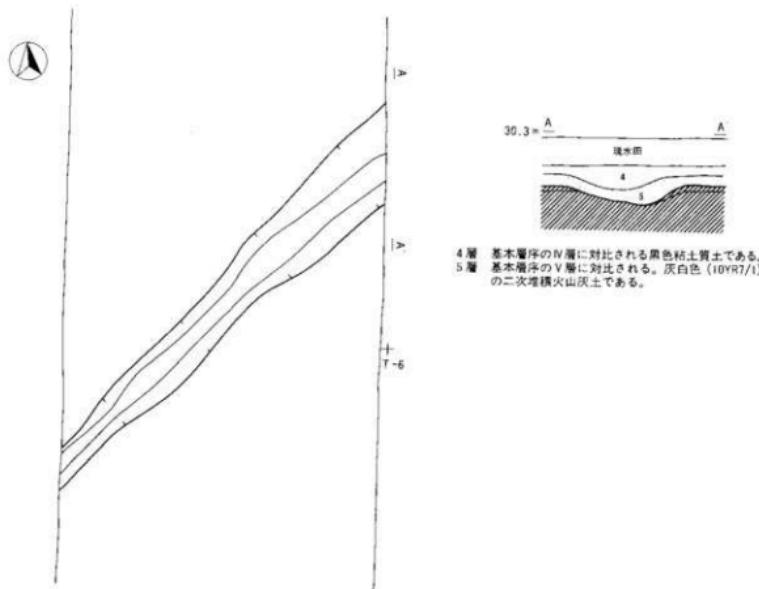


図30 第3号水路跡

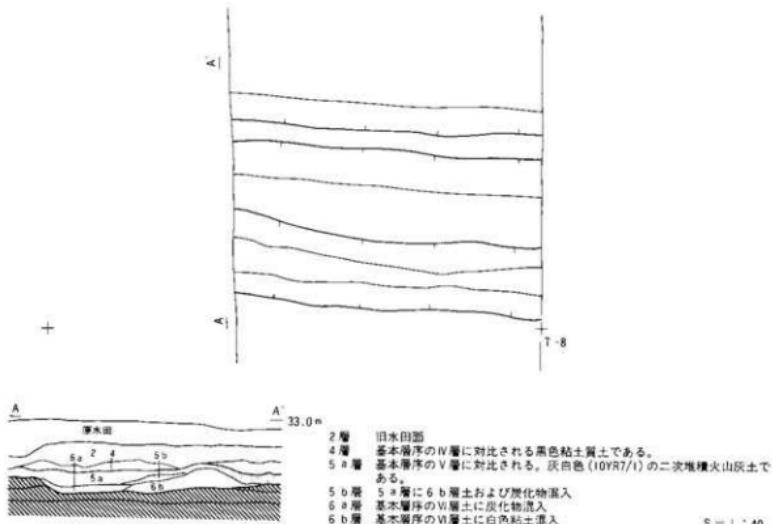


図31 第4号水路跡

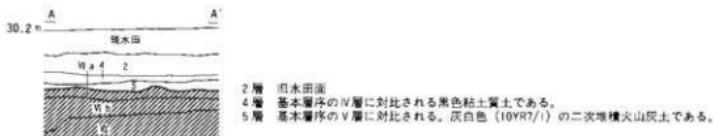
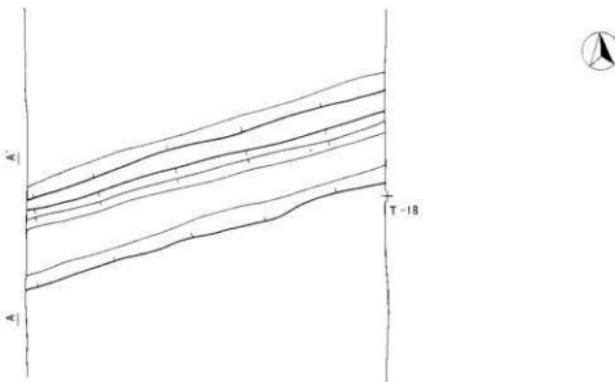


図32 第5号水路跡

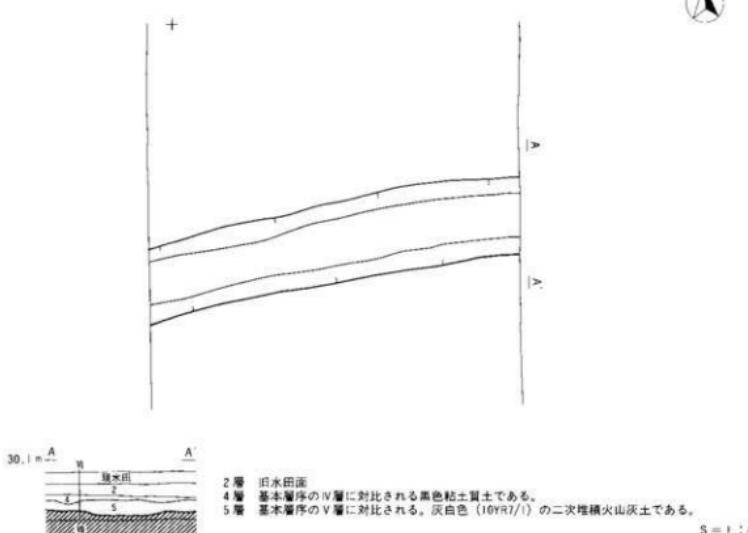
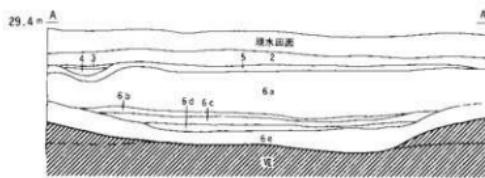
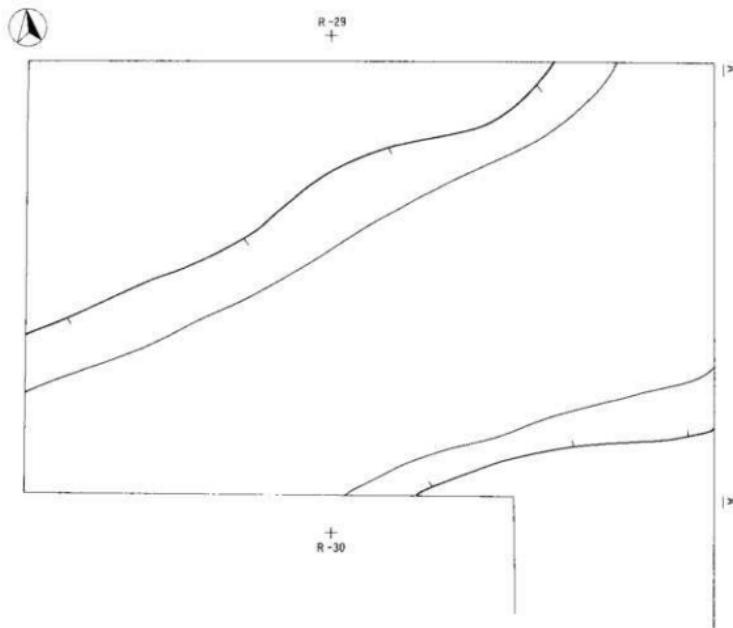


図33 第6号水路跡



- 2層　灌水田面
 3層　基本層序Ⅲ層に対比されるにぶい黄橙色（IOYR6/4）の二次堆積火山灰層。
 4層　基本層序Ⅳ層に対比される黒色粘土質土である。
 5層　基本層序Ⅴ層に対比される淡白色（IOYR7/1）の二次堆積火山灰土である。
 6a層　基本層序Ⅵ層に対比される黒褐色粘土質土である。
 6b層　a層に二次堆積火山灰土が流入し白色がかる。
 6c層　a層に類似する。
 6d層　b層に類似する。
 6e層　a層に類似する。

S = 1 : 40

図34 第7号水路跡

[堆積土] V層はほぼ水平に堆積していることから推察すると、V層が堆積した頃、即ち昭和57、58年度の調査で検出された水田が埋没した頃には本水路は既に機能していなかったものと考えられる。従って他の水路よりは時期的に古いものと思われる。火山灰起源と思われるV層、VI層の間にさらに2枚の火山灰起源と思われる層が検出されている。

[遺物] 出土していない。

(太田原 潤)

第4節 大畦

第1号大畦

[位置] 現在の農道を挟んでQ～R-24～25グリッドとS～T-25グリッド付近で検出されているが本来一連のものと思われる。仮に前者で確認された部分を東区、後者で確認された部分を西区とする。

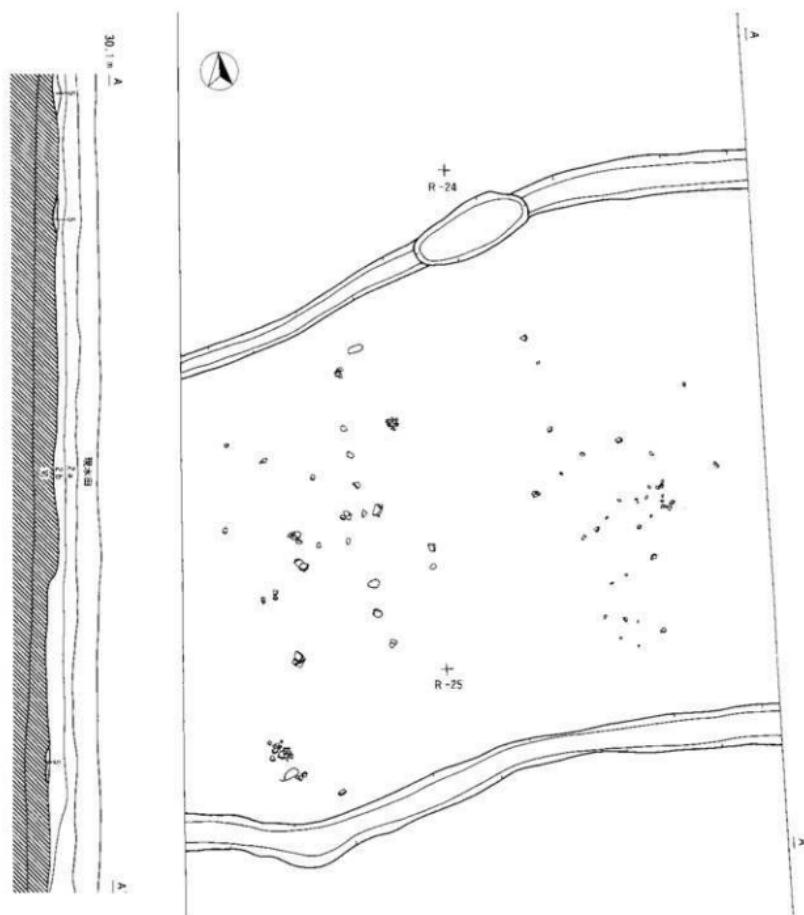
[重複] なし。

[平面形・規模] 側溝状の浅い溝に挟まれた部分が大畦の範囲と思われる。側溝間は東区で約4.2mであるが、西区は北側の側溝が不明確である。

[堆積土] 側溝にはV層が堆積しているが側溝間にはV層が認められない。この部分は周囲より高いに畦状の高まりであり、V層は本来その上位に堆積していたものと推定されるが後世の水田耕作により削平されたものと思われる。

[遺物] 側溝間に多数の土器が出土しているが、復元可能な個体は出土していない。

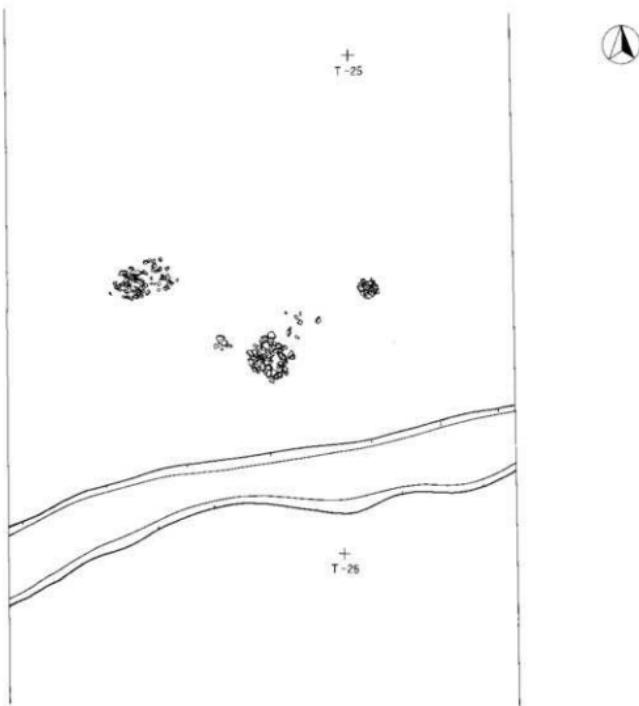
(太田原 潤)



2 a 層 旧水田層
2 b 層 旧水田層
5 層 基本層序のV層に対比される。灰白色 (10YR7/1) の二次堆積火山灰土である。

図35 第1号大壁東側

S = 1 : 40



S = 1 : 40

图36 第1号大坑西侧

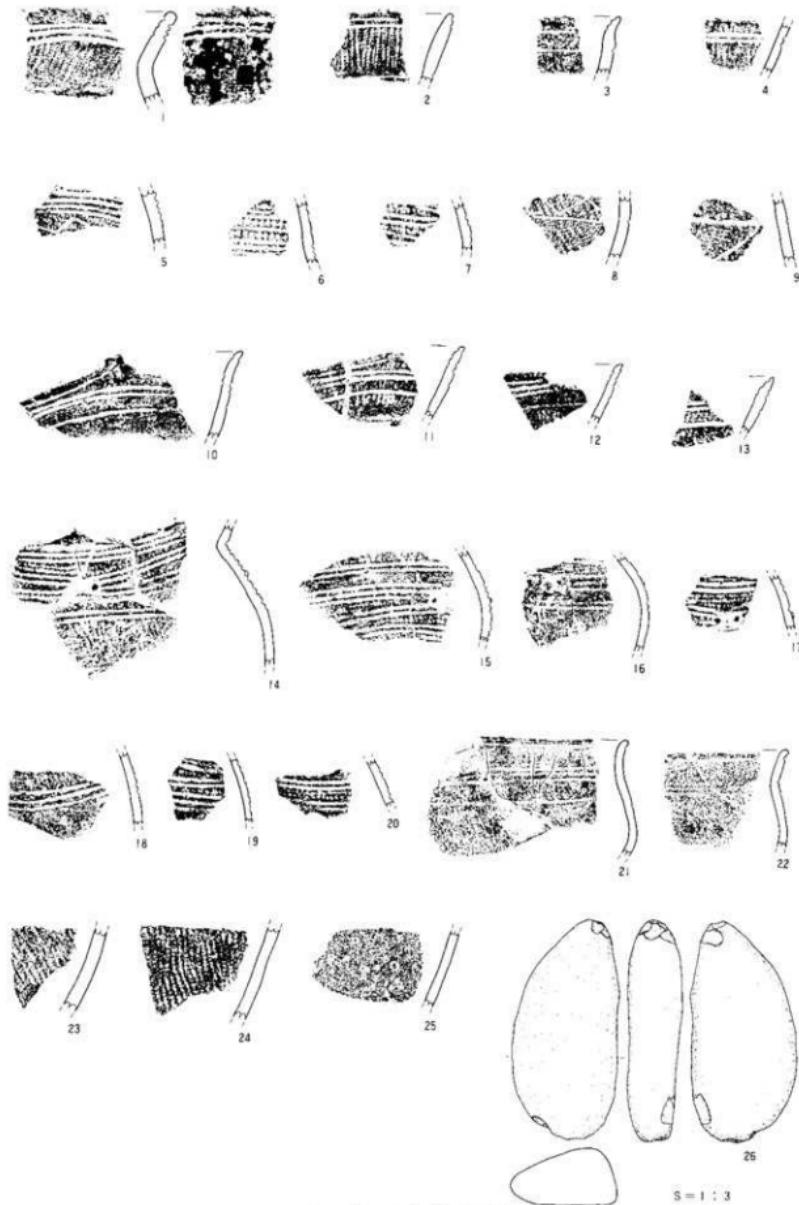


图37 第1号大窑出土土器

S = 1 : 3

第5節 遺構外出土遺物

土器は調査区のほぼ全域から検出されるが、第3号水路跡東側、第5号水路跡北側、南側、第6号水路跡北側、南側から特に多量の土器が検出されており、復元可能な土器も多い。

出土した土器は以下のようにⅠ類からⅤ類に大別し、それぞれをさらに細別した。

(Ⅰ類) 壺形土器

壺形土器は、基本的に緩く外反した口縁部を有し、肩部が膨らみ、胴長を呈す。細部の形状や法量では違いがみられるため、今回は大型（A類）、中型（B類）、小型（C類）、その他（D類）に細分した。

I A類（図45-1、図50-17、18）

胴最大径36（？）～48cm、器高30～55cmの範囲に推定できる大型なもので、半完形のものが1個体、胴部の破片が2片（同一個体と思われる）出土した。

半完形の個体（図45-1）は、平坦な口縁で緩く外反し、肩部で大きく内湾する胴長になると思われるもので、かなり大型の器形である。

胴部の破片2片（図50-17、18）は、器厚が8～9mmということと、推定胴最大径が36cmになるとすることからI A類に分類した。器形としては、前者と同様、肩部で大きく内湾する胴長になると思われる。

I B類（図50-19～25、図51-26）

胴最大径がおよそ15～25cm、器高がおよそ20～30cm前後に推定できる中型なもので、破片が8片出土している。

19と25（同一個体）は、平坦な口縁でやや強く外反し、胴中央部かそれよりやや上位に最大径を有する胴長の器形であると思われる。文様の特徴としては、口縁部上位に横位沈線と鋸歯状文を施している点であり、20と23（同一個体）、22にも同様の施文がなされている。また、口縁部上位に横位沈線だけのものにも分けられる（図50-21、24、図51-26）。

I C類（図45-2、図51-27）

胴最大径がおよそ10cm前後、器高が15cm前後に推定できる小型なもので、ほぼ完形のものが1個体、破片1片が出土している。

ほぼ完形の個体（図45-2）は、平坦な口縁でやや強く外反し、胴中央部かそれよりやや上位に最大径を有する器形である。27は、やや外反する口縁部の破片であると思われる。

I D類（図51-28～34）

ここでは、器形的には壺に含まれるが、A～C類のどれに当てはまるかは明らかではないものを集めた。全てが底部の破片で7個体出土している。底面はほとんどが無文であるが、沈線らしき痕が残るもののが1個体みられる（図51-28）。底部は、繩文が施文されているが、ほとんどが磨耗しており、R-L繩文を斜位に施文しているのが1個体だけ確認できる（図51-30）。

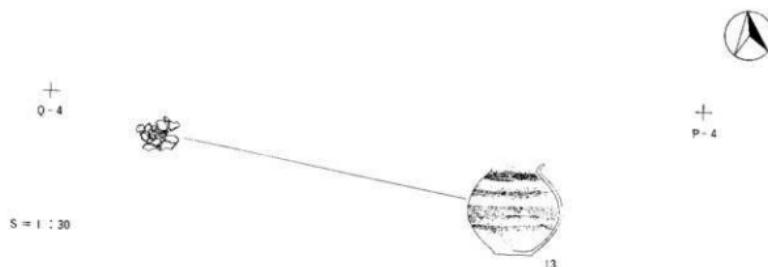


図38 造構外出土土器出土状態（1）

（II類）長頭甕形土器（図45-3、図51-35～37）

長頭甕形土器は、口縁部は外反し、ほぼ垂直ないしは「ハ」字状に内傾しながら立ち上がる頭部を有し、肩部がやや強めに張る。胴最大径は20～25cm程度、器高は25～30cm程度に推定され、甕形土器でいう中型に値するものである。ほぼ完形のものが1個体、破片で3片（同一個体と思われる）出土している。

ほぼ完形の個体（図45-3）は、平坦な口縁で軽く外反し、頭部がほぼ垂直に立ち上がるもので、肩部がやや張る器形である。文様の特徴としては、頭部に5条の横位沈線を施文後、それにまたがるように縱位の沈線を施文して、工字状の文様を形成している点である。

破片3片（図51-35～37）は、山形の突起を有する波状の口縁で、軽く外反し、頭部がほぼ垂直に立ち上ると推測される。山形突起を有するため台付鉢と考えることもできたが、胴径が前者と同じ位になると推測できることから、長頭甕に分類した。

（III類）壺形土器

壺形土器も甕形土器同様、形状や法量に違いがみられるため、大型（A類）、中型（B類）、小型（C類）、その他（D類）に細分した。

III A類（図46-4、5、図51-38、図52-39、41）

胴最大径35～39cm、器高34～45（？）cmに推定できる大型なもので、半完形のものが2個体、破片が3片出土している。

半完形の個体（図46-4、5）は、いずれも「無頸壺」や「短頸壺」に類するものであり、胴中央部か、やや上位に胴最大径を有する球形であると推定できる。5は4に比べ、やや広口であることがわかる。文様は胴中央部まで施文され、数条の横位沈線と、甕形土器に比べると大きく展開する鋸歯状文を有する。また、2個1対と思われる小穴が穿孔されている。

III B類

胴最大径17～30cm、器高16～26cmに推定できる中型なものである。形態上多種多様なものが多いいため、その他も含めて以下の4類に細分してみた。

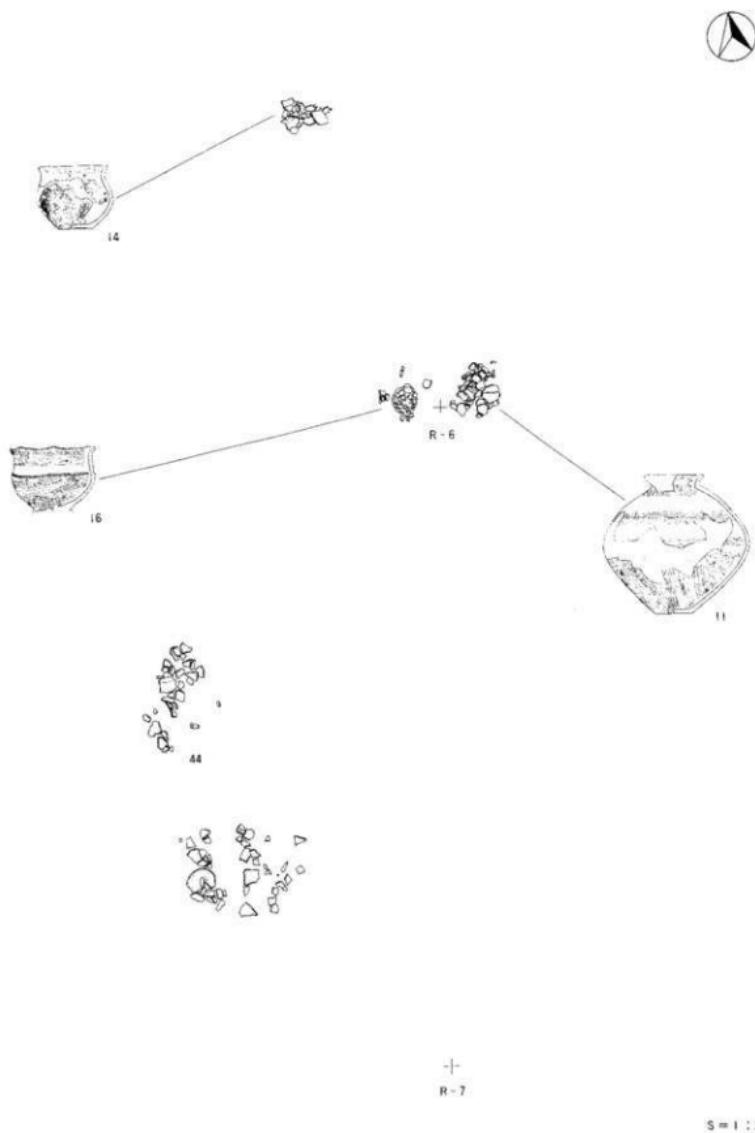


圖39 遺構外出土土器出土狀態（2）



12

S = 1 : 30



S = 1 : 30

図40 遺構外出土土器出土状態（3）

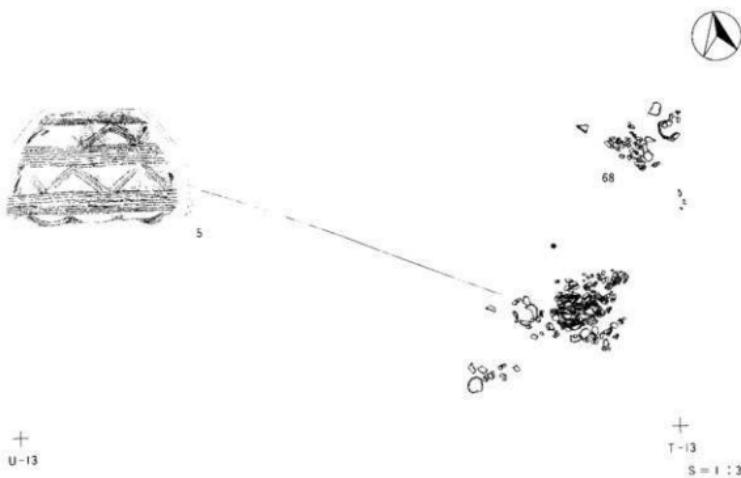


図41 遺構外出土土器出土状態（4）

III B 1 類 (図47-6、7、図52-40、42、44)

大きく外反した口縁部をもち、最大径を胴中央部に有する。全体のプロポーションは算盤玉を想起させる。肩部の張りが強く、器高が低いため、口縁部は器形全体からみるとかなり大きく感じさせる。口縁部中位には2個1対と思われる小穴が2箇所穿孔されたと推定できる(図47-6、7、図52-44)。文様は胴中央部からやや下にかけて横位沈線、粘土紐・粘土粒の貼付け、鋸歯状文が主である。中に連繋菱形文のような文様もみられる(図52-42)。

III B 2 類 (図47-8、図48-9~10、図52-43、45、46)

「無頸壺」や「短頸壺」に類するもので、半完形ものが3個体出土している(図47-8、図48-9~10)。いずれも胴部下半が欠損しているため、全体の器形が明らかではないが、III B 1 類の口縁部を切断したような器形になるものと考える。文様は、横位沈線や鋸歯状文の他、錨文を有するものみられる(図47-8、図48-10)。また、2個1対と思われる小穴が2箇所穿孔されたと推定できる。

III B 3 類 (図48-11、図49-12~13)

III B 1・2 類に比べ、頸部が極端に細い器形で、ほぼ完形のものが3個体出土している(図48-11、図49-12、13)。口縁部は軽く外反して立ち上がるが、それほど大きな口縁をもたないものが多いようである。文様は、3個体とも同じような特徴がみられ、数条の横位沈線を1単位とし、間隔をおいて4~5単位施文している。その文様帶は、器形全体からみて上位2/3を占めている。また胴中央からやや下にかけては、3個体とも鋸歯状文が施文されている。III B 1・2 類にみられる2個1対と思われる穿孔はみられない。

III B 4 類 (図52-47~52、図53-53)

法量的には中型壺に属するが、器形的にIII B 1~III B 3 のどれに当てはまるかが明らかでないもの

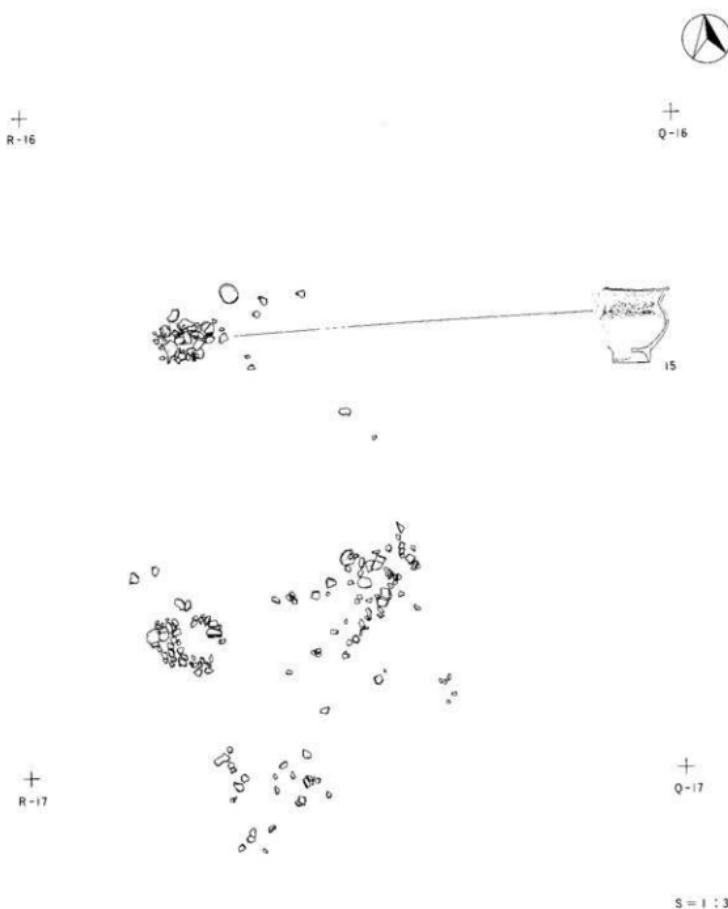


図42 遺構外出土土器出土状態（5）

を集めた。ほとんどが肩部から胴部にかけての破片である。中には、2個1対の小穴を頸部に穿孔し、頸部がほぼ垂直に立ち上がるような器形もみられる(図52-47)。また、多条の沈線を2単位施していることからIII B 3類に属するのではないかと思われる破片もみられる(図53-53)。

III C 類 (図49-14、図53-54~55)

胴最大径13cm前後、器高11cm前後の範囲に属すると思われるもので、ほぼ完形のものが1個体出土している(図49-14)。短めの口縁・頸部を有し、最大径を胴中央部にもつ。胴径の割りに器高が短い、安定感のある器形と言える。文様は、横位沈線と鋸歯状文であるが、2個1対の小穴が2箇所穿孔さ

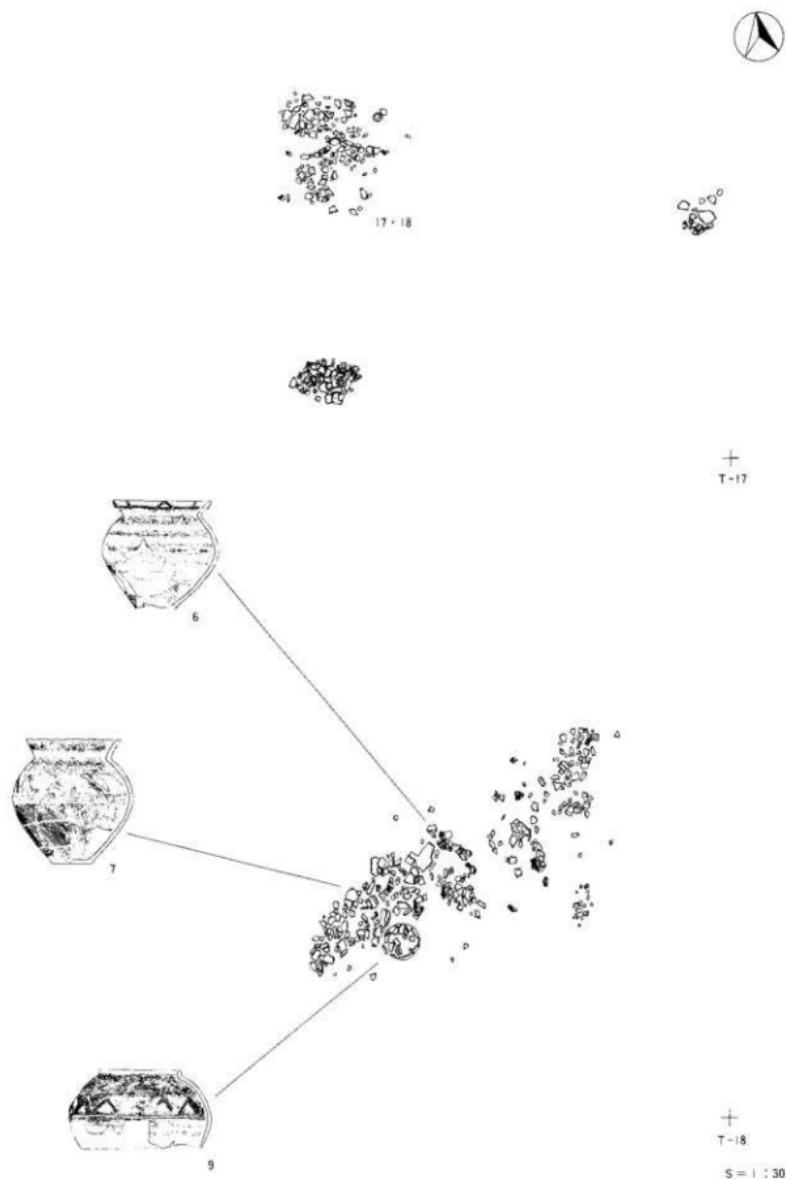


図43 遺構外出土土器出土状態（6）



図44 遺構外出土土器出土状態（7）

れている。破片にも穿孔がみられるものがある（図53-54、55）。

III D類（図53-56～64、66～67）

器形的には壺にふくまれるが、A～C類のどれに当たはまるかが明らかでないものを集めた。肩部～胸部の破片が7片、底部が4片であるが、文様帶を有する破片のほとんどに横位沈線が施文され、鋸歯状文を有するもの（図53-61、62）や、連繋菱形文のような文様を施すもの（図53-58、59）もみられる。

（IV類）鉢（台付）形土器

ここでは、鉢形土器として分類した訳だが、過去に発掘調査した垂柳遺跡（県教委・1984、村教委・1987等）の調査報告書を参考に、あくまでも台部を有するであろうと推測されるものを集めた。よって破片の台部もこの類に組み入れる事にした。形状をもとに以下の4類に細分した。

IVA類（図49-15、図53-69）

形状が小型壺・小型壺に類似するもので、高さが2cm程の直立に近い台を有するものである（図49-15）。口縁部は低い山形突起を有する。文様は、多条の横位沈線を口縁部と肩部に施文し、肩部沈線上には2個1対の粘土粒を貼付けしている。台部にも2条の横位沈線を施文している。低・肩部だけの破片であるが、同様の台部をもつものも出土している（図53-69）。

IVB類（図49-16）

長い直立する頸部をもち、肩下半部が大きく内湾する器形である。台部は欠損しているため形状は明らかではないが、底部の割れ口から台を有したことは明白である。口縁部は低い山形突起を有する。文様は、横位沈線の他に波状工字文を施文している。

IVC類（図54-71～75、77）

皿状ないしは浅鉢状の形状を為すと思われるものである。完形品が出土していないため、台付きになるかどうかは明言できないが、過去の垂柳遺跡の調査では、低くて直立する台部をもつ、類似した台付鉢が出土している。口縁部はいずれも平坦なものである。文様は、横位沈線と鋸歯状文が施文されている。

IVD類（図53-65、68、図54-76、78～83）

IVA～IVCのどこに属するかは明らかではないが、形状や文様帶から台を有する鉢と推定されるものを集めた。山形突起を有し寸ずまりの肩部をもつもの（図53-65、図54-70）や、波状工字文を施文しているもの（図53-68）、底部の破片であるが、割れ口から台部に連続すると思われるもの（図54-78）である。その他は台部の破片である。強く外反し、三角状の透かし彫りを有するもの（図54-79）や、やや外反し横位沈線を施文するもの（図54-80、81）、ほぼ垂直に立ち上がるもの（図54-82、83）に分かれる。いずれも台高が2～3cmと低いものである。

（V類）蓋形土器

蓋形土器は、完形品ではなく、破片が1片出土したにすぎない（図54-84）。形状についても倒皿状なのか円盤状なのか明らかではない。文様は、粘土紐、粘土粒の貼付け、多条の横位沈線が確認できるにすぎない。



$S = 1 : 3$

図45 遺構外出土土器（1）

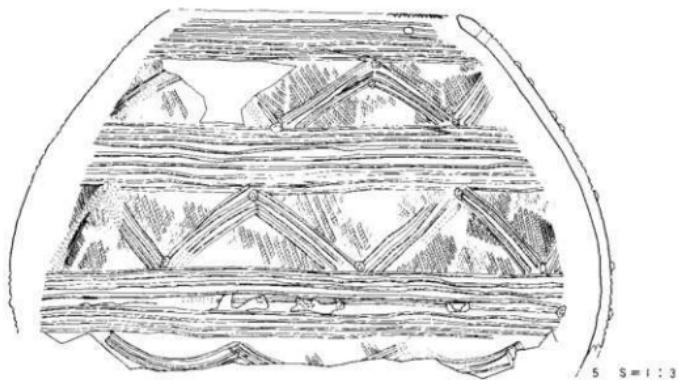
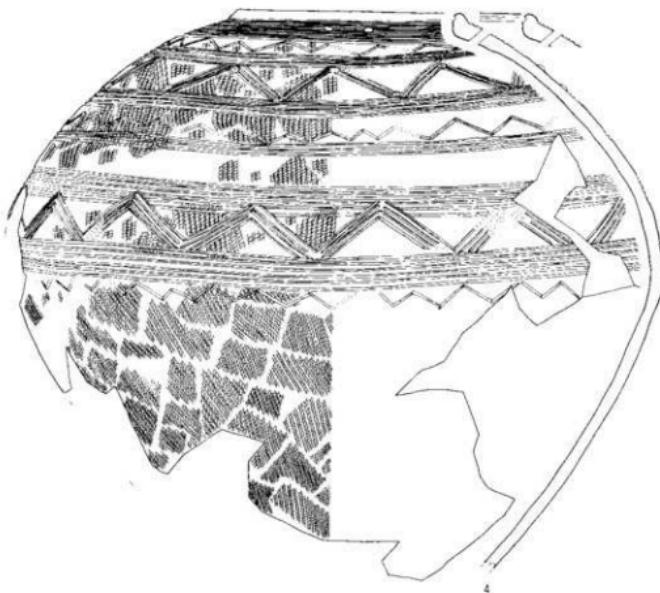
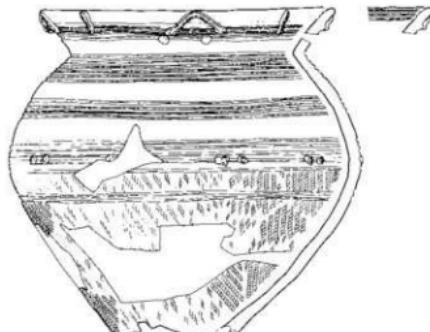


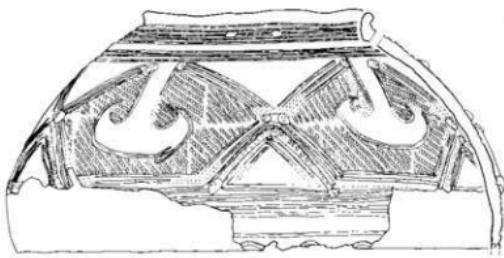
図46 遺構外出土土器（2）



6



7



8

$5 = 1 : 3$

圖47 遺構外出土土器（3）

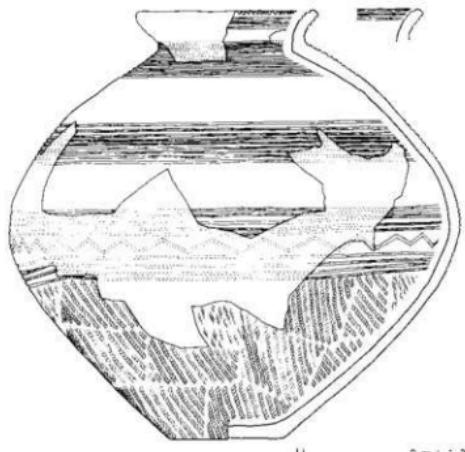
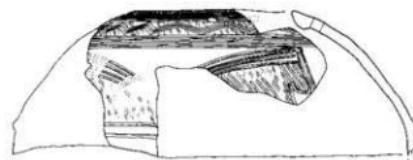
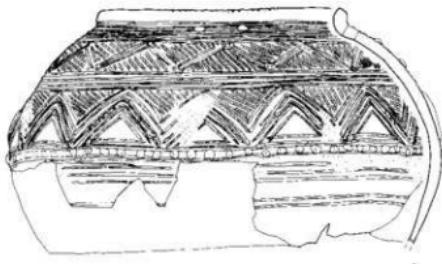


圖48 遺構外出土土器（4）

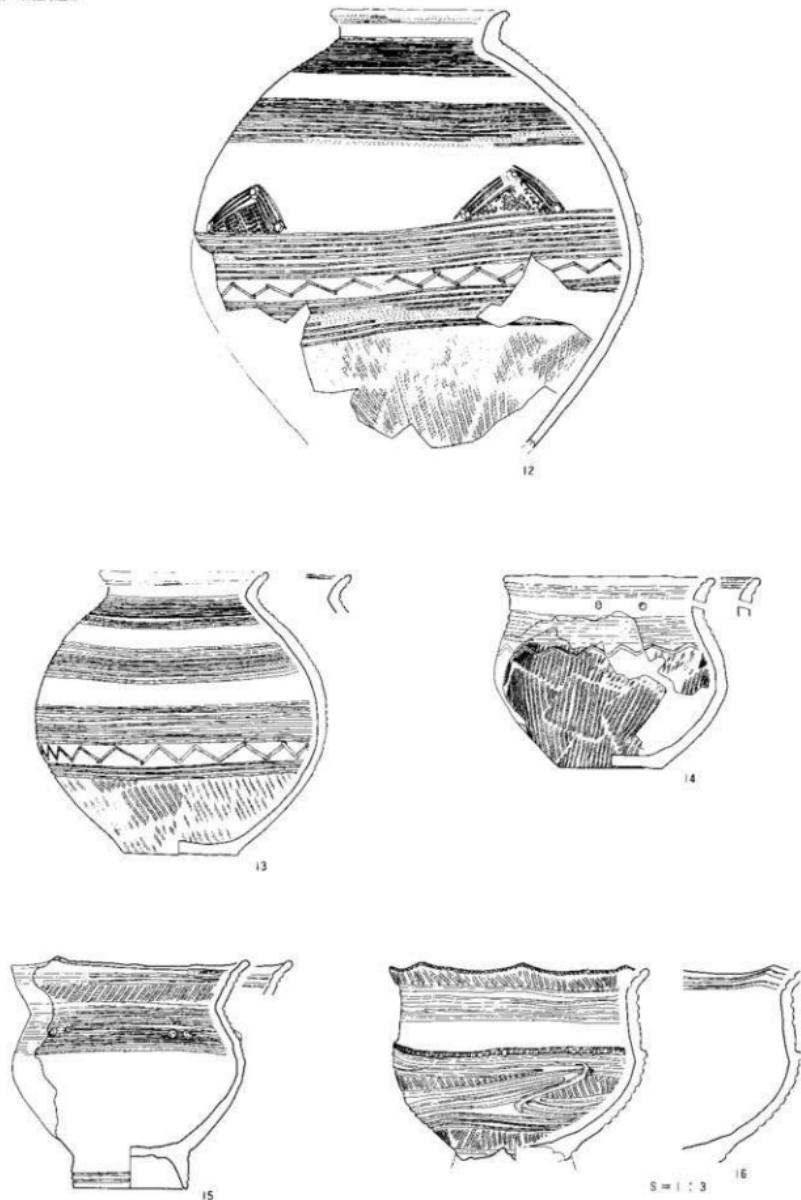


図49 遺構外出土土器（5）

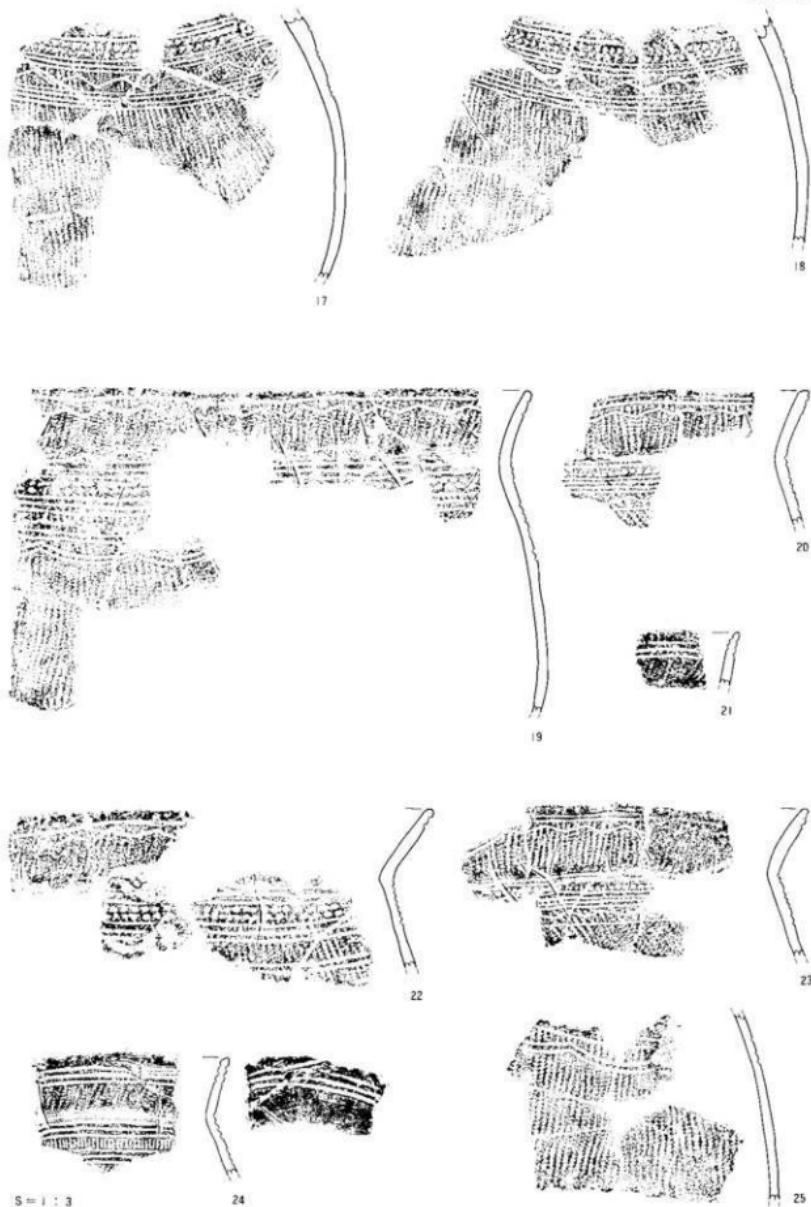


図50 遺構外出土土器（6）

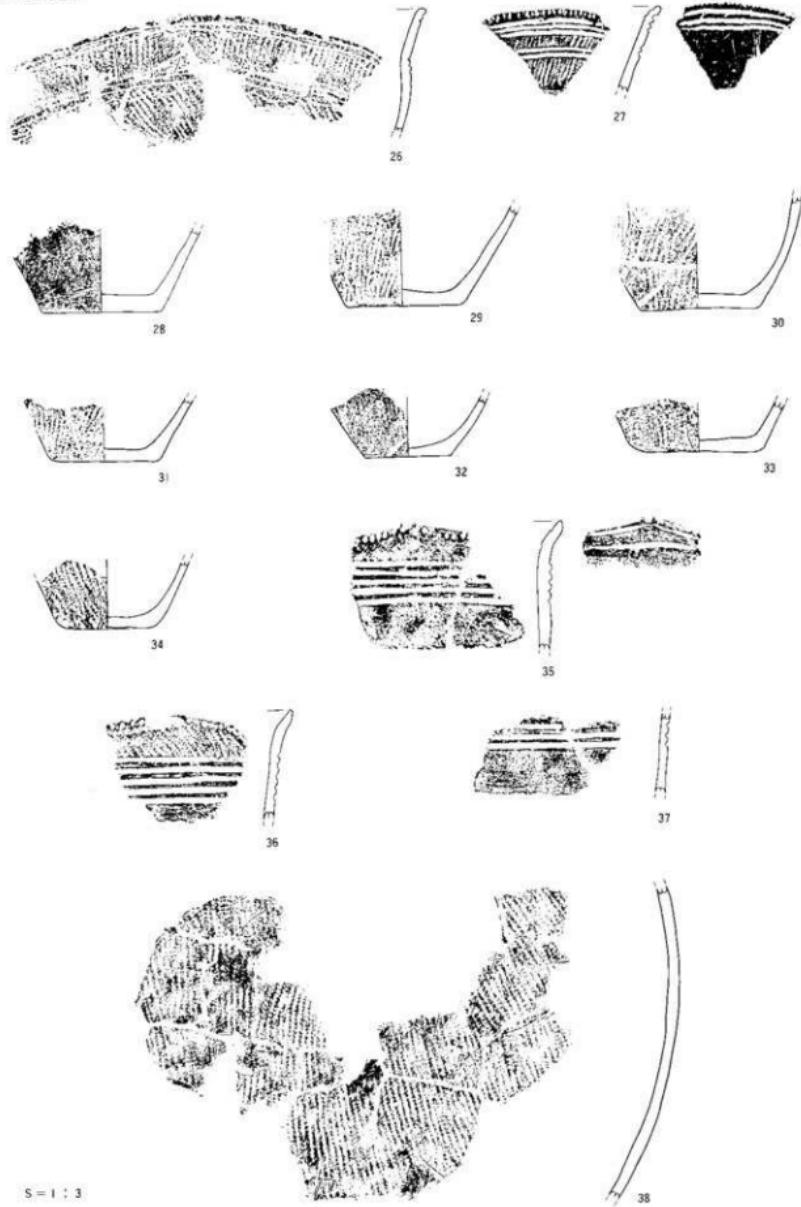


図51 造構外出土土器(7)

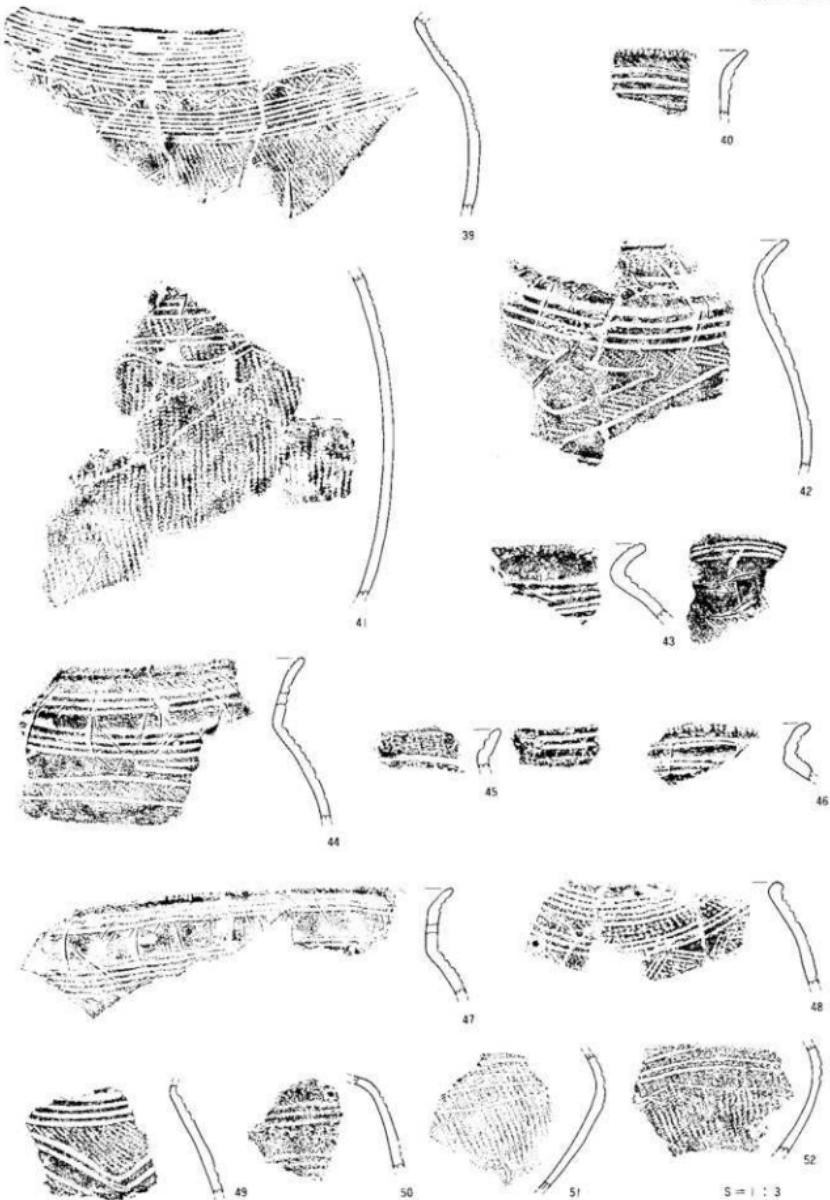


圖52 遺構外出土土器 (8)

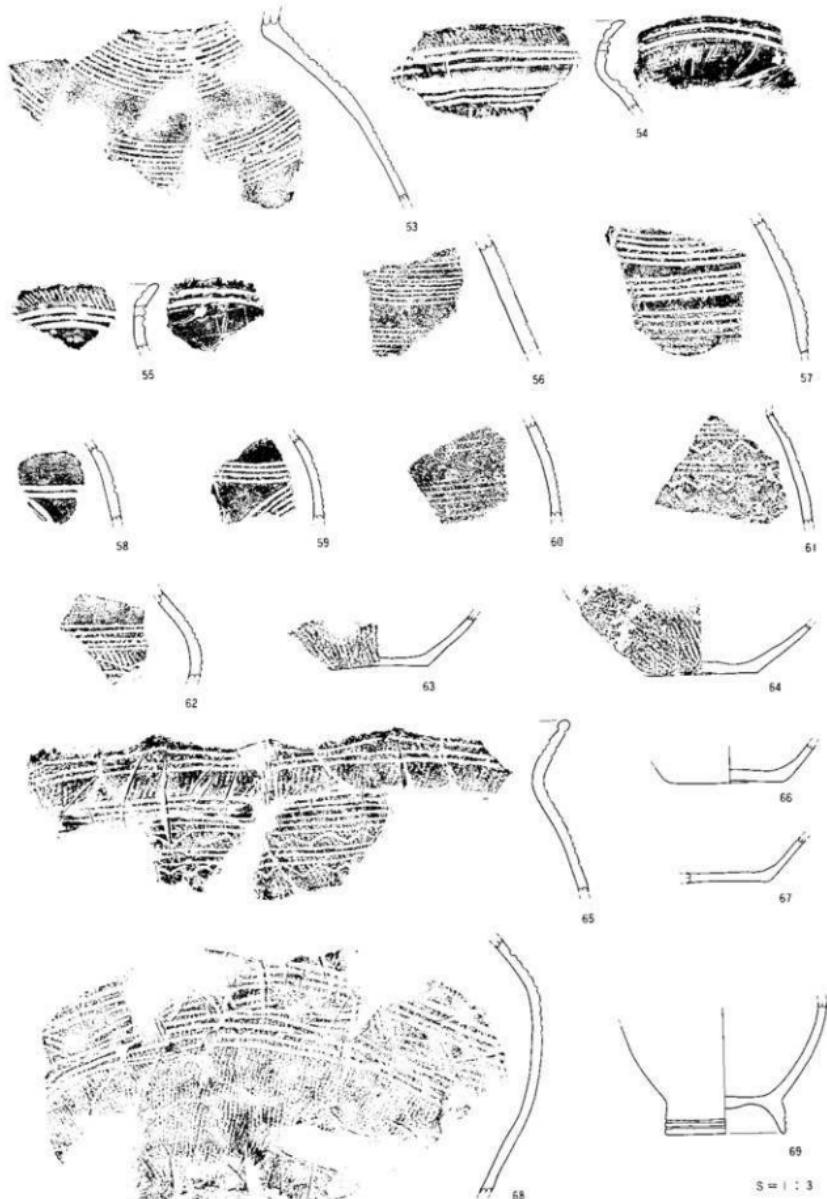


図53 遺構出土土器 (9)

S = 1 : 3

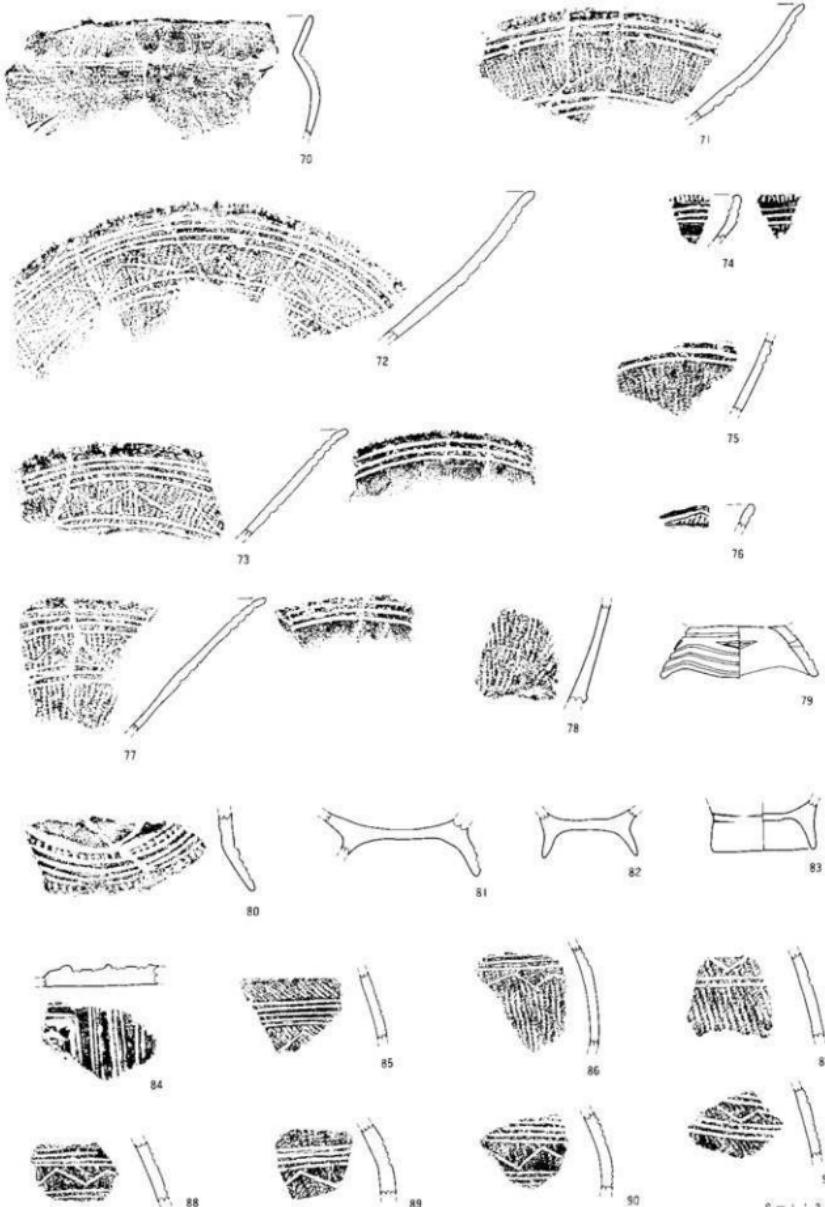


圖54 遺構外出土土器 (10)

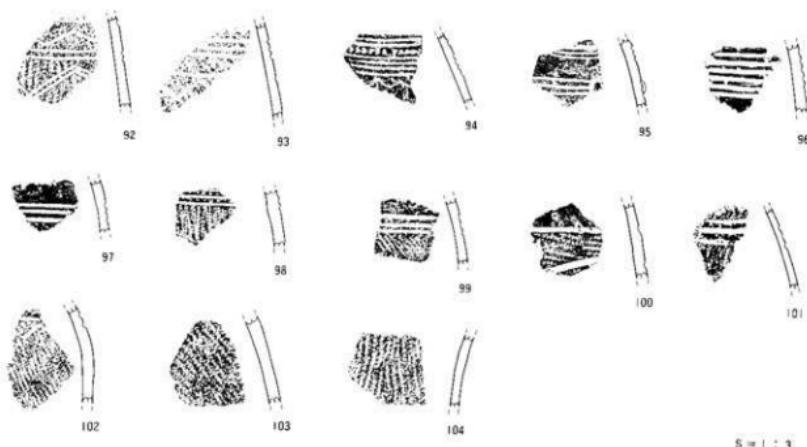


図55 遺構外出土土器 (1)

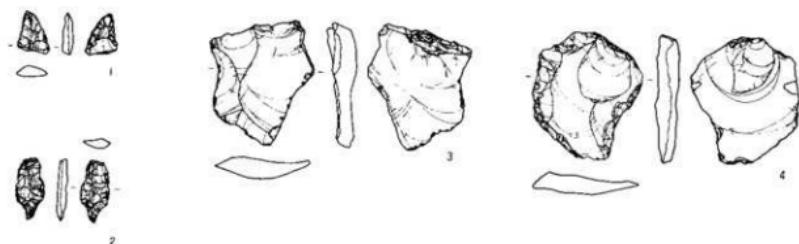


図56 遺構外出土石器

(VI類) その他(図54-85~91、図55-92~104)

同じ時期の土器片ではあるが、いずれも胸部の破片であるため、器種・器形が明らかでないものをVI類とした。文様は、横位沈線・鋸歯状文がほとんどで、希に列点文を施文するもの(図55-94)、連繫菱形文の一部と思われる斜め沈線を有するもの(図55-100)、地文のみのもの(図55-103、104)がみられる。

(新山 隆男)

第6節 繩文時代の遺物

縄文時代の遺物は全て後期のもので、第1号水路跡の底面のさらに下層から出土している。土器は以下の三類に大別し、必要に応じてさらに細分した。

今回の試掘調査ではVII層に縄文時代後期の包含層が存在することの確認に留ったが、同期の遺物は昭和57、58年度の発掘調査でも確認されている。縄文時代後期の遺物範囲もある程度の広がりがあることが予想される。また、包含層には植物遺体等も認められる。

(I類)

I類は、十腰内I式に比定される土器を集めた。器形は、深鉢(A類)、壺(B類)の2種類に分けられる。

IA類(図57-2)

深鉢は、磨消繩文で平行沈線と円状の沈線文を有する口縁部の破片が1点である。器形としては、口縁部はほとんど外反せず、頸部にややしまりのある緩やかなものと考えられる。

IB類(図57-1、図57-3~7)

壺は、ほぼ完形に近い、トックリ形のものが1個体(図57-1)、同一個体になるとと思われる破片が5点(図57-3~7)である。前者の器高が14cm、胴最大径が7cm、後者を復元してもそれほど大きくならない小型の壺であることが分かる。文様は、前者が磨消繩文による2条の曲沈線で渦巻状、牛の角状の文様帶を構成しているのに対し、後者は頸部に横位沈線が1条確認できるにすぎない。

(II類)

II類は、十腰内I式以降、II式に含まれる土器を集めた。器形は、深鉢(A類)、壺(B類)、鉢(C類)の3種類に分けられる。

IIA類

深鉢は破片数が1番多く、復元できるまでには至らなかったが、同一個体・同器種と判断できるものを1~4に細分した。

IIA1類(図57-8~20)

平坦な口縁でそれほど外反しない、頸部がややしまった器形。文様は、磨消繩文で平行沈線と大きな円状の沈線文が特徴であるもの(図57-9~12)。同じような器種で、文様が平行沈線しか確認できないもの(図57-8、13、14、16、17)。

II A 2 類 (図57-21~23、図58-24)

平坦な口縁でやや外反し、頸部から緩やかに流れる器形。文様は、磨消繩文で平行沈線、半円状の沈線文、さらにカニのハサミ状の沈線文が特徴であるもの(図57-21~23)。同じような器種ではあるが、全く無文のもの(図58-24)に分けられる。

II A 3 類 (図58-25~34)

平坦な口縁でやや外反し、頸部から緩やかに流れる器形。文様は、L-R繩文地に平行沈線、斜め沈線(曲沈線も見られる)で繩文を区画し、他は磨消するものがほとんどである。

II A 4 類 (図58-35~39、図59-40~46)

大波状口縁で大きく外反すると思われる器形。文様は、R-LまたはL-Rの繩文地に口縁に沿った沈線が施文され、沈線の外側には押し引きの刺突文が1列に施文、さらには長円形状の沈線文が施文され、円形内は磨消されている特徴をもつもの(図58-36~39)。同じような器形で、口唇から頸部までを横位沈線で区画し、区画内を刺突文で充填しているもの(図59-40、41)。さらには、平坦な口縁でそれほど外反せず、小円形の竹管状工具で刺突した文様をもつもので、それが外面に施文されているもの(図59-43、44)と内面に施文されているもの(図59-45、46)に分けられる。

II B 類

壺の破片数は7個と少ないが、器種・文様から判断して2つに細分した。

II B 1 類 (図59-47~50)

小型で球形に近いと考えられる器形のものである。文様は、L-R繩文地に2条の沈線で円形や長方形を構成し、周りを磨り消したと思われる。

II B 2 類 (図59-51~53)

胴部下半が欠損しているため明らかではないが、1つめのものよりは丸みを感じさせない器形のものである。文様は、L-R繩文地にカニのハサミ状のものと種子を縦にしたような文様を沈線で構成し、内部を磨り消している。また、黒漆の付着も確認できる。

II C 類 (図59-54~61)

鉢は、底部を欠損しているが、ほぼ完形に近いもの(図59-54)、平行沈線やS字状の曲沈線文を構成しているもの(図59-55、56)、地文のみのもの(図59-57、58)、地文に横位沈線1条を施文しているもの(図59-59~61)に分けられる。器形としてはいずれも54に近いものになると考えられる。54は現存器高が6cm、口径が12cm、底部に向かって急激にすぼむ。底部の割れ口がやや外反するため、壺の口縁部であるということも考えられる。

(III類)

III類は、時期的には第I・II類に含まれると考えられるが、破片が小さかったり、文様帶がはっきりしないため、器種・器形が断定できないものを集めた。その中でも、文様を有するもの(A類)、繩文を有するもの(B類)、無文のもの(C類)、不明なもの(D類)の4つに細分した。

III A 類 (図60-62~67)

わずかながらに文様を有するもので、文様は横位沈線、平行沈線がほとんどだが、波状の沈線を有するもの(図60-64、65、67)、底面に網代痕を有するもの(図60-66)がみられる。

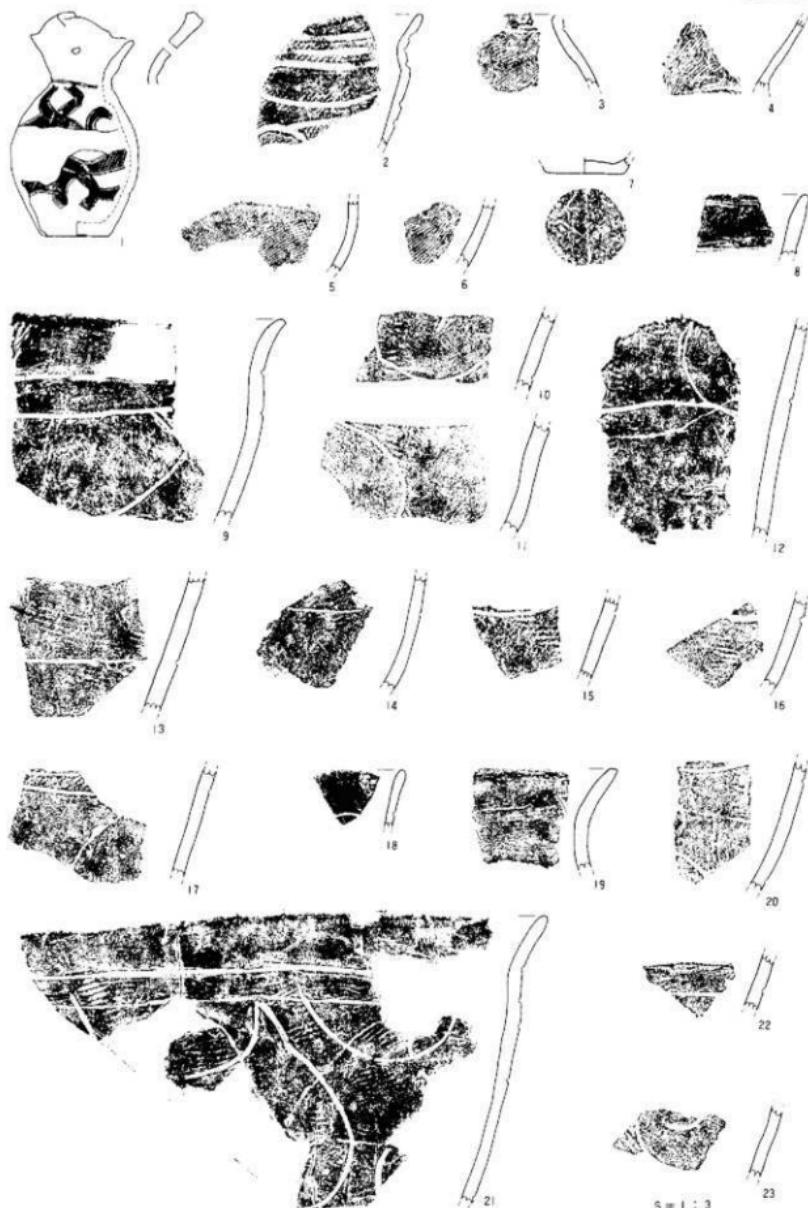


図57 第1号水路跡下層出土繩文土器（1）

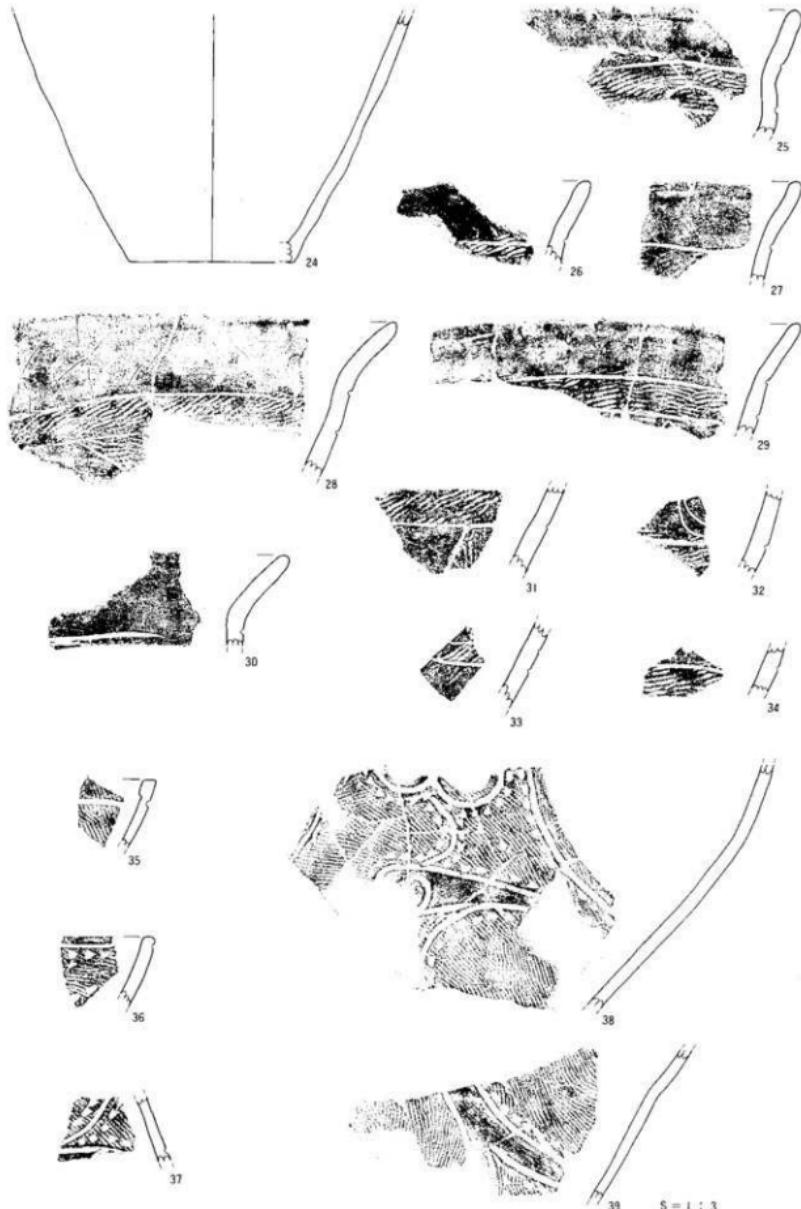


图58 第1号水路下层出土绳文土器 (2)

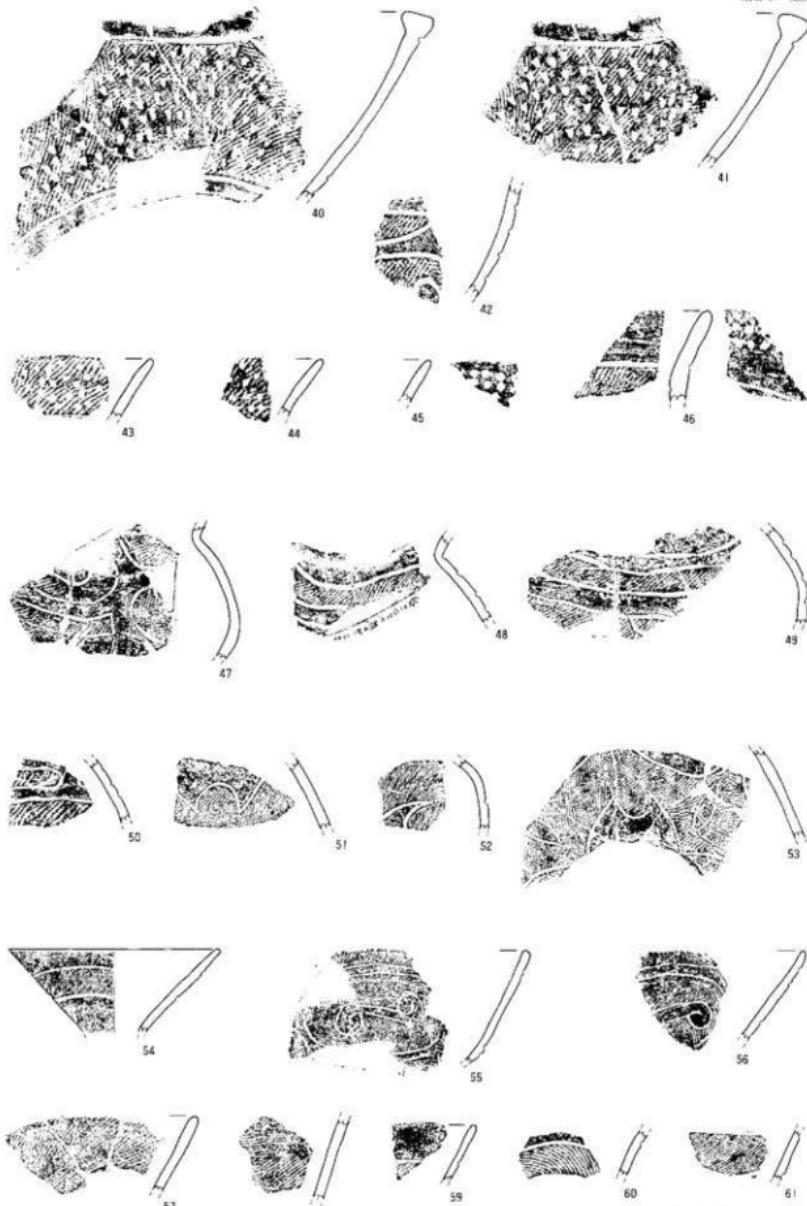


図59 第1号水路跡下層出土縄文土器（3）

$S = 1 : 3$

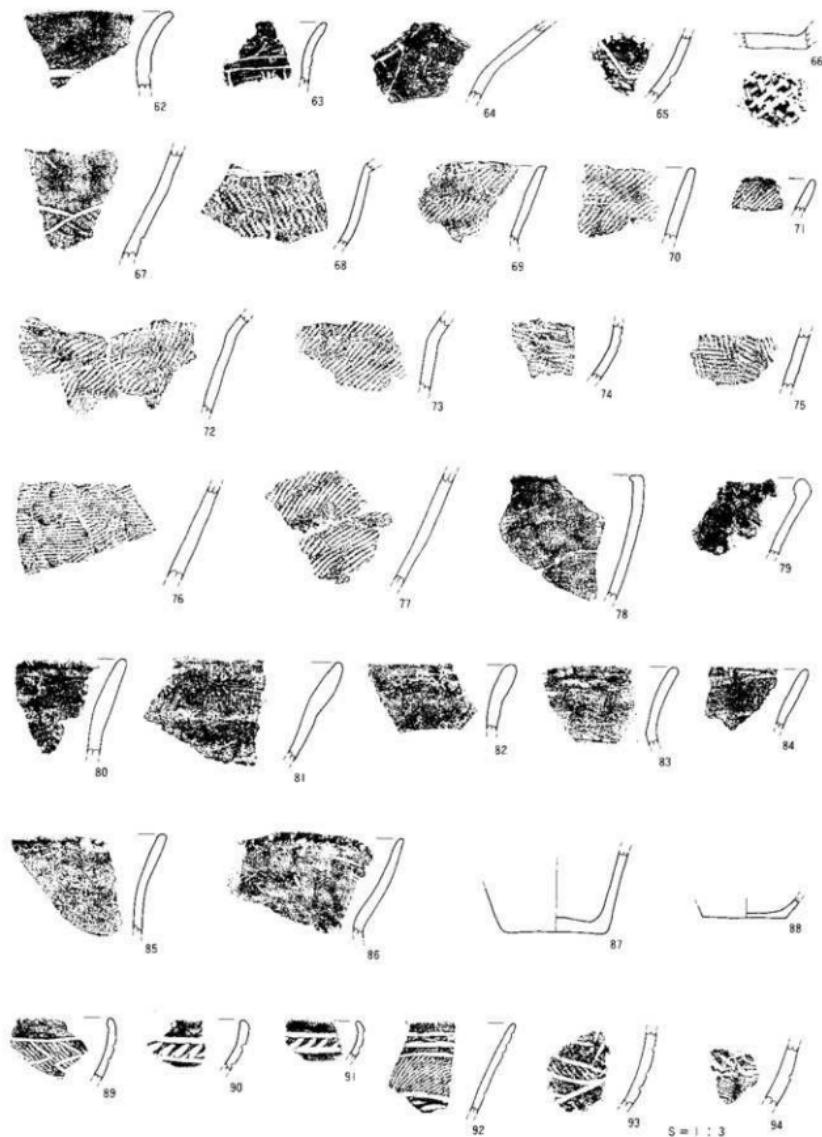


図60 第1号水路跡下層出土縄文土器(4)

III B類 (図60-68~77)

縄文のみを有するもので、口縁部と思われる破片が3点である。あとは胴部の破片であると思われる。地文は、単節のL-R、R-L縄文を斜位または横位に施文している。

III C類 (図60-78~88)

ほとんどの破片が初めから無文であると思われるが、磨消縄文のものが含まれているのかは定かではない。また、破片のほとんどが口縁部であるが、平坦な口縁であるものが大多数で、突起を有するものは1点のみである(図60-79)。また、口唇に縄文を施文しているのが1点みられる(図60-84)。

III D類 (図60-89~94)

時期、器種共に不明なものを集めた。胎土や焼成、出土地点から見て縄文後期に分類はしたもの、その器種や文様は他に類例を見いだす事が出来ず不明とした。90と94は同一個体と思われる。

石器

明確な石器は出土していないが、縦長剥片に使用痕状の刃こぼれが看取されるものが2点出土している。ともに珪質頁岩製である。

(新山 隆男)

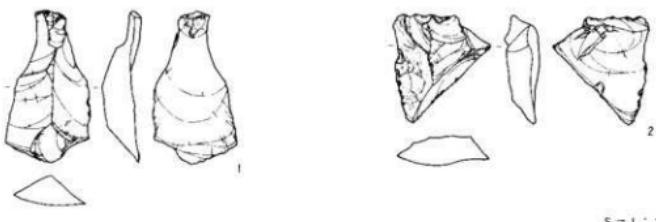


図61 第1号水路跡下層出土石器

表1 第1号水路跡出土土器

査定番号	グリッド	器形	口縁部	肩部	腹部	底部・台座	色調	備考	その他
14	1 Q - 27	台付鉢	9個の山形突起。安芯頂部には2個削きの後に3条の横位の切欠き。内面は凸状。口縁部外側、内面はなでの後1条の横位の切欠き。	3条1脚とした変形欠損工字文を施文。工字文の断面にR-し鋼文を施す。	欠損	焼灰7.5% / 機械仕上げ	器高 (3.1) cm 20.3 cm	器高 21.5 cm 厚径 16.9 cm	的な施土、焼成良好
2	Q - 26	壺	半坦口縁。口縁部外側は磨きの後に1条の横位が残る。	肩部に連なる横位2条の横位を1単位とし、上位は横位に1単位と付加第1脚2本を施文。中位は書文を2(r)。腹文。それは外の部分は陥れ。	底面焼き	焼灰10% / 1	南嶺山式 坑一 的な施土、焼成良好	器高 16.9 cm	その他の 部分は削り
3	R - 27	高杯	平坦口縁、無文、内外面磨きの後縁。縁あり。	同様・肩部	底面文、磨きの後縁 後6条の端部は鋸歯状、下端に粗目を施し後縁 り、内面磨き。	赤(赤褐色)10% 4/8	台面内面焼け 着、地の部分の色 調は削り	10.2 cm 口径 16.5 cm	粗目を施し後縁

表2 第1号水路跡出土木製品

査定番号	名 称	出土遺跡	地区	層位	長:cm	幅:cm	厚:cm	現存	木札り	加工	備考
20	1 槍	1号水路跡	6層	22.20	12.05	4.45	完形	ミカン札り	丸の先端形を施す。裏面に加工痕あり。片側端に切出しがある。	未製品	
21	2 分解柄頭	1号水路跡	6層	45.95	3.25	3.10	完形	丸木	丸の先端形を施す。下端は切欠。	未製品	
21	3 分解:台部	1号水路跡	6層	23.00	4.30	5.75	完形	丸木	丸の工具痕あり。 幅: 0-1.1cmの工具痕あり。	未製品	
22	3 手綱	1号水路跡	6層	68.10	1.10	1.10	完形	丸木	丸の先端形を施す。		
22	4 手綱: 刃地区	1号水路跡	6層	36.60	2.70	2.60	極度欠損	丸木	丸の先端形を施す。		
23	5 棒棒(木製品)	1号水路跡	6層	38.80	6.00	1.00	缺片	丸木	片面に黒墨書きとも工具痕を有す。		
24	6 棒棒(木製品)	1号水路跡	6層	23.30	10.90	0.90	缺片	丸木	片面に黒墨書きとも工具痕を有す。		
25	7 桁	1号水路跡	6層	96.70	6.90	5.10	中央欠損	丸木	片面に黒墨書きとも工具痕を有す。		
25	8 桁	1号水路跡	6層	74.50	5.70	7.00	上折損	丸木	下端部2.5cmの切欠痕あり。		
26	9 桁	1号水路跡	6層	23.80	11.60	5.10	完形	丸木	下端部6cmの切欠痕あり。全体の3/4が炭化す。		
26	10 桁	1号水路跡	6層	26.60	5.20	4.50	上折損	丸木	下端部2.5cmの切欠痕あり。中央に幅2.5cmの切欠痕あり。		
27	11 棒枝木製品	1号水路跡 A地区	6層	45.80	3.40	3.40	完形	丸木	下端部2.5cmの切欠痕あり。		
27	12 棒枝木製品	1号水路跡 八地区	6層	42.30	4.10	3.45	完形	丸木	下端部3cmの切欠痕あり。上端部斜めに切欠。断面は方形となる。		
27	13 棒枝木製品	1号水路跡	6層	40.30	11.60	5.10	上折損	丸木	下端部3cmの切欠痕あり。側面に直角加工。		
28	14 棒枝木製品	1号水路跡 B地区	6層	27.60	7.20	2.00	上下折損	板目	左側面: 丸の先端形を施す。裏面加工痕あり。		
28	15 棒枝木製品	1号水路跡 A・B地区	6層	18.10	5.60	2.40	下折損	板目	下端部3cmの切欠痕あり。表面の加工痕あり。裏面の整形加工痕あり。		
28	16 棒枝木製品	1号水路跡 A・B地区	6層	14.50	4.10	2.40	上折損	板目	下端部3cmの切欠痕あり。表面の加工痕あり。		
28	17 棒枝木製品	1号水路跡 D地区	6層	14.60	5.30	2.20	完形	板目	表面とも加工痕あり。		
28	18 板枝木製品	1号水路跡	6層	11.80	5.20	0.90	上折損	板目	表面とも加工痕あり。		

表3 第1号水路跡出土土器

件名	番号	分類	器形	部位	文様	胎土	色調	焼成	地区	層位	備考
15	4 I A	壺	口縁部	平底口縁、口唇割目、3条の横位沈線、内面1条の横位沈線、		にぶい黄褐色	7/3	A	C	6層	内面磨き
	5 I B	壺	肩部	1条の横位沈線、網目状文、R-L縦文	s s	にぶい黄褐色	7/3	E	B層	内面割落	
	6 I B	壺	肩部	2条の横位沈線、網目状文、R-L縦文	針	黒褐7.5YR2/2		A	A	6層	内面割落、磨き
	7 I B	壺	底部	R-L縦文、底面無文		黒褐7.5YR2/2		A	AB	6層	内面磨き
	8 III B 2	壺	口縁部	平坦口縁、2条の横位沈線（磨耗）、内面2条の沈線（磨耗）		赤褐5YR4/6			AB	6層	風化激しい
	9 III B 1	壺	頸部	口縁1条、頸部2条の横位沈線、R-L縦文		黒褐7.5YR2/2		A	AB	6層	内面なで
	10 III B	壺	肩部	上下2条の横位沈線間に網目状文		黒褐7.5YR2/2		A	A	6層	内面磨き
	11 III B	壺	肩部	6条、1条の横位沈線の間に列点文		黒褐7.5YR2/2		A	E	6層	内面磨き
	12 III B	壺	肩部	5条の横位沈線	針	黒褐7.5YR2/2		A	AB	6層	内面なで
	13 III B	壺	肩部	上下2条の横位沈線間に2列の列点文、その下に1条の横位沈線、網目状文		黒褐7.5YR2/2		A	D	6層	内面磨き
	14 N C	台付鉢	口縁部	平坦口縁、口唇割目、5条の横位沈線、内面4条の横位沈線、網目状文	針	黒褐7.5YR2/2		A	AB	6層	内面磨き？
	15 N D	台付鉢か 高杯	口縁部	山形突起、突起に沿って2条、ウラは1条の沈線、ウラはその下にさきに2条の横位沈線		黒褐7.5YR2/2		A	AB	6層	内面磨き
	16 N D	台付鉢	肩部	4条の横位沈線、R-L縦文		黒褐7.5YR2/2		A	D	6層	内面なで、酸化鉄付着
	17 N D	台付鉢	肩部	9条の横位沈線、変形工字文		黒褐7.5YR2/2		A	A	6層	内面磨き
	18 N D	台付鉢	肩部	2条の横位沈線、R-L縦文	針	暗褐7.5YR3/3		A	AB	6層	内面磨き
	19 N D	台付鉢	肩部	3条の横位沈線		暗褐7.5YR3/3		A	AB	6層	内面なで
	20 N D	台付鉢	口縁部	平坦口縁、変形工字文、粘土粒貼付		赤褐5YR4/6		A	AB	6層	内面磨き
	21 N D	台付鉢	肩部	6条の横位沈線、変形工字文？		黒褐7.5YR2/2		A	AB	6層	内面なで？
	22 N D	台付鉢	肩部	4条の横位沈線、他は磨耗	針	暗褐7.5YR3/3		A	AB	6層	風化激しい
	23 N D	台付鉢	口縁部	変形工字文、粘土粒貼付け		にぶい黄褐色	7/3			6層	風化激しい
	24 N D	台付鉢	台部	3条の横位沈線、台下端に割目		灰白10YR7/1		A	D	6層	内面磨き
	25 N D	台付鉢	台部	2条の横位沈線		赤褐5YR4/6				6層	風化激しい
	26 N D	台付鉢	底一部	1条の横位沈線		赤褐5YR4/6		A	E	6層	内面磨き、酸化鉄付着
	27 N D	台付鉢	底一部台	底部横位沈線、台部3条の横位沈線	s s	にぶい橙5YR6/4		A	6層	内面なで、酸化鉄付着	
	28 V	鉢？	肩部	R-L縦文（斜位）		暗褐7.5YR3/3		A	AB	6層	内面なで
	29 V	鉢？	底部	R-L縦文（横位）		黒褐7.5YR2/2		A	AB	6層	内面磨き
	30 V	甕か壺	肩部	R-L縦文		暗褐7.5YR3/3		A	AB	6層	内面磨き
	31 V	甕か壺	肩部	R-L縦文（横位）		暗褐7.5YR3/3		A	AB	6層	内面磨き
	32 V	甕か壺	肩部	R-L縦文（横位）	針	暗褐7.5YR3/3		A	AB	6層	内面磨き、黒色有機物付着
	33 V	甕か壺	肩部	L-R縦文		赤褐5YR4/6		E	6層	内面磨き	
	34 V	甕か壺	肩部	R-L縦文（横位）		暗褐7.5YR3/3		A	AB	6層	内面磨き
	35 V	甕か壺	肩部	R-L縦文	s s	赤褐5YR4/6		D	6層	内面割落	
	36 V	甕か壺	肩部	R-L縦文（横位）		暗褐7.5YR3/3		A	E	6層	内面磨き、酸化鉄付着

表4 第1号大甕出土土器

所因	番号	分類	器形	部位	文様	胎土	色調	グリッド	層位	備考
37	1	I B	甕	口縁部	平底口縁、口唇割目、3条の横位沈線、R-L繩文、内面3条の横位沈線	s.s	暗褐色7.5YB3/3	R-24	M層上面	内面剥落
	2	I B	甕	口縁部	平底口縁、上位2条の横位沈線、下位1条の横位沈線、間はR-L繩文(斜位)	針	暗褐色7.5YB6/6	T-25	M層上面	風化激しい
	3	I B	甕	口縁部	平底口縁、1条の横位沈線、内面3条の横位沈線	針	暗褐色7.5YB3/3	Q-24		風化激しい
	4	I B	甕	口縁部?	2条の横位沈線	s.s	赤褐色SYB4/6	R-24	M層上面	内面剥落
	5	I B	甕	肩部	4条の横位沈線、1条の網座唐文	s.s	赤褐色SYB4/6	Q-23		風化激しい
	6	I B	甕	肩部	2条、3条の横位沈線間に2列の列点文	s.s	暗褐色7.5YB3/3	R-23		風化激しい
	7	I D	甕	肩部	2条、2条の沈線間に刻文?	赤褐色SYB4/6	R-23			内面剥落
	8	II B 4	甕	肩部	1条の網座唐文之下に1条の横位沈線、R-L繩文	針	赤褐色SYB4/6	R-24	M層上面	内面剥落
	9	II B 4	甕	肩部	連續菱形文?	s.s	にぶい黄褐色10YR7/3	R-23		内面剥落
	10	IV A	台付鉢	口縁部	山形突起に沿って内外面1条の沈線、その下に内外面2条の横位沈線、外はその下1条の沈線	針	赤褐色SYB4/6	R-24	M層上面	風化激しい
	11	IV A	台付鉢	口縁部	山形突起に沿って内外面1条の沈線、その下に内外面2条の横位沈線、外はその下1条の横位沈線	針	暗褐色7.5YB3/3	R-24		風化激しい
	12	IV A	台付鉢	口縁部	波状口縁、3条の沈線下に1条の横位沈線、内面2条の沈線	針	暗褐色7.5YB3/3	R-24	M層上面	風化激しい
	13	IV A	台付鉢	口縁部	2条、1条の横位沈線間にR-L繩文充填、内面3条の横位沈線	針	赤褐色SYB4/6	R-24		風化激しい
	14	IV A	台付鉢	肩~肩部	8~9条の横位沈線、中位に粘土粒の貼付、変形工字文	針	赤褐色SYB4/6	R-24	M層上面	風化激しい
	15	IV A	台付鉢	肩部	2条、3条、2条、2条の横位沈線、その他は磨耗	針	赤褐色SYB4/6	R-24	M層上面	風化激しい
	16	IV A	台付鉢	肩部	3条の横位沈線中に粘土粒貼付、変形工字文、その下2条の横位沈線	針	赤褐色SYB4/6	R-24	M層上面	風化激しい
	17	IV A	台付鉢	肩部	2条の横位沈線、列点文、2個1対の粘土粒、変形工字文	針	暗褐色7.5YB3/3	R-24	M層上面	風化激しい
	18	IV A	台付鉢	肩部	3条の横位沈線	針	赤褐色SYB4/6	R-24		風化激しい
	19	IV A	台付鉢	肩部	7条の横位沈線	針	暗褐色7.5YB3/3	R-24	M層上面	風化激しい
	20	IV A	台付鉢	肩部	2条、2条の横位沈線間に2列の列点文?充填	針	赤褐色SYB4/6	R-24		風化激しい
	21	IV D	鉢(台付?)	口縁~難部	平底口縁、上位から1条、3条、1条の横位沈線	s.s	赤褐色SYB4/6	R-25	M層上面	風化激しい
	22	IV D	鉢(台付?)	口縁~難部	平底口縁、上位から1条、3条、1条の横位沈線	s.s	暗褐色7.5YB3/3	R-25	M層上面	風化激しい
	23	V	甕か壺	肩部	R-L繩文?	s.s	赤褐色SYB4/6	R-24	M層上面	内面剥落
	24	V	甕か壺	肩部	R-L繩文	s.s	赤褐色SYB4/6	R-24	M層上面	風化激しい
	25	V	甕か壺	肩部	R-L繩文?	s.s	暗褐色SYB6/6	Q-24		風化、内面なで

表5 通算出土土器(1)

地図番号	グリッド	地形	口縁部	側面	底面	腹部	底部・台部	色調	漏水	その他
45	1 Q - 1 7 壁	平坦口縁、口唇部にし、其唇文。他 は横なで彫刻。内面は横位の寄せ。	刃状文を2段に横位 の解き。	し - R - 番文を複数位に施文。内部は横 位の解き。	欠損	欠損	内面に赤い痕 れ(01R7/3外) 底面: 57R6/8	は良好	は良好	器高 <21.3 cm 脚付
2 Q - 1 7 壁	1 A	平坦口縁で無文。内面には2条の横 位沈線。上位にはR - L - 番文地(横 位)に2条の横位沈線。内面横位の 寄せ。	底部を含め4条の横位沈線。R - L - R - L - 番文(唇部)と 側面(唇部)に、新舊状文施文。 内面寄せ。	欠損	内面に赤い痕 れ(01R7/3外) 底面: 57R6/8	好	内面に赤い痕 れ(01R7/3外) 底面: 57R6/8	好	内面に赤い痕 れ(01R7/3外) 底面: 57R6/8	器高 <18.0 cm 脚付
3 Q - 1 8 長頸壺	II	平坦口縁、半円口縁、底は楕円が少し下明 け。内面は横位の寄せ。	上位に5条の横位沈 線、せ線を利用し工 程、せ線を利用。調整 線は割落が激しく不 規則。	5条の横位沈 線。調整線は不明。	欠損	欠損	内面外面7. 5cmS/1	内面外面7. 5cmS/1	内面外面7. 5cmS/1	器高 <27.6 cm 脚付
46	4 Q - 1 7 壁	平坦口縁で横文。内面は寄せの後に 1条の横位沈線。	底部に過校する横位 沈線。	上位から1. 条、4条、5条、 6条、6条の横位沈線。各沈線間 は1条、3条、1条、とんで4条各 単位の断面状で、3条1単位の断面 状文面には必ず横位施付け。地文は R - L - 番文(唇部)。内面はな く。	R - L - 番文を施文後 欠損 上位に断面状況。内 面は1条、3条、1条、とんで4条各 単位の断面状で、3条1単位の断面 状文面には必ず横位施付け。地文は R - L - 番文(唇部)。内面はな く。	欠損	内面に赤い痕 れ(01R6/4	内面に赤い痕 れ(01R6/4	内面に赤い痕 れ(01R6/4	器高 <34.0 cm 脚付
5 T - 1 7 壁	III A	欠損。	欠損。	底部に過校する横位 沈線。	欠損	欠損	内面外面に2個1対の穿 孔。57R6/4	内面外面に2個1対の穿 孔。57R6/4	内面外面に2個1対の穿 孔。57R6/4	器高 <21.0 cm 脚付
47	6 T - 1 7 壁	平坦口縁。口唇部底下から口縁上位 にかけて2本の横位施付け筋帯。そ の下には3条の横位沈線。下位に5条の 横位沈線。その上に2個1対の粘土 粒付ける。その下に2個1対の粘土 粒付ける。内面は寄せの後 3条の横位沈線。	底部に過校する横位 沈線。	R - L - 番文地に2条欠損 の後上位に5条の横位沈線。 位に4条の横位沈線。下位に5条の 横位沈線。その上に2個1対の粘土 粒付ける。内面は寄せの後 3条の横位沈線。	欠損	欠損	内面に赤い痕 れ(01R6/4	内面に赤い痕 れ(01R6/4	内面に赤い痕 れ(01R6/4	器高 <19.9 cm 脚付
B1	7 T - 1 7 壁	平坦口縁で無文。内面は寄せの後3 科部に過校する横位沈線。	上位は、寄せの後1条の横位沈線 R - L - 番文を全面上にR - L - 番文。	上位は、寄せの後1条の横位沈線 R - L - 番文を全面上にR - L - 番文。	欠損	欠損	内面外面7.5cm S/1	内面外面7.5cm S/1	内面外面7.5cm S/1	器高 <21.4 cm 脚付

表 5 造構外出土土器 (2)

種別	系号	グリッド	器形	頭部	脣部	面部	背部	色調	彫刻	その他
口唇部	III B 1		条の横位社群。口唇部には斬きの後、皮膚。	中位は、R-L構造文で3条1横 位の垂直状文を施す。頂部には粘土にかけての横位社群。	施文後、脣部から上 位面はなでて、底面はなでて。	脣3/外側面 53/84/4	穿孔有り、均一的な施土 、物底は良好	22.9 cm 軸径 22.1 cm		
	III B 2		中位1、1条の横位社群。その間にR-L構造文で施す。内面は横位の焼き。	施文からならで頂部で「V」字形 には、垂直状文に沿った3角形空間 には、垂直状文を施す。内面は横位の 焼き。						
47	8 Q - 17 烧	いい、	平頭口輪で施文。口唇部は断面が焼け、断面に焼 きの後、断面に多く残る焼け跡。	焼位社群下に3条、欠損 は連続状文。X状文を1条1単位 の社群で構成し、2回、別の粘土粒の下、円状と思われる 焼付。XとXの間にには縦文を施し る焼痕。縦文は焼付 の所よりはR-L構造文を施す。頂 部には粘土粒焼付。下位は、斜面と 他欠損。	内面にいくつも 焼痕	53/16/4/外側面に 孔有り、粗砂粒を含む燒 53/85	孔有り、粗砂粒を含む燒 土、焼底は良好	14.2 cm 軸径 (29.8) cm		
48	9 T - 17 烧	き。	平頭口輪、口唇部に割れ。内面は焼 位は焼。	焼位社群下に4条、欠損 はR-L構造文で2条の横位社群。焼 2条1単位の垂直状文を施す。縦文 は、焼付の所よりは粘土粒焼付。下位 は、焼位の焼付焼痕を施す。施 付け焼痕を施す、焼痕焼痕上には 焼目、焼位焼痕上には垂直状文。三 角空間内は焼き。	内面にいくつも 焼痕	7.07R/3/外側 面にいくつも 焼痕	孔有り、均一的な施土、 焼底は良好	<14.3 cm 軸径 26.0 cm		
10	Q - 16 烧	III B 2	平頭口輪で口唇部割れ。内面は焼 位は焼。	焼位社群下に3条の横位社群。そのFR- L構造文後、4条の横位社群、2 条1単位の垂直状文、その下4条の 焼位社群と斜位の焼痕、交わる頂部 に粘土粒の焼付。頂部を焼付して焼 目焼痕。	内面にいくつも 焼痕	7.51R/6/4/外側 面にいくつも 焼痕	孔有り、均一的な施土 土	<8.7 cm 軸径 (24.1) cm		
11	R - 0 6 烧		口唇部はややかな部分しづれ存在して 外表面は焼けの跡。	焼きの後、上位に12条の横位社群 、5条の焼R-L構造文。内面にいくつも 焼痕。	内面にいくつも 焼痕					

表5 通津出土土器(3)

所蔵番号	グリッド	断形	口縁部	肩部	腹部	輪部	底部・台面	色調	過ぎ	その他
		いよいよ、平坦口縁・列孔ありと伴 皿B.3	内面は剥落。 口縁部は欠損。	下位に9条の輪位状繊維。内面 はなで。	同部に過脱する輪位 上位は11条、10条の輪位状繊。 下位には8条の輪位状繊。	R-l.輪文斜位に施 文後、上位に輪文状 輪を絞りとして3条1半の波状紋。 三角文を構成。頂部には粘土粒の點 付け、三角文内には光沢無効文。その 他の空間は丁寧な磨き。	R-l.輪文斜位と 底面はなで。	模様青褐10% 5/2	好	25.6 cm 解説 26.9 cm
49	12 T-07	串	口縁部は欠損。 に1条の輪位状繊。内面も磨きの後、 次第。	同部に過脱する輪位 上位は11条、10条の輪位状繊。 下位には8条の輪位状繊。下位の波 紋を絞りとして3条1半の波状紋。 7条の楕円状斜 三角文を構成。頂部には粘土粒の點 付け、三角文内には光沢無効文。その 他の空間は丁寧な磨き。	R-l.輪文斜位に施 文後、上位に輪文状 輪を絞りとして3条1半の波状紋。 7条の楕円状斜 三角文を構成。頂部には粘土粒の點 付け、三角文内には光沢無効文。その 他の空間は丁寧な磨き。	欠損	内外面輪孔地 5/3.2/4	均一的な粘土、焼成は良 品質。 (27.1) cm	好	<25.4 cm 解説
13 R-04	豊	欠損	肩部に過脱する輪位 状繊。	輪部を含む7条の輪位状繊。頂部を空 けて7条の輪位状繊。波状紋を空 内面剥落。	7条、3条の輪位状 繊を絞りして3条1半の波状紋。 波状の後、4条の輪位状繊を施文。 その下はR-l.輪文斜位に施された文。 内面剥落。	R-l.輪文 幾く不明。	内外面輪孔地 5/2.3/3	均一的な粘土上 16.9 cm 解説	16.9 cm 解説	
14 R-05	豊	平坦口縁で斜目耳が構文。口縁外側は 磨きの後2条の輪位状繊を施文。内 面も磨きの後2条の輪位状繊。	肩部に較く輪位状繊 2個1対の粘土粒點付。	輪位を含め9条の輪位状繊。中位に 輪位を含め9条の輪位状繊。2個1対の粘土粒 點付。	輪位を含め9条の輪位状繊。中位に 輪位を含め9条の輪位状繊。2個1対の粘土粒 點付。	外側は丁寧な 磨き、内面は 粗く、均一的な粘土、 焼成。	内外面に不い り、均一的な粘土、 焼成。	17.5 cm 解説 11.5 cm 解説 13.0 cm	17.5 cm 解説 11.5 cm 解説 13.0 cm	
15 Q-1.6	台付縁	山形突起を有するが、割れは不明。 口縁部。口縁外側にはR-l.輪文 施文山形突起に沿って1条の波状 、その下2条の輪位状繊。内面は山 形突起に沿って1条の波状、その下 1条の波状。	肩部に過脱する輪位 状繊。	頭部を含め9条の輪位状繊。内面も 剥落。	輪位を含め9条の輪位状繊。内面も剥落。	輪位を含め9条の輪位状繊。内面も剥落。	台面部剥落し いが2条の輪 位状繊剥落。	内面明赤場2. 5/2.5/6外面青 梅7.5TR2/3	台部は赤色強い。均一的な 粘土、焼成。	11.4 cm 解説 13.8 cm 台高 1.0cm
16 R-05	台付縁	6個の波状凹凸突起。口縁部。口 縁外側はR-l.輪文。内面は山形突起 に沿った形1条の波状。その下 1条の輪位状繊。	頭部の波状下端に剥落部分。その 辺から輪部にかけて欠損 波状工字文を施文。 波状工字文の間はR -1.輪文充第。	頭部の波状下端に剥落部分。その 辺から輪部にかけて欠損 波状工字文を施文。 波状工字文の間はR -1.輪文充第。	内面明赤場2. 5/2.5/6外面青 梅色7.5TR2/2	頭部の頭に剥落部分に 未満の2個1対の穴 均一的な粘土、焼成。	内面明赤場2. 5/2.5/6外面青 梅色7.5TR2/2	内面明赤場2. 5/2.5/6外面青 梅色7.5TR2/2	内面明赤場2. 5/2.5/6外面青 梅色7.5TR2/2	15.1 cm 解説

表5 遺構外出土土器(4)

神区	番号	分類	器形	部位	文様	胎土	色調	焼成	グリッド	層位	備考	
50	17	I A	甕	肩部	上から2条の横位沈線、2列の円点文、3条の縱位沈線、縱衛状文、4条の横位沈線、R-L繩文(斜位)	赤褐色SYB4/6		T-16	V層上面	内面剥落		
	18	I A	甕	肩部	上から2条の横位沈線、2列の円点文、3条の横位沈線、縱衛状文、4条の横位沈線、R-L繩文(斜位)	赤褐色SYB4/6		T-16	V層上面	内面剥落		
	19	I B	甕	口縁～頸部	平坦口縁、口縁部1条の横位沈線、縱衛状文、頸部下多条の横位沈線の他、2列の円点文、2条の縱衛状文、R-L繩文	暗褐色7.5YR3/3	A	T-08	V層上面	内面磨き		
	20	I B	甕	口縁～頸部	平坦口縁、口縁部1条の横位沈線、1条の縱衛状文、頸部下多条の横位沈線の他、1列の円点文、1条の縱衛状文、R-L繩文	針	暗褐色7.5YR3/3	Q-18	V層上面	内面磨き		
	21	I B	甕	口縁部	平坦口縁、3条の横位沈線、内面3条の横位沈線	S S	赤褐色SYB4/6	Q-18	V層上面	内面磨き		
	22	I B	甕	口縁～頸部	平坦口縁、口縁1条の横位沈線、1条の縱衛状文、頸部下、多条の横位沈線の他、2列の円点文、沈縫間はR-L繩文(直線)	橙SYR6/6		T-08	V層上面	内面磨き		
	23	I B	甕	口縁～頸部	平坦口縁、口縁2条の横位沈線、縱衛状文、頸部上から、2条の横位沈線、円点文、4条の横位沈線、縱衛状文、1条の横位沈線	橙SYR6/6		Q-18	V層上面	内面磨き、なで部分も有り		
	24	I B	甕	口縁部	平坦口縁、3条、2条の横位沈線、開刃目、R-L繩文	S S	暗褐色7.5YR3/3	Q-17	V層上面	内面磨き		
	25	I B	甕	肩部	1条の横位沈線、2条の縱衛状文、R-L繩文	暗褐色7.5YR3/3	A	T-08	V層上面	内面磨き		
51	26	I B	甕	口縁～頸部	平坦口縁、口唇割目、口縁2条の横位沈線、頸部上から3条の横位沈線、1条の縱衛状文、R-L繩文	S S	赤褐色SYB4/6	T-08	V層上面	内面剥落		
	27	I C	甕	口縁部	平坦口縁、口唇割目、3条、2条の横位沈線、R-L繩文、内面3条の横位沈線	針	暗褐色7.5YR3/3	A	T-12	V層上面	内面なで	
	28	I D	甕	底部	底面に沈線？1条	赤褐色SYB4/6	A	Q-18	V層上面	内面磨き、酸化鉄付着		
	29	I D	甕	底部	底面無文、繩文磨耗	S S	暗褐色7.5YR3/3	Q-16	V層上面	内面剥落		
	30	I D	甕	底部	底面無文、R-L繩文	にぶい橙SYR6/4		T-08	V層上面	内面なで		
	31	I D	甕	底部	底面無文	赤褐色SYR6/6		T-26	V層上面	内面なで		
	32	I D	甕	底部	底面無文、繩文磨耗	針	橙SYR6/6	T-19	V層上面	内面なで		
	33	I D	甕	底部	底面無文	S S	暗褐色7.5YR3/3	Q-18	V層上面	内面剥落		
	34	I D	甕	底部	底面無文、繩文磨耗	S S	赤褐色SYB4/6	T-08	V層上面	内面剥落		
	35	II A	甕(長頸)	口縁～頸部	山形突起、口唇割目、5条の横位沈線、内面2条の横位沈線	S S	灰褐色10YR6/2	T-20	M層	内面なで、酸化鉄付着		
	36	II A	甕(長頸)	口縁～頸部	山形突起、口唇割目、口縁部R-L繩文、頸部5条の横位沈線	S S	灰褐色10YR6/2	T-20	M層	内面なで、酸化鉄付着		
	37	II A	甕(長頸)	頸部	3条の横位沈線	S S	暗褐色7.5YR3/3	T-20	M層	内面なで		
	38	III A	甕	肩部	全体R-L繩文(斜位)	赤褐色SYB4/6		T-08	V層上面	内面磨き		
52	39	III A	甕	口縁～頸部	上位から1-1条の横位沈線、1条の縱衛状文、7条の横位沈線、他はR-L繩文	黒褐色7.5YR2/2		R-05	V層上面	内面なで		
	40	III B I	甕	口縁～頸部	平坦口縁、口唇割目、3条の横位沈線	赤褐色SYB4/6		R-06	V層上面	風化激しい		
	41	III A	甕	肩部	3条、2条の横位沈線、波状文、R-L繩文	暗褐色7.5YR3/3	A	T-08	V層上面	内面磨き		

表5 遺構外出土土器(5)

種図	番号	分類	器形	部位	文様	胎土	色調	焼成	グリッド	層位	備考
52	42	III B 1	壺	口縁～頸部	口縁1条、頸部4条の横位沈線、 通繋菱形文	s s	暗褐色7.5YR3/3	T-1 6	V層上面	風化、内面剥落	
	43	III B 2	壺	口縁～頸部	平坦口縁、口縁部内面に3条の横位沈線、頸部に5条の横位沈線	針	赤褐色7.5YR4/6	Q-1 8	V層上面	風化激しい、酸化鉄付着	
	44	III B 1	壺	口縁～頸部	平坦口縁、口唇割目、3条、内面 2条の横位沈線、頸部4条の横位 沈線、その下2条の横位沈線間に R-L繩文充填	針	赤褐色7.5YR4/6	R-0 6	V層層境	口縁沈線上に穿孔あり、風化、 内面磨き	
	45	III B 2	壺	口縁部	平坦口縁、1条、内面2条の横位 沈線	s s	赤褐色7.5YR4/6	T-1 6	V層上面	全体風化激しい	
	46	III B 2	壺	口縁～頸部	口唇割目、口縁内外面に2条の横位沈線、頸部は3条の横位沈線	s s	赤褐色7.5YR4/6	R-0 6	V層上面	全体風化激しい	
	47	III B 4	壺	口縁～頸部	口唇割目、内外面3条の横位沈線 、頸部5条の横位沈線	s s	暗褐色7.5YR3/3	T-1 2	V層上面	2対の穿孔あり、 内面剥落	
	48	III B 4	壺	頸部	6条、3条の横位沈線間に円状剥 文充填、3条1単位の斷面状文、 2条の横位沈線	針	褐色SYR6/6	Q-1 2	V層上面	内面なで	
	49	III B 4	壺	頸部	4条の横位沈線、通繋菱形文?	針	赤褐色7.5YR4/6	R-0 6	V層層境	内面剥落	
	50	III B 4	壺	頸部	上位3条、下位3条の横位沈線	針	暗褐色7.5YR3/3	T-1 9	V層	内面剥落	
	51	III B 4	壺	頸部	4条の横位沈線、R-L繩文	針	赤褐色7.5YR4/6	R-0 6	V層層境	内面なで	
	52	III B 4	壺	頸部	3条の横位沈線、1条の断面状文、 R-L繩文	針	褐色SYR6/6	R-0 6	V層層境	内面に未貫通の 穴3個	
53	53	III B 4	壺	頸部～胴部	1条の横位沈線、下位10条の 横位沈線	にぶい黄褐色10YR 7/3		T-0 7	V層底面	内面剥落	
	54	III C	壺	口縁～頸部	口縁3条の横位沈線、上位にR-L 繩文、内面2条の横位沈線、頸部3条の横位沈線	にぶい黄褐色10YR 7/3		T-2 0	V層	沈線上に穿孔あ り、内面磨き	
	55	III C	壺	口縁部	平坦口縁、3条の横位沈線、上位 はR-L繩文、内面は2条の横位 沈線	にぶい黄褐色10YR 7/3		Q-1 8	V層上面	沈線上に穿孔あ り、内面磨き	
	56	III D	壺	胴部	上位11条、下位5条の横位沈線	褐色SYR6/6		Q-1 8	V層上面	内面磨き	
	57	III D	壺	胴部	多条の横位沈線	s s	暗褐色7.5YR3/3	Q-1 8	V層上面	内面剥落	
	58	III D	壺	胴部	2条の横位沈線、通繋菱形文?	にぶい黄褐色10YR 7/3	A	Q-1 8	V層上面	内面なで	
	59	III D	壺	胴部	4条の横位沈線、通繋菱形文?	赤褐色7.5YR4/6		T-1 2	V層上面	内面なで	
	60	III D	壺	胴部	上位から4条の横位沈線、断面状 文、7条の横位沈線	s s	赤褐色7.5YR4/6	Q-1 7	V層上面	風化激しい	
	61	III D	壺	胴部	断面状文2列の間にそれそれ3条	褐色SYR6/6		R-0 6	V層	内面磨き	
	62	III D	壺	胴部	5条の横位沈線、断面状文、下位 1条の横位沈線	褐色SYR6/6	A	R-0 6	V層層境	内面磨き、酸化 鉄付着	
	63	III D	壺	底部	R-L繩文、底面無文	針	褐色SYR6/6	R-0 5	V層層境	内面剥落	
	64	III D	壺	底部	R-L繩文、底面無文	s s	褐色SYR6/6	T-1 2	V層上面	内面剥落	
	65	N A	台付鉢	口縁～頸部	山形突起、山形に沿って内外面1 条の沈線、下位内外面横位沈線、 頸部下、多条の横位沈線の他、1 条の断面状文	s s	赤褐色7.5YR4/6	A	T-2 6	V層上面	内面磨き
	66	III D	壺	底部	底面無文	針	暗褐色7.5YR3/3	Q-1 7	V層上面	内面なで	
	67	III D	壺	底部	無文	針	にぶい黄褐色10YR 7/3	T-1 7	V層上面	内面なで	
	68	N A	台付鉢	胴部	4条の横位沈線、波状工字文? R-L 繩文	にぶい褐色SYR6/4		T-1 2	V層上面	内面なで	
	69	N A	台付鉢	台～底部	台脚横位沈線あり	針	明赤褐色2.5YR5/6		V層上面	風化、内面磨き	
54	70	N B	台付鉢	口縁～頸部 高环	山形突起、頸部7条の横位沈線	針	明赤褐色2.5YR5/6	T-1 7	V層上面	風化激しい	
	71	N C	台付鉢	口縁部	平坦口縁、上位3条、下位3条の 横位沈線、内面2条の横位沈線	針	赤褐色7.5YR4/6	Q-1 8	V層上面	内面剥落	
	72	N C	台付鉢	口縁部	平坦口縁、II唇割目、上位から、 黒褐色7.5YR2/2	A	Q-1 7	V層上面	内面磨き		

表5 遺構外出土土器(6)

井戸番号	分類	器形	部位	文様	胎土	色調	焼成	グリッド	層位	備考	
54	73 N C	台付鉢	口縁部	4条の横位沈線、網目状文、3条の横位沈線、内面3条の横位沈線	黒褐7.5Y32/2	A	Q-17	V層上面	内面磨き		
74	N C	台付鉢	口縁部	平坦口縁、口唇割目、4条の横位沈線、1条の網目状文、2条の横位沈線、R-L網文	黒褐7.5Y22/2	A			内面磨き		
75	N C	台付鉢	胴部	2条の横位沈線、R-L網文	針	赤褐5Y4/6	Q-18	V層上面	内面剥落		
76	N D	台付鉢か高杯	口縁部	山形突起、山形に沿って内外面1条の横位沈線、R-L網文	黒褐7.5Y22/2	A			内面磨き		
77	N C	台付鉢	口縁部	平坦口縁、口唇割目、4条の横位沈線、1条の網目状文、3条の横位沈線、R-L網文	黒褐7.5Y22/2	A	Q-17	V層上面	内面磨き		
78	N D	台付鉢?	底部	網文磨耗	ss	黒褐7.5Y22/2		Q-17	上面	内面剥落、酸化鉄付着	
79	N D	台付鉢	台部	台部下端波状、波状に沿って3条波状沈線、1条の横位沈線	ss	ぶい黄褐10Y8 7/3	Q-18	V層上面	三角孔の透かし彫りあり		
80	N D	台付鉢	台部	4条の横位沈線間に刻目、下端に刻目	ss	明赤褐2.5Y5/6	R-05	V層上面	内面磨き		
81	N D	台付鉢	台部	上位1条、下位3条の横位沈線	ss	黒褐7.5Y22/2	Q-17	V層上面	風化美しい		
82	N D	台付鉢	台部	上位1条、下位1条の横位沈線	針	明赤褐2.5Y5/6	T-17	V層上面	内面なで、酸化鉄付着		
83	N D	台付鉢	台部	台と底部の境に2条の横位沈線	針	赤褐5Y4/6	Q-18	V層上面	内面磨き		
84	V	蓋		粘土組の貼付け、頂部には粘土粒、その他は多条の横位沈線	ss	暗褐7.5Y3/3	Q-18	V層上面	内面磨き		
85	V	裏か壺	胴部	5条の横位沈線、下位に網目状文、R-L網文	暗褐7.5Y3/3	A	T-19	V層	内面磨き		
86	V	裏か壺	胴部	2条の横位沈線、下位に網目状文、R-L網文(銅鉢)	ss	赤褐5Y4/6	T-16	V層上面	内面剥落		
87	V	裏か壺	胴部	網目状文、2条の横位沈線、R-L網文	暗褐5Y6/6		Q-17	V層上面	内面磨き		
88	V	裏か壺	胴部	2条と3条の横位沈線の間に網目状文	ss	赤褐5Y4/6		V層上面	内面なで		
89	V	裏か壺	胴部	4条の横位沈線、網目状文	ss	暗褐7.5Y3/3	Q-18	V層	内面剥落		
90	V	裏か壺	胴部	5条、3条の横位沈線の間に網目状文、R-L網文充満	ss	暗褐7.5Y3/3	T-19	V層	内面剥落		
91	V	裏か壺	胴部	2条、3条の横位沈線の間に網目状文	ss	赤褐5Y4/6		T-19	V層	内面磨き	
55	92 V	裏か壺	胴部	2条の横位沈線、上位に網目状文、下位に2条1単位の網目状文2列	ss	赤褐5Y4/6		T-19	V層	内面剥落	
93	V	裏か壺	胴部	列点文の下3条、1条の横位沈線、1条の網目状文	ss	暗褐7.5Y3/3		R-05		内面剥落	
94	V	裏か壺	胴部	2条、4条の横位沈線の間に列点文	針	ぶい黄褐10Y8 7/3	Q-18	V層上面	内面なで		
95	V	裏か壺	胴部	上下に3条の横位沈線、上に粘土粒貼付	暗褐7.5Y3/3		Q-18	V層上面	内面剥落、なで?		
96	V	裏か壺	胴部	6条の横位沈線	ss	暗褐7.5Y3/3	Q-18	V層上面	内面磨き		
97	V	裏か壺	胴部	3条の横位沈線	ss	赤褐5Y4/6	Q-18	V層上面	内面剥落		
98	V	裏か壺	胴部	R-L網文地に2条の横位沈線	ss	暗褐5Y6/6	Q-18	V層上面	内面磨き		
99	V	裏か壺	胴部	3条の横位沈線、R-L網文	ss	赤褐5Y4/6	T-17	V層上面	内面剥落		
100	V	裏か壺	胴部	1条の横位沈線、通常差異形?その間R-L網文充満	ss	赤褐5Y4/6	Q-18	V層	内面剥落		
101	V	裏か壺	胴部	3条の横位沈線	針	赤褐5Y4/6	Q-18	V層上面	内面剥落		
102	V	裏か壺	胴部	1条の横位沈線、下位に網目状文、R-L網文	ss	赤褐5Y4/6	R-06	V層上面	内面剥落		
103	V	裏か壺	胴部	R-L網文	ss	赤褐5Y4/6	Q-18	V層上面	内面剥落		
104	V	裏か壺	胴部	R-L網文	ss	赤褐5Y4/6	Q-18	V層上面	内面剥落		

表6 垂柳遺跡出土縄文土器(1)

種別	番号	分類	器形	部位	文様	胎土	色調	焼成	グリッド	層位	備考
57	1	I B	壺	ほぼ完形	波状口縁、波状頂部ねじり。頸部横位沈線。肩・腹部曲沈線(牛角状)、磨消繩文。R-L繩文	灰白10Y88/1	A	Q~R-27	堆積	内面なで、穿孔有り	
	2	I A	深鉢	口縁～頸部	平坦口縁、平行沈線、円状沈線文	針	灰白10Y87/1	A	Q~R-27	堆積	内面なで
	3	I B	壺	口縁～頸部	平坦口縁、横位沈線、磨消繩文、L-R繩文		にぶい壺5Y86/4	A	Q~R-27	堆積	内面なで
	4	I B	壺	肩部～底部	磨消繩文、L-R繩文？		にぶい壺5Y86/4	A	Q~R-27	堆積	内面なで
	5	I B	壺	肩部	磨消繩文、L-R繩文？		にぶい壺5Y86/4	A	Q~R-27	堆積	内面なで
	6	I B	壺	肩部	磨消繩文、L-R繩文		赤褐色5Y84/6	A	Q~R-27	堆積	内面なで
	7	I B	壺	底部	無文	針	にぶい壺5Y86/4	A	Q~R-27	堆積	内面磨き？
	8	II A 1	深鉢	口縁部	平坦口縁、横位沈線		赤褐色5Y84/6	A	Q~R-27	堆積	内面磨き？
	9	II A 1	深鉢	口縁部	平坦口縁、平行沈線、円状沈線文		赤褐色5Y84/6	A	Q~R-27	堆積	内面なで？
	10	II A 1	深鉢	肩部	円状沈線文、磨消繩文？		赤褐色5Y84/6	A	Q~R-27	堆積	内面磨き？
	11	II A 1	深鉢	肩部	円状沈線文、磨消繩文		にぶい壺5Y86/4	A	Q~R-27	堆積	内面へらなで
	12	II A 1	深鉢	肩部	円状沈線文、弧状沈線		赤褐色5Y84/6	A	Q~R-27	堆積	内面なで、酸化鉄付着
	13	II A 1	深鉢	肩部	横位沈線、磨消繩文		赤褐色5Y84/6	A	Q~R-27	堆積	内面へらなで
	14	II A 1	深鉢	肩部	横位沈線、磨消繩文		赤褐色5Y84/6	A	Q~R-27	堆積	内面磨き？
	15	II A 1	深鉢	肩部	張状沈線、磨消繩文		にぶい壺5Y86/4	A	Q~R-27	堆積	内面磨き？
	16	II A 1	深鉢	肩部	横位沈線、磨消繩文		灰白10Y87/1	A	Q~R-27	堆積	酸化鉄付着、内面磨き？
	17	II A 1	深鉢	肩部	平行沈線、磨消繩文		赤褐色5Y84/6	A	Q~R-27	堆積	酸化鉄付着、内面なで
	18	II A 1	深鉢	口縁部	平坦口縁、弧状沈線		赤褐色5Y84/6	A	Q~R-27	堆積	内面磨き
	19	II A 1	深鉢	口縁～頸部	平坦口縁、無文		赤褐色5Y84/6	A	Q~R-27	堆積	内面磨き？
	20	II A 1	深鉢	肩部	弧状沈線、磨消繩文	針	にぶい壺5Y86/4	A	Q~R-27	堆積	内面磨き？
	21	II A 2	深鉢	口縁～肩部	平坦口縁、平行沈線、半円状沈線文、円状沈線文(ハサミ状)、磨消繩文		にぶい壺5Y86/4	A	Q~R-27	堆積	内面なで、酸化鉄付着
	22	II A 2	深鉢	肩部	横位沈線		灰褐色10Y86/2	A	Q~R-27	堆積	内面なで
	23	II A 2	深鉢	肩部	円状沈線文、磨消繩文？		灰褐色10Y86/2	A	Q~R-27	堆積	内面なで
58	24	II A 2	深鉢	肩部～底部	無文	針	灰褐色10Y86/2	A	Q~R-27	堆積	内面剥落
	25	II A 3	深鉢	口縁～頸部	平坦口縁、平行沈線、磨消繩文？L-R繩文		暗褐色7.5Y83/3		Q~R-27	堆積	内面磨き？
	26	II A 3	深鉢	口縁～頸部	平坦口縁、横位沈線、磨消繩文、L-R繩文		暗褐色7.5Y83/3		Q~R-27	堆積	内面磨き？
	27	II A 3	深鉢	口縁～頸部	平坦口縁、横位沈線、磨消繩文、L-R繩文		暗褐色7.5Y83/3		Q~R-27	堆積	内面剥落
	28	II A 3	深鉢	口縁～頸部	平坦口縁、平行沈線、斜め沈線、磨消繩文？L-R繩文		暗褐色7.5Y83/3		Q~R-27	堆積	内面磨き？
	29	II A 3	深鉢	口縁部	平坦口縁、平行沈線、斜め沈線、磨消繩文？L-R繩文		暗褐色7.5Y83/3		Q~R-27	堆積	内面磨き？
	30	II A 3	深鉢	口縁～頸部	平坦口縁、横位沈線		暗褐色7.5Y83/3		Q~R-27	堆積	内面磨き？
	31	II A 3	深鉢	肩部	横位沈線、斜め沈線、磨消繩文、L-R繩文		灰白10Y87/1		Q~R-27	堆積	内面なで？
	32	II A 3	深鉢	肩部	横位沈線、2条1單位の円状沈線文、磨消繩文、L-R繩文？		暗褐色7.5Y83/3		Q~R-27	堆積	内面磨き？
	33	II A 3	深鉢	肩部	平行沈線、磨消繩文、L-R繩文	5.5	暗褐色7.5Y83/3		Q~R-27	堆積	内面磨き
	34	II A 3	深鉢	肩部	横位沈線、磨消繩文、L-R繩文		暗褐色7.5Y83/3		Q~R-27	堆積	内面磨き？
	35	II A 4	深鉢	口縁	平坦口縁、斜め沈線、R-L繩文		灰白10Y87/1	A	Q~R-27	堆積	内面剥落
	36	II A 4	深鉢	口縁部	平坦口縁、横位沈線、沈線に沿って押し引きの刻突文、R-L繩文	針	灰白10Y87/1	A	Q~R-27	堆積	内面磨き

表6 垂柳遺跡出土縄文土器(2)

神況	番号	分類	器形	部位	文様	胎土	色調	焼成	グリッド	層位	備考
58	37	II A 4	深鉢	胴部	曲沈縦文、曲沈線に沿って押し引き刺突文、磨消繩文、R-L繩文	灰白10Y7/1	A	Q~R-27	堆積	内面磨き	
	38	II A 4	深鉢	頸~肩部	曲沈縦文、曲沈線に沿って押し引き刺突文、磨消繩文、R-L繩文	針	灰白10Y7/1	A	Q~R-27	堆積	内面磨き
	39	II A 4	深鉢	胴部	曲沈縦文、曲沈線に沿って押し引き刺突文、磨消繩文、R-L繩文	灰白10Y7/1	A	Q~R-27	堆積	内面磨き	
59	40	II A 4	深鉢	口縁部	渡状口縁、口唇S字状のねじり、横位沈線、弧状沈線、多数の刺突文、L-R繩文	s.s	灰黄褐10Y6/2	A	Q~R-27	堆積	口唇上部磨き、内面磨き?
	41	II A 4	深鉢	口縁部	渡状口縁、口唇S字状のねじり、横位沈線、多数の刺突文、L-R繩文	s.s	灰白10Y7/1	A	Q~R-27	堆積	口唇上部磨き、内面磨き
	42	II A 4	深鉢	胴部	横位沈線、長円状沈線文、磨消繩文、R-L繩文?	s.s	灰黄褐10Y6/2	A	Q~R-27	堆積	内面磨き?
43	43	II A 4	深鉢	口縁部	平坦口縁、小円形刺突文(中が空洞の工具)、L-只繩文?	赤褐5Y4/6	A	Q~R-27	堆積	内面磨き	
	44	II A 4	深鉢	口縁部	平坦口縁、小円形刺突文(中が空洞の工具)、L-只繩文	にぶい橙5Y8/4	A	Q~R-27	堆積	内面磨き	
	45	II A 4	深鉢	口縁部	平坦口縁、口縁内側小円形刺突文(中が空洞の工具)、横位沈線、磨消繩文、L-R繩文	にぶい橙5Y8/4	Q~R-27	堆積		内面なで	
46	46	II A 4	深鉢	口縁~頸部	平坦口縁、口縁内側小円形刺突文(中が空洞の工具)、横位沈線、磨消繩文、L-R繩文	にぶい橙5Y8/4	Q~R-27	堆積		内面なで	
	47	II B 1	壺	胴部	円状沈縦文、平行沈線、磨消繩文、L-R繩文	にぶい橙5Y8/4	A	Q~R-27	堆積	内面へらなで	
	48	II B 1	壺	頸~肩部	平行沈線、磨消繩文、L-R繩文	にぶい橙5Y8/4	A	Q~R-27	堆積	内面なで	
49	49	II B 1	壺	胴部	平行沈線、磨消繩文、横文削形針	針	にぶい橙5Y8/4	A	Q~R-27	堆積	内面磨き?
	50	II B 1	壺	胴部	長円状沈線文、横位沈線、磨消繩文、L-R繩文?	赤褐5Y4/6	A	Q~R-27	堆積	内面磨き	
	51	II B 2	壺	頸~胴部	円状沈縦文(ハサミ状)、L-R繩文	にぶい橙5Y8/4	A	Q~R-27	堆積	内面なで、黒漆	
52	52	II B 2	壺	胴部	曲沈縦文、L-R繩文	赤褐5Y4/6	A	Q~R-27	堆積	内面へらなで	
	53	II B 2	壺	胴部	円状沈縦文(ハサミ状)、長円形文(種子状)、磨消繩文、L-R繩文	赤褐5Y4/6	A	Q~R-27	堆積	外表面磨き、内面なで、黒漆	
	54	II C	鉢	口縁~胴部	平行沈線、磨消繩文、L-R繩文	針	赤褐5Y4/6	A	Q~R-27	堆積	外表面磨き
55	55	II C	鉢	胴部	円状沈縦文、曲沈縦文(S字状)、磨消繩文、R-L繩文	針	灰白10Y7/1	A	Q~R-27	堆積	内面なで
	56	II C	鉢	胴部	円状沈縦文、曲沈縦文、R-L繩文	針	赤褐5Y8/3	A	Q~R-27	堆積	内面なで
	57	II C	鉢	口縁部	平坦口縁、磨消繩文、L-R繩文	にぶい橙5Y8/4	A	Q~R-27	堆積	内面なで	
58	58	II C	鉢	胴部	磨消繩文、L-R繩文	黒褐7.5Y8/2	A	Q~R-27	堆積	内面なで	
	59	II C	鉢	口縁部	横位沈線、磨消繩文、L-R繩文	灰白10Y7/1	A	Q~R-27	堆積	内面磨き	
	60	II C	鉢	口縁部	横位沈線、R-L繩文	灰白10Y7/1	A	Q~R-27	堆積	内面なで	
61	61	II C	鉢	胴部	平行沈線、R-L繩文	灰白10Y7/1	A	Q~R-27	堆積	内面なで	
	62	III A	深鉢?	口縁部	平坦口縁、横位沈線	針	赤褐5Y4/6	Q~R-27	堆積	内面なで	
	63	III A	深鉢?	口縁部	平坦口縁、平行沈線、縱位沈線	赤褐5Y4/6	Q~R-27	堆積	内面へらなで		
64	64	III A	深鉢?	口縁部	波状口縁、口唇-R繩文、波状口縁に沿って曲沈線、磨消繩文?	灰白10Y7/1	A	Q~R-27	堆積	内面磨き	
	65	III A	深鉢?	胴部	波状沈縦文、磨消繩文、L-R繩文?	灰黄褐10Y6/2	A	Q~R-27	堆積	内面なで、酸化鉄付着	
	66	III A	深鉢?	底部	底面網代痕	s.s	赤褐5Y4/6	Q~R-27	堆積	内面なで	
67	67	III A	深鉢?	胴部	斜め沈縦文(交差)、磨消繩文、R-L繩文	灰黄褐10Y6/2	Q~R-27	堆積	内面なで、酸化鉄付着		

表6 垂柳遺跡出土縄文土器(3)

件名	番号	分類	器形	部位	文様	地土	色調	焼成	グリッド	部位	備考
60	68	ⅢB	深鉢?	頸~胴部	横位沈線、磨消繩文、R-L繩文	灰白10YR7/1	A	Q~R-27	堆層	内面磨き	
	69	ⅢB	深鉢?	口縁部	平坦口縁、磨消繩文、L-R繩文	ss	赤褐色5YR4/6		Q~R-27	堆層	内面磨き
	70	ⅢB	深鉢?	口縁部	平坦口縁、磨消繩文、R-L繩文	ss	暗褐色7.5YR3/3		Q~R-27	堆層	内面磨き
	71	ⅢB	深鉢?	口縁部	平坦口縁、口唇し-R繩文?その針	にぶい橙5YR6/4	A	Q~R-27	堆層	内面なで?	
					他はL-R繩文						
	72	ⅢB	深鉢?	胴部	磨消繩文、R-L繩文	ss	赤褐色5YR4/6		Q~R-27	堆層	内面磨き
	73	ⅢB	深鉢?	頸~胴部	磨消繩文、R-L繩文	ss	赤褐色5YR4/6		Q~R-27	堆層	内面磨き
	74	ⅢB	深鉢?	胴部	横位沈線、磨消繩文、L-R繩文	ss	赤褐色5YR4/6	A	Q~R-27	堆層	内面磨き
	75	ⅢB	深鉢?	胴部	磨消繩文?、L-R-R-L繩文	ss	赤褐色5YR4/6		Q~R-27	堆層	内面磨き?
	76	ⅢB	深鉢?	胴部	L-R繩文?	ss	にぶい橙5YR6/4	A	Q~R-27	堆層	内面なで、酸化鉄付着
	77	ⅢB	深鉢?	胴部	磨消繩文、R-L繩文	ss	赤褐色5YR4/6		Q~R-27	堆層	内面磨き
	78	ⅢC	深鉢?	口縁~頸部	平坦口縁、無文	灰黃褐色10YR6/2	A	Q~R-27	堆層	内面磨き	
	79	ⅢC	深鉢?	口縁部	複状口縁、頭部突起有り	ss	赤褐色5YR4/6	A	Q~R-27	堆層	内面なで
	80	ⅢC	深鉢?	口縁部	平坦口縁、磨消繩文?		暗褐色7.5YR3/3	A	Q~R-27	堆層	内面磨き?
	81	ⅢC	深鉢?	口縁~頸部	平坦口縁、無文	ss	にぶい橙5YR6/4	A	Q~R-27	堆層	内面ヘラなで
	82	ⅢC	深鉢?	口縁部	平坦口縁、無文	ss	にぶい橙5YR6/4	A	Q~R-27	堆層	内面ヘラなで
	83	ⅢC	深鉢?	口縁部	平坦口縁、無文	灰黃褐色10YR6/2		Q~R-27	堆層	内面なで	
	84	ⅢC	深鉢?	口縁部	平坦口縁、無文、磨消繩文?		にぶい橙5YR6/4	A	Q~R-27	堆層	内面磨き?
	85	ⅢC	深鉢?	口縁~頸部	平坦口縁、無文	ss	灰白色10YR7/1		Q~R-27	堆層	内面なで
	86	ⅢC	深鉢?	口縁部	平坦口縁、磨消繩文?	ss	赤褐色5YR4/6	A	Q~R-27	堆層	内面磨き?
	87	ⅢC	深鉢?	底部	無文	ss	赤褐色5YR4/6	A	Q~R-27	堆層	内外面ヘラなで?
											酸化鉄付着
	88	ⅢC	深鉢?	底部	無文		にぶい橙5YR6/4	A	Q~R-27	堆層	外内面磨き
	89	ⅢD	不明	口縁部	平坦口縁、口唇R-L?繩文、横位沈線、R-L繩文地に「く」の反対状文様		赤褐色5YR4/6	A	Q~R-27	堆層	内面磨き
	90	ⅢD	不明	口縁部	平坦口縁、平行沈線、沈線間斜め網目文		赤褐色5YR4/6	A	Q~R-27	堆層	内面なで?
	91	ⅢD	不明	口縁部	平坦口縁、平行沈線、沈線間に斜めの網目文		にぶい橙5YR6/4	A	Q~R-27	堆層	内面なで?
	92	ⅢD	不明	口縁~頸部	平坦口縁、平行沈線、沈線間斜め網目文		赤褐色5YR4/6		Q~R-27	堆層	内面磨き、酸化鉄付着
	93	ⅢD	不明	胴部	平行沈線、斜め沈線、磨消繩文	ss	灰白色10YR7/1		Q~R-27	堆層	内面なで
	94	ⅢD	不明	胴部	横位沈線、斜め沈線、磨消繩文		灰白色10YR7/1		Q~R-27	堆層	内面なで